

服 部 墳 墓 群

姫鳥線整備促進関連事業に係る
服部16~19・34・36号墳、服部1~3号墓の発掘調査



0100858762

2001. 3

財團法人 烏取市文化財團

正 誤 表

「服部墳墓群」2001.3

頁	行 数 等	誤	正
12	上から16行目	北東側は比較的……	北西側は比較的……
12	上から21行目	中央より北西側から……	中央より北東側から……
26	上から17行目	N-45°-E程度に……	N-70°-W程度に……
72	上から22行目	第1～3主体部と……	第1～2主体部と……
73	上から5行目	小片(第48図-1～3)以外……	小片(第52図-1～3)以外……
74	上から2行目	位置と現状	位置と現状
95	上から20行目	倉見古墳等と比較検討……	倉見古墳群等と比較検討……
96	「服部墳墓群調査一覧表」中服部16号墳 第4主体部方位	N-45°-W	N-70°-W
96	「服部墳墓群調査一覧表」中服部18号墳 墳丘規模	直径1.8 高さ16.5	直径16.5 高さ1.8
写真図版 図版4	最上段キャプション	服部18号墳第1主体部……	服部18号墳第1主体部……
写真図版 図版17	最上段キャプション	服部18号墳第2主体部 西側小口・遺物出土状況	服部18号墳第2主体部 西側・遺物出土状況

服 部 墳 墓 群

姫鳥線整備促進関連事業に係る
服部16~19・34・36号墳、服部1~3号墓の発掘調査

2001. 3

財団法人 烏取市文化財団

序 文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、山陰地方の中核都市として発展してきた、人口15万人あまりを擁する地方都市です。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した服部墳墓群の調査は、姫鳥線整備促進関連事業に係る発掘調査として、平成11年度から調査を行ってきました。調査の結果、弥生時代後期の墳墓や古墳時代前期から後期にかけての古墳とともに各種副葬品など貴重な遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 西尾迢富

例 言

1. 本書は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業の事前調査として実施した服部墳墓群の発掘調査報告書である。
 2. 本発掘調査は、財団法人鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人鳥取市文化財団（平成12年度 組織変更）鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成11年度、12年度に実施した。
 3. 発掘調査を実施した墳墓群の所在地は、鳥取市服部、本高である。
 4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
 5. 現地実測、図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測は、杉谷美恵子を中心として行った。
 6. 本書の執筆は、前田 均、山田真宏、藤本隆之、谷口恭子が行い、文末に執筆者名を記した。出土遺物観察表は杉谷美恵子が作成し、遺物の写真撮影は山田が行った。編集は谷口が担当し、杉谷、木原美和がこれを補佐した。
 7. 現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。記して厚く感謝いたします。
- 鳥取県土木部道路課、姫路鳥取線用地事務所、財団法人鳥取開発公社、鳥取市建設部土木建設課、
JA鳥取いなばカントリーエレベーター、懸樋 勝雄、依藤 利一、森下 真雄（順不同、敬称略）

凡 例

1. 本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海拔標高である。
2. 今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、古墳番号、主体部番号、取上げ順による遺物番号（遺物台帳登録番号）、取上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。
なお、服部14、15、35号墳については当初古墳として調査を行ったが、その後の検討の結果、以下のように名称を変更し、本報告書は新名称で記述している。

(旧名称)	(新名称)
服部14号墳	服部2号墓
服部15号墳	服部1号墓
服部35号墳	服部3号墓

本文目次

序文

例言

凡例

第1章 発掘調査の経緯

1. 発掘調査に至る経過 1

2. 発掘調査の経過 1

3. 調査の組織・体制 2

第2章 遺跡の位置と歴史的環境 3

第3章 調査の結果

第1節 服部墳墓群の立地と構成 11

第2節 古墳の調査

1. 服部16号墳 12

2. 服部17号墳 29

3. 服部18号墳 35

4. 服部19号墳 43

5. 服部34号墳 49

6. 服部36号墳 53

7. その他の埋葬施設と出土遺物 59

第3節 弥生時代の墳墓の調査

1. 服部1号墓 65

2. 服部2号墓 74

3. 服部3号墓 76

第4節 その他の遺構 83

(出土遺物観察表) 87

第5節 まとめ 92

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 服部墳墓群周辺遺跡分布図	7	第34図 服部34号墳第1主体部出土遺物実測図	52
第2図 服部墳墓群分布図	9	第35図 服部34号墳周辺出土遺物実測図	52
第3図 服部墳墓群調査地地形図	13・14	第36図 服部36号墳第1主体部出土遺物実測図	53
第4図 服部16・36号墳、服部1・2・3号墓墳丘遺存図	15・16	第37図 服部36号墳第2主体部出土遺物実測図	54
第5図 服部17・18・19号墳墳丘遺存図	17	第38図 服部36号墳東裾部出土遺物拓影	54
第6図 服部16号墳墳丘断面図	18	第39図 服部36号墳、服部3号墓墳丘断面図	55・56
第7図 服部16号墳第1主体部実測図	19・20	第40図 服部36号墳第1主体部実測図	57・58
第8図 服部16号墳第2主体部実測図	21・22	第41図 服部36号墳第2主体部実測図	61・62
第9図 服部16号墳第3主体部実測図	23・24	第42図 S X-01実測図	60
第10図 服部16号墳第4主体部実測図	25	第43図 S X-02実測図	63
第11図 服部16号墳出土遺物実測図(1)	27	第44図 S X-01出土遺物実測図	64
第12図 服部16号墳出土遺物実測図(2)	28	第45図 C 18区出土遺物実測図	64
第13図 服部17号墳第1主体部出土遺物実測図	29	第46図 S X-02出土遺物実測図	64
第14図 服部17号墳第2主体部出土遺物実測図	29	第47図 服部1号墓墳丘断面図	66
第15図 服部17号墳墳丘断面図	30	第48図 服部1号墓第1主体部実測図	67・68
第16図 服部17号墳第1主体部実測図	31・32	第49図 服部1号墓第2主体部実測図	69
第17図 服部17号墳第2主体部実測図	33・34	第50図 服部1号墓第3主体部実測図	70
第18図 服部17号墳墳裾部出土遺物実測図	35	第51図 服部1号墓第4主体部実測図	71
第19図 服部18号墳墳丘断面図	36	第52図 服部1号墓出土遺物実測図	72
第20図 服部18号墳第1主体部実測図	37・38	第53図 服部1号墓出土遺物実測図	73
第21図 服部18号墳第2主体部実測図	39・40	第54図 服部2号墓墳丘断面図	74
第22図 服部18号墳第1主体部上層出土遺物実測図	41	第55図 服部2号墓第1主体部実測図	75
第23図 服部18号墳第1主体部出土遺物実測図	41	第56図 服部3号墓第1主体部実測図	77・78
第24図 服部18号墳第2主体部出土遺物実測図	42	第57図 服部3号墓第1主体部出土遺物実測図	79
第25図 服部19号墳第1主体部出土遺物実測図	43	第58図 服部3号墓第2主体部実測図	80
第26図 服部19号墳墳丘断面図	44	第59図 服部3号墓第2主体部出土遺物実測図	81
第27図 服部19号墳第1主体部実測図	45・46	第60図 服部3号墓第3主体部実測図	82
第28図 服部19号墳第2主体部実測図	47	第61図 S K-01実測図	83
第29図 服部19号墳第2主体部出土遺物実測図	48	第62図 S K-02実測図	84
第30図 服部19号墳周溝出土遺物実測図	48	第63図 S K-03実測図	85
第31図 服部34号墳墳丘遺存図	49	第64図 S K-04実測図	86
第32図 服部34号墳墳丘断面図	50	第65図 C 9調査区実測図	86
第33図 服部34号墳第1主体部実測図	51		

図版目次

- 図版1 服部墳墓群調査地遠景（東上空から）
服部墳墓群調査地遠景（北西上空から）
- 図版2 服部16号墳、服部1・2号墓全景（北西上空から）
服部17・18・19号墳全景（東上空から）
- 図版3 服部16号墳、服部1・2号墓全景（北東上空から）
服部17・18・19号墳全景（北上空から）
- 図版4 服部18号墳第1主体部上層出土遺物
服部19号墳第1主体部出土遺物
服部3号墓第1主体部出土遺物
- 図版5 服部16号墳調査前（南東から）
服部16号墳調査後（北西から）
服部16号墳墳丘断面F-F'（南西から）
- 図版6 服部16号墳墳丘断面F-F'（南から）
服部16号墳第1主体部埋土状況（南西から）
服部16号墳第1主体部検出状況（南東から）
- 図版7 服部16号墳第2主体部埋土状況（南西から）
服部16号墳第2主体部検出状況（南東から）
服部16号墳第3主体部埋土状況（南東から）
- 図版8 服部16号墳第3主体部検出状況（北西から）
服部16号墳第4主体部検出状況（南西から）
服部16号墳南東側遺物出土状況（南西から）
- 図版9 服部17号墳調査前（西から）
服部17号墳調査後（南東から）
服部17号墳全景（南西から）
- 図版10 服部17号墳東裾断面J-J'（南から）
服部17号墳第1・2主体部検出状況（南西から）
服部17号墳第1主体部埋土状況（北東から）
- 図版11 服部17号墳第1主体部埋土状況（西から）
服部17号墳第1主体部検出状況（南東から）
服部17号墳第2主体部埋土状況（東から）
- 図版12 服部17号墳第2主体部検出状況（南東から）
服部17号墳第2主体部遺物出土状況（北東から）
服部17号墳第2主体部遺物出土状況（南東から）
- 図版13 服部18号墳調査前（西から）
服部18号墳調査後（北東から）
服部18号墳全景（西から）
- 図版14 服部18号墳東裾断面L-L'（北から）
服部18号墳第1・2主体部検出状況（西から）
服部18号墳第1主体部埋土状況（西から）
- 図版15 服部18号墳第1主体部検出状況（西から）
服部18号墳第1主体部遺物出土状況（西から）
服部18号墳第1主体部遺物出土状況（北西から）
- 図版16 服部18号墳第2主体部埋土状況（南東から）
服部18号墳第2主体部埋土状況（東から）
服部18号墳第2主体部検出状況（北西から）
- 図版17 服部18号墳第2主体部西側小口・遺物出土状況（東から）
服部18号墳第2主体部西側遺物出土状況（北西から）
服部18号墳第2主体部西側遺物出土状況（北から）
- 図版18 服部18号墳第2主体部西側遺物出土状況（北西から）
服部18号墳第2主体部東側遺物出土状況（西から）
服部18号墳第2主体部東側遺物出土状況（南東から）
- 図版19 服部19号墳調査前（南東から）
服部19号墳調査後（北東から）
服部19号墳東側周溝埋土状況（北から）
- 図版20 服部19号墳第1主体部埋土状況（南東から）
服部19号墳第1主体部埋土状況（北東から）
服部19号墳第1主体部検出状況（南東から）
- 図版21 服部19号墳第1主体部南西側裏込石検出状況（北東から）
服部19号墳第1主体部遺物出土状況（北東から）
服部19号墳第1主体部遺物出土状況（北東から）
- 図版22 服部19号墳第2主体部埋土状況（西から）
服部19号墳第2主体部土器棺検出状況（北から）
服部19号墳第2主体部棺内状況（北から）
- 図版23 服部34号墳調査前（西から）
服部34号墳調査後（西から）
服部34号墳盛土状況O'-O'（南西から）
- 図版24 服部34号墳第1主体部埋土状況（東から）
服部34号墳第1主体部検出状況（北から）
服部34号墳第1主体部遺物出土状況（北から）
- 図版25 服部36号墳調査前（西から）
服部36号墳全景（南西から）
服部36号墳第1主体部埋土状況（南東から）
- 図版26 服部36号墳第1主体部検出状況（南西から）
服部36号墳第1主体部墓壙検出状況（北東から）
服部36号墳第2主体部石棺蓋石検出状況（北東から）
- 図版27 服部36号墳第2主体部遺物出土状況（北東から）
服部36号墳第2主体部石棺検出状況（南西から）
服部36号墳第2主体部石棺検出状況（北西から）

図版28	S X-01検出状況（南西から） S X-02検出状況（南西から） S X-02遺物出土状況（北西から）	図版37	S K-03検出状況（北東から） S K-04検出状況（北から） C 9 調査区全景（南から）
図版29	服部1号墓調査前（北西から） 服部1号墓調査後（北西から） 服部1号墓第1主体部埋土状況（北東から）	図版38	服部16号墳出土遺物
図版30	服部1号墓第1主体部木棺痕跡検出状況（南西から） 服部1号墓第1主体部検出状況（南東から） 服部1号墓第2主体部埋土状況（南東から）	図版39	服部17号墳出土遺物 服部17号墳墳裾出土遺物 服部17号墳第2主体部出土遺物
図版31	服部1号墓第2主体部検出状況（南西から） 服部1号墓第3主体部検出状況（南西から） 服部1号墓第4主体部検出状況（北西から）	図版40	服部18号墳第1主体部上層出土遺物 服部18号墳第1主体部出土遺物
図版32	服部2号墓調査前（南西から） 服部2号墓調査後（南から） 服部2号墓北裾断面A-A（西から）	図版41	服部18号墳第2主体部出土遺物 服部19号墳第1主体部出土遺物 服部19号墳第2主体部出土遺物 服部19号墳東側周溝出土遺物
図版33	服部2号墓第1主体部埋土状況（東から） 服部2号墓第1主体部埋土状況（南から） 服部2号墓第1主体部検出状況（南東から）	図版42	服部34号墳第1主体部出土遺物 服部34号墳周辺出土遺物 服部36号墳第1主体部出土遺物 服部36号墳第2主体部出土遺物
図版34	服部3号墓調査前（南西から） 服部3号墓調査後（南西から） 服部3号墓第1主体部供獻土器出土状況（北東から）	図版43	服部36号墳第2主体部出土遺物 服部36号墳東裾出土遺物 C 18区出土遺物 S X-02出土遺物
図版35	服部3号墓第1主体部検出状況（北西から） 服部3号墓第2主体部検出状況（北西から） 服部3号墓第3主体部検出状況（北東から）	図版44	服部1号墓第1主体部出土遺物 服部1号墓出土遺物
図版36	S K-01検出状況（南西から） S K-02埋土状況（西から） S K-02検出状況（西から）	図版45	服部3号墓第1主体部出土遺物 服部3号墓第2主体部出土遺物

第1章 発掘調査の経緯

1. 発掘調査に至る経過

服部墳墓群は、鳥取市本高、服部地内の標高約80mの独立丘陵に営まれている墳墓群である。昭和50、51年に行われた遺跡の踏査により、この丘陵上に大小様々な古墳が数十基余り分布していることが明らかとなっている。また、昭和44年(1969年)、丘陵と服部集落との間の水田から圃場整備工事によって弥生時代中～後期の土器とともに田下駄、大足が出土している。古来、丘陵の北東側に広がる菖蒲集落を中心とする平野部一帯は、律令体制下では因幡国高草郡に含まれ、白鳳時代の菖蒲庵寺の建立や、郡衙の推定地など歴史ある地域として知られている。本格的な発掘調査例としては、昭和62年に北村恵儀谷遺跡、平成3年に鈎山古墳群、平成4年に古海古墳群、翌5年に菖蒲遺跡、平成6、7年度に山ヶ鼻遺跡などがあり、古くは繩文時代後期から人の足跡がたどれる地域となってきた。

今回の発掘調査の契機となった姫鳥線整備促進関連事業は、服部墳墓群が所在する丘陵上にも姫鳥線建設予定地が計画されているものである。工事範囲内には複数の古墳が分布し、また、丘陵縁辺の微高地では遺物散布地が含まれていることから、鳥取市教育委員会が平成9年度、平成11年度と試掘調査を実施した。調査の結果、古墳の周溝状の遺構、須恵器、土師器などの遺物が確認された。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに、関係機関との路線変更等を含め種々の協議を行ったが、現状での保護、保存は難しく、記録保存で対応することになった。

2. 発掘調査の経過

服部墳墓群の発掘調査は、財団法人鳥取開発公社の委託を受け、平成11年度は財団法人鳥取市教育福祉振興会埋蔵文化財調査センターが、また、平成12年度は財団法人鳥取市文化財団埋蔵文化財調査センターが調査を行なった。

平成11年度は、資材の整備や資材搬入などの調査準備の後、平成11年11月から開始した。立ち木の伐採整理の後、18号墳から16号墳を結ぶほぼ尾根主稜線上に基準ライン(C3～C16杭)を設け、そのラインに直交あるいは角度を振って各古墳について測量杭を設定した。その後、現況の地形測量を行った。表土除去作業は尾根高位の17～19号墳から順次進め、合わせて墳丘の検出を行った。航空測量を予定していることから墳頂部分の墳丘遺存実測を行い、統いて埋葬施設の検出に取りかかった。17～19号墳はそれぞれ2基の埋葬施設を有し、土器枕に用いられた鼓形器台の年代観から、いずれも古墳時代前期の築造であることが明らかとなった。17号墳以東は、尾根稜線部を階段状の平坦部に改変されており、特に尾根下位に位置する16号墳および当初15、14号墳と呼称していた1、2号墓については、後世の道や畑作により大きく削平、改変を受けていた。1号墓は計4基の埋葬施設を検出し、主体部で決めてとなる遺物はみられなかったものの、主体部の形状、墳形、墳丘北東部で出土した土器等から弥生時代の墳墓であることが濃厚となった。また、この他に2号墓の南西部で落とし穴とみられる土坑などを検出した。こうして、主体部の状況が明らかとなった状態で、航空写真撮影および航空測量図化を行った。その後、遺物の取り上げ、墳丘の調査を行って、現地調査を平成12年3月に終了した。

平成12年度の調査は、4月に資材の点検や測量杭の座標確認等の調査準備にかかり、5月から本格的な現地調査を開始した。C16杭を基点として16号墳の北側へ張り出す尾根筋ラインに基準ラインを設け測量杭を設定した。地形測量後、尾根上位から表土除去作業を始め、補助的なトレンチを設定して3号墓(旧35号墳)、36号墳の範囲を確認し、墳丘検出を行った。また、前年度にC12～13区で確認された溝状遺構は、表土及び後世の整地層除去後の平面的な精査から、上部を削平された古墳(34号墳)の周溝と判明した。墳丘検出後、それぞれ遺存実測を行い、埋葬施設の検出を行った。その結果、36号墳で石棺を検出、3号墓は墓壙上層で検出された供獻土器から弥生墳墓であることが明らかとなった。また、C9調査区でみられた黒褐色土層は自然の落ち込み地形と判明した。

こうして、7月下旬で現地調査を完了した。検出した各遺構、遺物については適宜写真撮影や実測して記録をとり、各古墳単位や調査区全体の写真撮影を行なった。出土した遺物と写真や図面などの記録

類の整理は現地調査と並行して進め、土器については、水洗い、バインダー処理の後注記、復元作業を行なった。また、順次報告書作成作業にかかり、平成13年3月末に終了した。

3. 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成11年度 調査主体 財団法人 烏取市教育福祉振興会

理 事 長	西 尾 遼 富(鳥取市長)
副理 事 長	藤 原 繁 義
	岸 本 晟
常 務 理 事	田 村 章 三
事 務 局 長	田 中 和 夫

調査指導 烏取市教育委員会事務局 文化課

事務局 財団法人烏取市教育福祉振興会 烏取市埋蔵文化財調査センター

所 長	平 木 一 義(鳥取市教育委員会文化課長)
副 所 長	加 藤 卓 美
調査事務	秋 田 澄 世

調査担当 財団法人烏取市教育福祉振興会 烏取市埋蔵文化財調査センター

調 査 員	前 田 均
	山 田 真 宏
	藤 本 隆 之
調査補助員	神 谷 伊 鈴
	杉 本 利 子
	小 杉 雄 貴

平成12年度 調査主体 財団法人 烏取市文化財団

理 事 長	西 尾 遼 富(鳥取市長)
副理 事 長	本 田 達 郎
	米 澤 秀 介
常 務 理 事	田 中 哲 夫
事 務 局 長	小 杉 宗 雄

調査指導 烏取市教育委員会事務局 文化課

事務局 財団法人烏取市文化財団 烏取市埋蔵文化財調査センター

所 長	藤 井 博
副 所 長	加 藤 卓 美
	前 田 均
調査事務	秋 田 澄 世
	水 戸 口 直 美

調査担当 財団法人烏取市文化財団 烏取市埋蔵文化財調査センター

調 査 員	藤 本 隆 之
	谷 口 恭 子
調査補助員	杉 谷 美 恵 子
	木 原 美 和
	白 岩 千 足
	森 克 之
	矢 芝 泰 伸

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25km²、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には複雑に入り組んだ内湾状を呈していたとみられ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

今回調査した服部墳墓群は、鳥取市服部、本高地内に所在する標高80m余りの独立丘陵に立地する。JR鳥取駅から直線にして南西約3kmの位置である。この丘陵は東に千代川を望みながら中国山地から鳥取平野へと延びる丘陵の、標高294mの八町山を頂として更に北東へと延びる丘陵北端部に位置し、最北端は有富川を隔てた釣山(標高105m)である。1985年(昭和60)の鳥取国体を一つの契機として、国道29号線(旧国道53号線鳥取南バイパス)が萬蒲と服部集落の間を通って南吉成へと開通し、その沿線に店舗や各種事業所が、墳墓群の所在する丘陵の西側には東郷工業団地が進出するなど、調査地以北では開発が著しい地域となっている。ただ、南側の丘陵縁辺部においては、のどかな田園風景が広がる地域でもあるが、今後の開発によってその様相は一変するものと思われる。

縄文時代

鳥取平野において最初に人の足跡がたどるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代前期の遺跡として、砂丘後背地の低湿地に立地する福部村栗谷遺跡が中期から始まる直浪遺跡とともに、後・晩期まで続く遺跡として知られている。やや遅れ、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上に立地する美和古墳群下層遺跡から微量ながら出土している。また、服部墳墓群から西へ3km、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡は現在のところ前期末を初源とし、東桂見遺跡、布勢第1遺跡とともに後期を中心とした湖山池南東岸の低湿地遺跡群として知られる。桂見遺跡ではこれまで数度にわたる調査が行われているが、平成6、7年度に全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となった。桂見遺跡の東側に位置する布勢第1遺跡では木組みをもった水路や漆塗で木製の広口壺や腕輪が出土し、高度な漆技術が示された。また、湖山池に浮かぶ青島遺跡では、磨消縄文の浅鉢など多くの遺物が出土している。中期の遺跡としては砂丘地に立地する栃木山遺跡、追後遺跡、天神山遺跡があげられるが、中期の断片的な土器の出土にとどまる。服部墳墓群調査地から100m東の山裾に位置する本高段木遺跡では二次堆積とみられるものの晩期の突帯文土器が出土している。また、そのさらに北側、釣山の北東に広がる山ヶ鼻遺跡で、縄文時代後期後葉から晩期前葉に比定される土器群が出土している。さらに千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡では突帯文土器の良好な資料が出土しており、中期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移していく状況が窺える。布勢第1遺跡では晩期後半になると平野中心部の微高地に遺跡が進出するようになる。このように後期も後半を過ぎると遺跡は自然堤防上へ進出するようになり、晩期後半になると平野中心部の微高地へ進出するようになる。また、千代川左岸では、岩本第2遺跡、帆城遺跡、湖山第2遺跡、岩吉遺跡、大柄遺跡、里仁遺跡(仮称)等で少量の土器片が出土している。千代川東岸では、平野部に位置する大路川遺跡でトチ・アラカシなどの堅果類の詰まった貯蔵穴5基、土製耳飾、後期～晩期前半の土器等が検出され、この他晩期の土器が断片的ながら、西大路土居遺跡、古市遺跡などで出土している。

弥生時代

弥生時代に入り、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるが、前期の遺物を断片的に出土するだけで中期へ継続しない傾向がみられ、前期の実態は不透明な部分が多い。前期の遺物を出土する遺跡として、青島遺跡、湖山第1・2遺跡、布勢第1遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡、身干山遺跡などが挙げられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡では、千代水平野の自然堤

防上上の砂州を中心とした微高地に立地し、これまで数度の調査が行われている。遺跡の範囲は南北1,300m、東西800mに及び、鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡と考えられる。ただ前期の資料は数少なく、中期の遺物も今のところ断片的な出土にとどまり、昭和63~平成2年度の調査では、弥生中期中葉末から後期にかけて掘立柱建物、土坑、溝状遺構等の遺構が検出されている。この他、千代川東岸では西大路土居遺跡、富安遺跡が前期の遺物を出土する遺跡として知られる。中期中頃には自然堤防上に出現する古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里遺跡などがあり、一部岩吉遺跡の分村的な遺跡と考えられている。中期後葉になると段丘状の微高地に立地する遺跡が目立ち始め、帆城、湖山第2、布勢第2、大柄、北村恵儀谷遺跡などがその例である。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ数は飛躍的に増加するとともに遺跡内の住居も増加傾向がみられ、それぞれ古墳時代へと営まれていく。

この地域の弥生集落の一つの特徴として、玉作り関連の遺物が帆城、岩吉、秋里遺跡で出土している他、布勢第2遺跡で玉作り工房とみられる竪穴住居が検出されている。この他に、祭祀遺跡として湖山池に浮かぶ青島遺跡、湧泉に展開した塞ノ谷遺跡、弥生中期を初現とした秋里遺跡があり、高住字宮ノ谷では、扁平紐式の流水文銅鏡が出土している。

服部墳墓群周辺の弥生時代の遺跡としては、千代川水系の氾濫原にあたる平野部にあたり、服部集落西側の標高7~8m程度の微高地に服部遺跡が内包している。昭和44年、圃場整備に伴う工事によって弥生時代後期の土器とともに出土下駄、大足などの木製品が出土して他、服部遺跡出土とされる弥生時代中期の土器が鳥取県立博物館で所蔵されている。また、西側400mの丘陵裾部の微高地には北村恵儀谷遺跡が位置しており、後期を主体とする竪穴住居や土坑、掘立柱建物などが検出されている。また、北側の独立丘陵の釣山では、弥生時代後期の住居跡が検出されている。調査地から1~1.5km北の自然堤防上の微高地には、山ヶ鼻遺跡、菖蒲遺跡が位置しており、中期中葉~後期の土坑や重複する溝状遺構が検出されている他、山ヶ鼻丘陵では、中期の竪穴住居、貯藏穴が調査されている。

こうして弥生時代も後期に入ると、諸集団の統合がすすみ、千代川東岸の南部地域の勢力に対するかのように地域勢力として目覚ましい台頭がみられる。その構造を具体的に示すものとして挙げられるのが、布勢鶴指奥1号墓、第1土壙墓を中心とした桂見土壙墓群である。これらは、湖山池を望む丘陵上に突如造営され、この中でも最も古い布勢鶴指奥1号墳丘墓は後期中葉の造営で、次の時期となる西桂見墳丘墓は四隅突出型墳丘墓であるか否かは分かれるところではあるが、突出部を含め一辺64×高さ5mと傑出した規模である。続く桂見土壙墓群では調査前重機の削平・擾乱を受けた後の調査であったが、丘陵頂部に位置し、石列と地山の浅い掘削によって12mの方形形状に墓域を区画し、中心主体とみられる第1土壙墓でのガラス製勾玉、水銀朱の出土などから墳丘墓であった可能性があるとされる。この他に、千代川東岸では、桂見周辺の勢力に対峙すると考えられている郡町下坂1号墓、紙子谷遺跡門上谷1・2号墓がある。このうち門上谷1号墓は長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもち、ガラス製管玉や鉄刀などが出土している。この他、これまで調査事例の少なかった弥生時代の墳墓は、後期前葉に位置付けられる鷲山猿懸平2号墓をはじめ、土壙墓については古墳築造以前の遺構として検出される例(六部山古墳群など)もあり、弥生時代の墳墓の調査例は今後増加していくものとみられる。

古墳時代

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上に大小さまざまな古墳が造られるようになる。引き続き千代川東岸では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群などを中心として展開されるが、これらは弥生時代からの系譜を引く方墳である。桂見1号墳は長辺22m×高さ2.5m、続いて作られた2号墳は長辺28m×高さ4.5mの規模で長大な木棺から船載鏡を出土している。これらに続く主体部や副葬品等卓越した内容の古墳は今のところ明らかになっていない。10m前後の小規模古墳として倉見2~7号墳、桂見10・16号墳が調査されており、前期後半~中期初頭とやや遅れて丘陵上に造営されている。土器転用枕や弥生時代からの系譜とみられる湾曲する小口を有する木棺、舟形木棺の採用が特徴的であり但馬~丹後地方との同期の交流を窺う上で興味深い。服部墳墓群周辺では、これまでに判明しているものでは、釣山24号墳(長辺22m、方墳)、銅鏡を出土した古海40号墳を含め古海古墳群、徳尾古墳群が前期古墳として

知られている。中期になって前方後円墳としてそれぞれ未調査のため内容は不明瞭ながら、里仁29号墳(全長85m)が、やや遅れて柄間1号墳(全長92m)、前方後方墳では古海36号墳(全長67m)などが点在する。調査例としては方墳で構成される里仁古墳群があり、畿内地方の影響を強く受けた鰐付円筒埴輪が出土している。また、現在調査中の下味野古墳群では箱式石棺より鉄鋒が出土している。後期に入って小規模古墳は墳丘規模が全体的に小型化する傾向があり、支稜線上にも造られるようになる。前方後円墳として布勢1号墳(全長59m)、大熊段1号墳(全長46.5m)があり、三浦1号墳(全長36m)、桂見6号墳(全長24.5m)、釣山2号墳(全長26.4m)等のように小規模な前方後円墳の築造もみられるようになる。このように小規模な前方後円墳を比較的多く有する古墳群として良田古墳群、松原古墳群などが挙げられる。桂見古墳群では湾曲した小口穴をもつ木棺が再び採用されるなど木棺墓が主流であり、千代川右岸に比べて箱式石棺の事例が少ないようである。千代川左岸では古墳の内部構造については右岸に比較して調査例が少なく特に湖山池周辺の横穴式石室については6世紀中葉の葦岡長者古墳(吉岡1号墳)、後葉の倉見9号墳、時期不明の石場山5号墳、高住12号墳が確認されているだけである。石材の豊富な東岸と比べて全体的に横穴式石室の造営が數少なく東岸でよく見られる所謂「中高式天井石室」とは異なる石室形態をとるようである。ただ、野坂川右岸の丘陵東側斜面に立地する山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は巨石を刳り抜いた石棺式石室で7世紀中頃の築造でありその特徴的石室構造とともに数少ない後期～終末期古墳として、7世紀後半に創建されたと考えられている菖蒲廬寺につながる貴重な存在である。

古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、現在のところ古墳の立地する丘陵の後背地微高地、現集落と重なって営まれたものと推察されている。弥生時代から続く遺跡として、布勢第2遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、湖山第1、湖山第2遺跡、天神山遺跡等がある。いずれも大集落とはいからず微高地に住居跡が点在するといった状況で、西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。この他に千代川左岸では、岩吉、菖蒲、山ヶ鼻、大柄遺跡等がある。菖蒲遺跡では釣山裾の微高地に焼失住居が検出されている。しかし菖蒲・服部の平野部周辺では中期になると溝状遺構を除いて明確に古墳時代中後期に比定される遺構は7世紀に入るまでみられなくなるようである。また、この時期の特徴的な遺跡として、秋里、塞ノ谷遺跡を挙げができる。前者は古墳時代を中心として弥生後期、奈良・平安時代と祭祀色が濃く、特に多量の土師器とともに各種模造した土・石製品が出土する土器群、土器溜状遺構が特徴的である。後者は湧泉を中心に弥生～古墳時代と継続して展開され、分銅形土製品や、舟、刀等各種木製模造品が注目される。

歴史時代

7世紀に入ってからこの地域は、白鳳後期創建とされる菖蒲廬寺に象徴されるように菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅街、郡家の推定地でもあり、律令期に入つて鳥取平野西岸の中心的地域であったとされる。現在でも菖蒲集落の西に菖蒲廬寺の塔の心礎とみられる礎石があり、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ヶ鼻遺跡では、菖蒲廬寺の時期と重なる7世紀の掘立柱建物群、溝状遺構、土坑等が検出されている。千代川対岸の古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書き土器などが出土している。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝7年(755)『東大寺東南院文書』「東大寺領因幡國高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山沿いの微高地に8世紀後半の総柱建物が検出されている。しかし高庭庄の經營はうまくいかず、その後延暦20年(801)、延暦22年(803)東大寺から庄域の多くが藤原繩主、藤原藤嗣へ売却され、残りの散在する5町8反余りを中心として開発を行つたが、その後10世紀後半には完全に没落し、長保6年(1004)を最後に史料に見られなくなる。10世紀初頭から国衙領体制が成立していく中で国衙領として再編されたものと考えられ、中世には一部を高草郡の郡領寺である薬師寺(後の座光寺)が有していたと『因幡民談記』に記されている。その間の遺構として、山ヶ鼻遺跡の墨書き土器などが出土した9世紀後半の井戸や13世紀に至る多量の遺物が出土した大形土坑があり、菖蒲遺跡では9世紀後半の墨書き土器が出土している。また、岩吉遺跡では8～10世紀にかけて溜り状遺構や自然流路から567点にもおよぶ多量の墨書き土器、人

形、「天長二年(825)税帳」と記された題籠軸を含む木簡等が出土し、桂見遺跡堤谷地区では8世紀後半、9世紀後半の掘立柱建物が検出され、いずれも公の機関の存在を示唆する報告がなされている。山ヶ鼻遺跡では輸入陶磁器類が土坑や井戸から出土しており、菖蒲遺跡では、中世京都、近江庄の縁釉陶器片とともに、白磁片、青磁片が多数出土していることなどから、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあったと考えられている。

貞治3年(1364)、因幡守護に山名氏が任命される。山名氏は15世紀に入って守護所を布施に移して布施天神山城を築き、鳥取城へ移るまでの100年程の間、因幡支配の拠点とした。『大幅絵図』『因幡民談記』所載の17世紀後半の古絵図には、天神山城周辺の様子が描かれており、一部調査されて内堀や土塁、井戸、焼け落ちた建物跡等が検出されている。また、「葬地」と記された丘陵である布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群で中世墓が検出され、この他に西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡、里仁古墳群、徳尾古墳群や、中世の埋葬施設とみられる集石遺構が釣山古墳群で検出されている。また、中世の倉庫跡が布勢第2遺跡で、長さ45m以上の土壘状遺構が西桂見遺跡で検出されている。

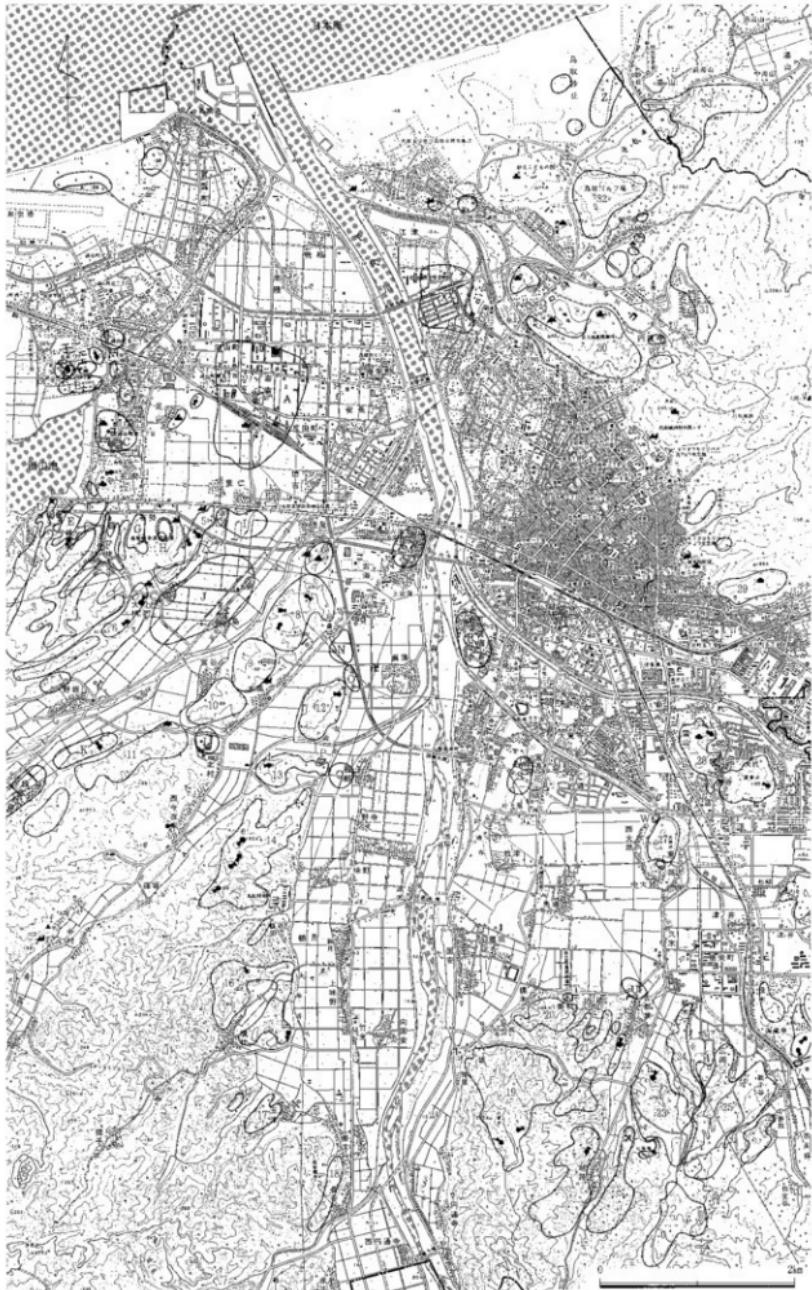
慶長5年(1600)間ケ原の合戦後鹿野城主となった亀井茲矩は、慶長年間(1596~1614年)によって行われた亀井堤と呼ばれる大規模な堤防や河原を取水口とする大井出用水を開削した。古海、菖蒲、服部地区を含む千代川西岸下流域一帯は安定した用水を確保できるようになった。

引用·主要参考文献

- 鳥取市『新修鳥取市史 第1巻 古代・中世編』1983年
平凡社『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』1992年
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩古遺跡III』1991年
鳥取市遺跡調査団『釣山古墳群発掘調査概報Ⅱ』1992年
(財)鳥取市教育福祉振興会『古海古墳群・菖蒲遺跡』1993年
(財)鳥取市教育福祉振興会『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』1996年
(財)鳥取市教育福祉振興会『桂見遺跡群』1998年
久保縦二郎「弥生時代の集落立地について」『鳥取県立博物館研究報告第27号』1990年
松井 蘭『山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期』『考古学と遺跡の保護』甘粕 健先生退官記念
論集刊行会 1996年

第1回 遺跡名称

1. 大縣段古墳群	25. 広岡古墳群	A. 岩吉遺跡	Y. 因幡寺坂ノ下遺跡
2. 古山古墳群	26. 海藏寺古墳群	B. 濱山第2遺跡	Z. 追後遺跡
3. 芦見堀墓群	27. 大路山古墳群	C. 天神山遺跡	
4. 布勢鶴指奥埴原墓群	28. 面影山古墳群	D. 西桂見遺跡	
5. 仁里古墳群	29. 立用古墳群	E. 芭見遺跡	凡例
6. 桐間古墳群	30. 雁金山古墳群	F. 東桂見遺跡	
7. 鶴尾古墳群	31. 圓鏡寺古墳群	G. 布勢第1遺跡	○ 墓群・古墳群
8. 古瀬古墳群	32. 閑地谷古墳群	H. 布勢第2遺跡	
9. 本高古墳群	33. 湯山古墳群	I. 里仁遺跡	
10. 宮谷古墳群		J. 大柄遺跡	◆ 主要古墳
11. 小森山古墳群		K. 小森山遺跡	▲ 横穴
12. 鈎山古墳群		L. 北村惠儀谷遺跡	■ 城跡
13. 脇部堀墓群	a. 西桂見埴丘墓	M. 古海遺跡	
14. 下味古墳群	b. 佛開ノ旁塚	N. 山ヶ鼻遺跡	
15. 鐘田古墳群	c. 古滝35号墳	O. 蒲薄遺跡	
16. 横佐古墳群	d. 脇部23号墳	P. 本高段木遺跡	
17. 玉津古墳群	e. 下味23号墳	Q. 脇部遺跡	
18. 長民古墳群	f. 中村須恵器窯跡	R. 古市遺跡	
19. 八坂古墳群	g. 古郡家ノ旁塚	S. 宮長竹ヶ鼻遺跡	
20. 横本古墳群	h. 六部山10号墳	T. 桂本遺跡	
21. 美和古墳群	i. 路越銅舞出土地	U. 久末・古郡家・大路川遺跡	
22. 古郡家古墳群	j. 七谷須恵器窯跡群	V. 紙谷門上谷遺跡	
23. 六部山古墳群	k. 面影山11号墳	W. 西大路上柄遺跡	
24. 木古墳群		X. 秋里遺跡	

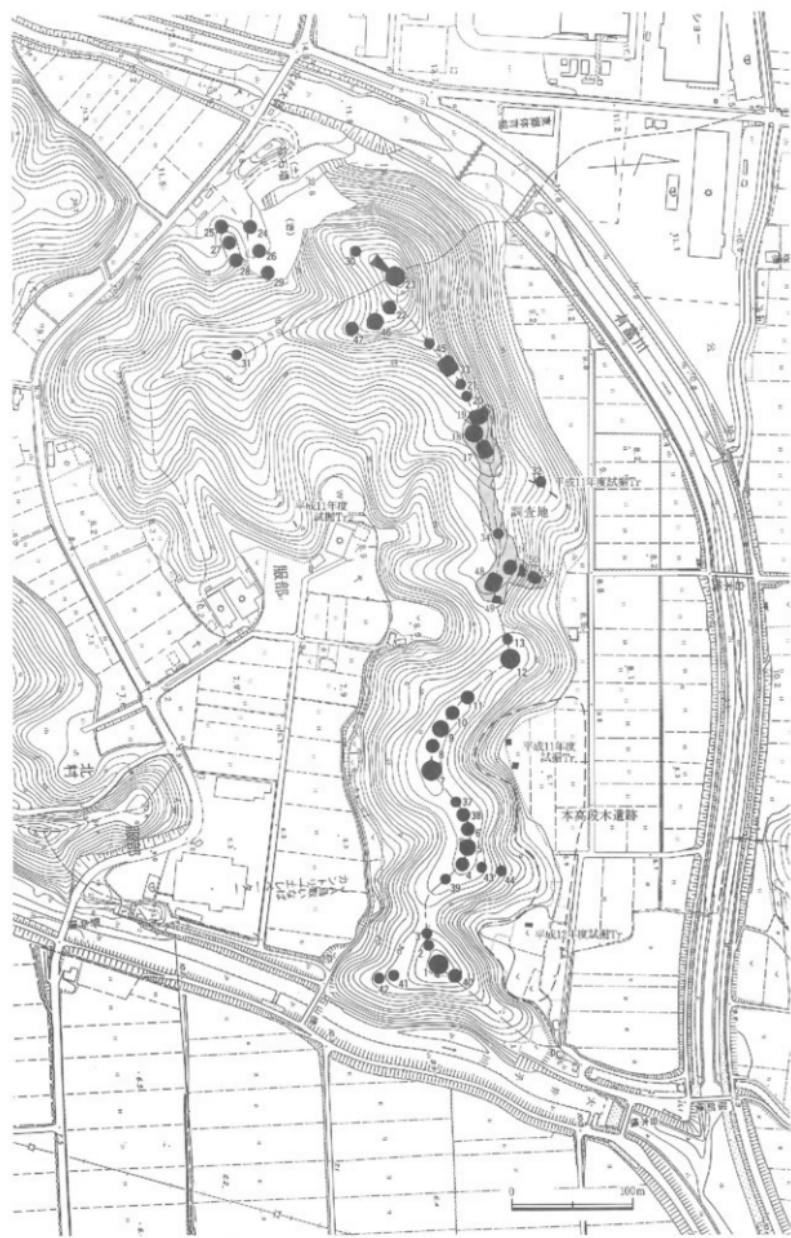


第1図 服部墳墓群周辺遺跡分布図 ($S = 1 : 50,000$)



服部墳墓群周辺航空写真（南東上空から）

平成 3 年 12 月撮影



服部墳墓群分布図対照表

番号	名 称	種類	規 横(m) 直径×高さ (長辺)	埋葬施設	出土遺物	備 考	番号
1	服部1号墳	円 墳	15×1.2				4-47
2	服部2号墳	円 墳	8×0.8				4-48
3	服部3号墳	円 墳	8×1.2				4-49
4	服部4号墳	円 墳	10×1.0				4-50
5	服部5号墳	円 墳	12×0.8				4-51
6	服部6号墳	円 墳	10×0.8				4-52
7	服部7号墳	円 墳	15×1.0				4-53
8	服部8号墳	円 墳	11×0.8				4-54
9	服部9号墳	円 墳	13×0.8				3-245
10	服部10号墳	円 墳	10×0.8				3-246
11	服部11号墳	円 墳	9×0.8				3-247
12	服部12号墳	円 墳	15×1.0				3-248
13	服部13号墳	円 墳	8×1.2				3-249
14	(服部14号墳)	——	——			欠番 服部2号墓	3-250
15	(服部15号墳)	——	——			欠番 服部1号墓	3-251
16	服部16号墳	円 墳	11.2×2.5	木棺直葬	弥生 壺	本報告書	3-252
17	服部17号墳	方 墳	14.0×2.7	木棺直葬	器台、高杯	本報告書	3-253
18	服部18号墳	円 墳	16.5×1.8	木棺直葬	器台、刀子、鍬？、銅鏡	本報告書	3-254
19	服部19号墳	円 墳	16.9×2.9	木棺直葬、土器棺	器台、刀子、壺	本報告書	3-255
20	服部20号墳	円 墳	8×0.8				3-256
21	服部21号墳	円 墳	8×0.8				3-257
22	服部22号墳	円 墳	8×0.8				3-258
23	服部23号墳	前 方 後円	全長32.5				3-259
24	服部24号墳	円 墳	横穴式石室				3-260
25	服部25号墳	円 墳	横穴式石室				3-261
26	服部26号墳	円 墳	横穴式石室				3-262
27	服部27号墳	円 墳	横穴式石室				3-263
28	服部28号墳	円 墳	横穴式石室				3-264
29	服部29号墳	円 墳	横穴式石室				3-265
30	服部30号墳	円 墳	8×0.8				3-266
31	服部31号墳					自然地形か	3-267
32	(服部32号墳)	——	——			古墳でなし	3-268
33	服部33号墳	方 墳	15×1.5				3-269
34	服部34号墳	円 墳	8.6×(0.9)		須恵器 壺杯、鉄鏡品	本報告書	
35	(服部35号墳)	——	——			欠番 服部3号墓	
36	服部36号墳	円 墳	10.4×2.5 (木棺)、石棺		須恵車、須恵器、鉄鏡、刀子		
37	服部37号墳	円 墳	7×0.8				
38	服部38号墳	円 墳	10×0.8				
39	服部39号墳	円 墳	8×0.8				
40	服部40号墳	円 墳	10×1.5				
41	服部41号墳	円 墳	7×0.8				
42	服部42号墳	円 墳	7×0.8				
43	服部43号墳	円 墳	7×0.8				
44	服部44号墳	円 墳	7×0.8				
45	服部45号墳	円 墳	7×0.8				
46	服部46号墳	円 墳	12×1.5				
47	服部47号墳	円 墳	10×1.2				
48	服部1号墓 (旧15号墳)	長方形	16.0×(1.2)	木棺直葬	弥生 器台	本報告書	3-251
49	服部2号墓 (旧14号墳)	方 形	9.0×(1.9)	木棺直葬		本報告書	3-250
50	服部3号墓 (旧35号墳)	方形?	11.0×(1.0)	木棺直葬	弥生 壺、甕、高杯、蓋 鉄鏡	本報告書	

() 未発見、推定

第3章 調査の結果

第1節 服部墳墓群の立地と構成(第2図)

服部墳墓群は、鳥取市本高、服部に所在する標高約80m弱の独立丘陵に展開する墳墓群である。中国山地から鳥取平野へ向けて延びる丘陵のうち、標高294mの「八町山」を頂として東に千代川を望みながら更に北東へと延びる丘陵、独立丘陵の北端部に位置し、有富川を北側に隔てそびえる「釣山」(標高105m)が最北端となる。服部墳墓群の所在する丘陵は、東郷谷の東御谷口部にもあたり、高路を源とする有富川が丘陵の南西から北側を通って千代川へ合流する他、東には河原の取水口から丘陵の東縁辺部を通って千代水平野へと続く大井手川(17世紀初頭に鹿野城主亀井茲矩によって治水)が北上する。また、丘陵頂部の標高80m付近からは、南西に東郷谷が一望でき、東は千代川や「大路山」(標高105m)、「面影山」をはじめ鳥取平野南部が視界一面に広がる。北側に位置する「釣山」には、総数42基からなる釣山古墳群が分布し、平成2、3年度に前方後円墳(全長26.4m)1基を含む古墳6基と弥生時代後期の豪棺、住居跡の調査が行われている。南側の丘陵には下味野古墳群が分布しており、現在までに全長73.5m(2号墳)をはじめ前方後円墳4基を含む計45基の古墳が確認されている。

服部墳墓群の所在する独立丘陵は、標高80m弱の頂部から南へ下る尾根と東方向へ600m余り延びる尾根筋とに大きく分かれ、平面逆L字形を呈する。頂部に前方後円墳である23号墳が占拠し、そこから南東へ下る尾根筋と、西面する谷筋、鞍部と高まりを繰り返しながら蛇行して東側頂部の標高36m地点へと長く延びる尾根筋とその尾根筋から南北へ派生する小尾根上に古墳、墳墓が展開する。

これまでに33基の古墳が確認されていたが、今回行った分布調査の結果、新たに14基が追加となり、墳墓群を構成する古墳、墳墓の総数は計47基を数える。墳墓群は、全長32.5mの前方後円墳である23号墳を頂とし、その前方後円墳に付随するかのような数基の円墳、丘陵西側の谷筋に一部露出している横穴式石室を内部主体とする6基の円墳、さらに東方向へ延びる尾根筋を中心とした径7~15m規模の古墳群とに大きくグループ分けできる。その中でも東方向へ600m余り延びる尾根筋では、径15m規模の円墳とその周辺にやや小規模な径7~10m前後の円墳を数基配するといった小単位が窺える。今回調査を行った調査区はこの東方向へ長く延びる尾根筋の中央西寄りに位置し、調査区内においても古墳のまとまりが確認された。

時期的には、発掘調査から弥生時代後期の墳墓が確認されており、現状で長方形の墳形を有するものがあることなどから、調査以外でも弥生墳墓の可能性があるものが含まれ、弥生時代後期から古墳時代前期、中期、後期と各期の古墳、墳墓から構成される墳墓群であることが明らかとなってきた。

第2節 古墳の調査

平成11年度、12年度にわたる今回の調査で、服部16~19、34、36号墳と計6基の古墳を検出し、調査を行った。調査地は服部墳墓群中、標高80m弱の丘陵頂部に位置する23号墳(前方後円墳・全長32.5m)から標高36m弱を測る東端の頂部へと600m余り続く尾根のうち、鞍部を介し尾根主稜線が南東へ屈曲する中央部からやや西寄りの約160m間の尾根筋、標高30~47mに位置する。加えて、その尾根筋から北方向へ張り出す小尾根の標高25m辺りまでが平成12年度の調査範囲となる。

調査地内でも数基単位のまとまりが認められ、17~19号墳は尾根上位の標高42~47mに位置し、調査外となる20、21、33号墳らとともに小支群を形成している。また、17号墳から60m程東に離れ、尾根下位の標高34m付近に所在する34号墳は、16、36号墳とともに一支群を成している。(谷口)

1. 服部16号墳(第3・4・6~12図、図版2・3・5~8・38・39)

位置と現状

服部16号墳は、調査区東側の標高36m付近に位置し、東へ下る尾根がやや南東へ屈曲する尾根の変換部に立地する。南東約3mに服部1号墓が所在する。付近の水田面からの比高差は約27mである。調査前の観察では後世の耕作等に伴う明瞭な削平が認められ、遺構が存在するか不明であったが、平成9年度の試掘結果から、第1トレーン周辺でまとまって須恵器片が出土し、何らかの遺構が存在するものとされてきた地点である。雑木林となった現況では、北東側は一見自然な傾斜で、墳丘の南西側1/2以上は削平を受けており、僅かに残る高まりの北西側と南東側に傾斜の変換が認められる程度であった。なお古墳南東側と1号墓の北西側との間に後世の道が通っており、それぞれの墳裾を若干切っているものとみられた。

墳丘

本墳の南西側は大きく削平されており、その平坦面には、近年の耕作等に伴うものと見られる幅20~30cm程度、深さ20cm前後の溝が南北方向に80cm程度の間隔で7条掘り込まれている。そのため正確な規模は明確ではないものの、遺存する墳丘の規模は、東西で径11.2m、北西および南西側墳裾から高さ1.2m、北東側墳裾から2.5mを測る。形状は不明瞭ながら円形を呈するものと思われる。墳丘は地山成形と若干の盛土によって造営されており、削平された南西側は不明であるが、北東側は比較的しつかりした溝が尾根を横断するように掘り込まれている。また北東側と南東側は若干の地山掘削を行なって墳裾を整形した様子が見受けられる。さらにこの区域内には地山整形のためか旧表土は遺存していないものの若干の盛土が施されており、厚さ20~45cm程度が認められる。

埋葬施設

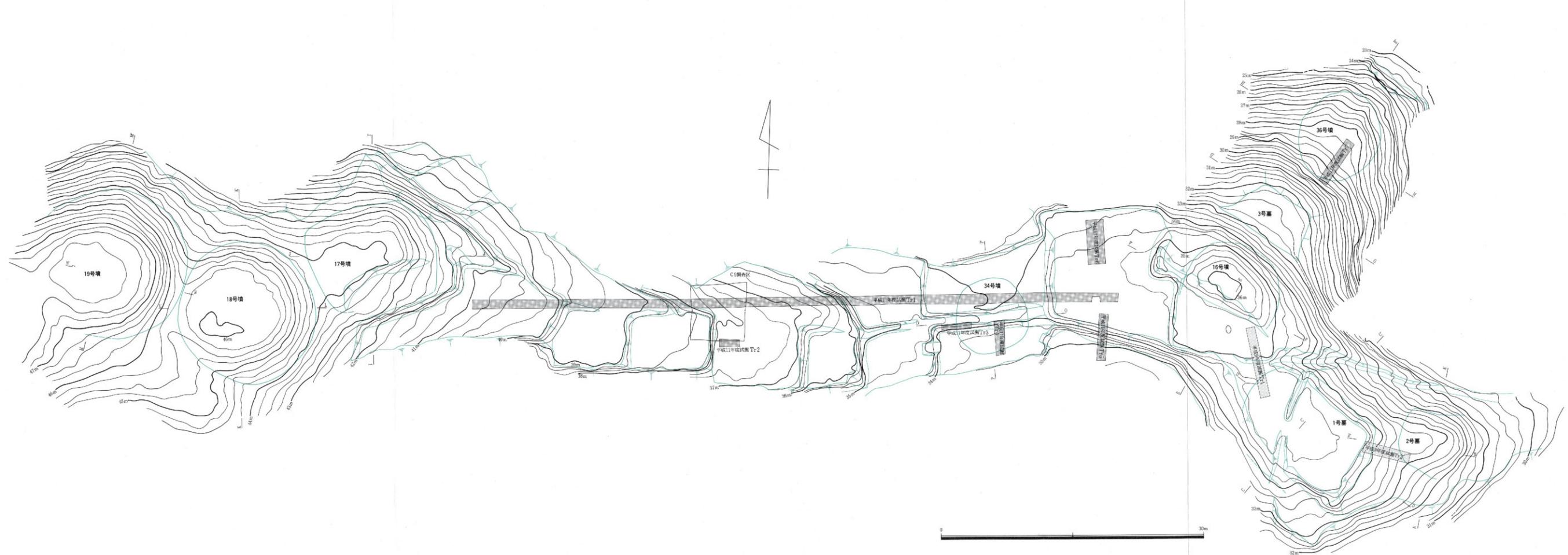
埋葬施設は、遺存する墳頂部中央より北西側から尾根にはば直交する2基(第1、第2主体部)と、墳頂部の北西側端部から尾根にはば並行する1基(第3主体部)、墳頂部のほぼ中央部から尾根に並行よりわずかに軸を振る1基(第4主体部)の計4基を検出した。このうち第1主体部と第4主体部はほぼ交差するように切り合っており、また、第2主体部の北西部と第3主体部の南東部が僅かに切り合う位置関係にある。

第1主体部(第7図、図版6)

墳頂部中央よりやや北西の位置に掘り込まれた埋葬施設で、第4主体部と約50°の角度をもって交差するように切り合う。検出は盛土上からで、地山までしっかりと掘り込まれるが、断面観察からは第4主体部を切って造られたと思われる。墓壙は尾根の稜線にはば直交するN-45°-Eに主軸をとり、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙の南西端部はそのほとんどが削平あるいは後世の溝によって搅乱されているものの、規模は長さ2.4mが確認され幅1.35m、深さ91cmを測る。両小口部には小口穴が掘り込まれ、それぞれ規模は北東側のものが長さ54cm、幅20cm、深さ10cm、南西側のものが長さ60cm、幅17cm、深さ18cmを測る。墓壙の断面観察や小口穴の存在から埋葬形態は組合せ式木棺直葬と考えられ、厚さ5cm程度の板材を用いた長さ約1.5m、幅40cm、深さ60cm程度の棺が埋置されていたものと考えられる。なお本墓壙内から遺物は検出されなかった。

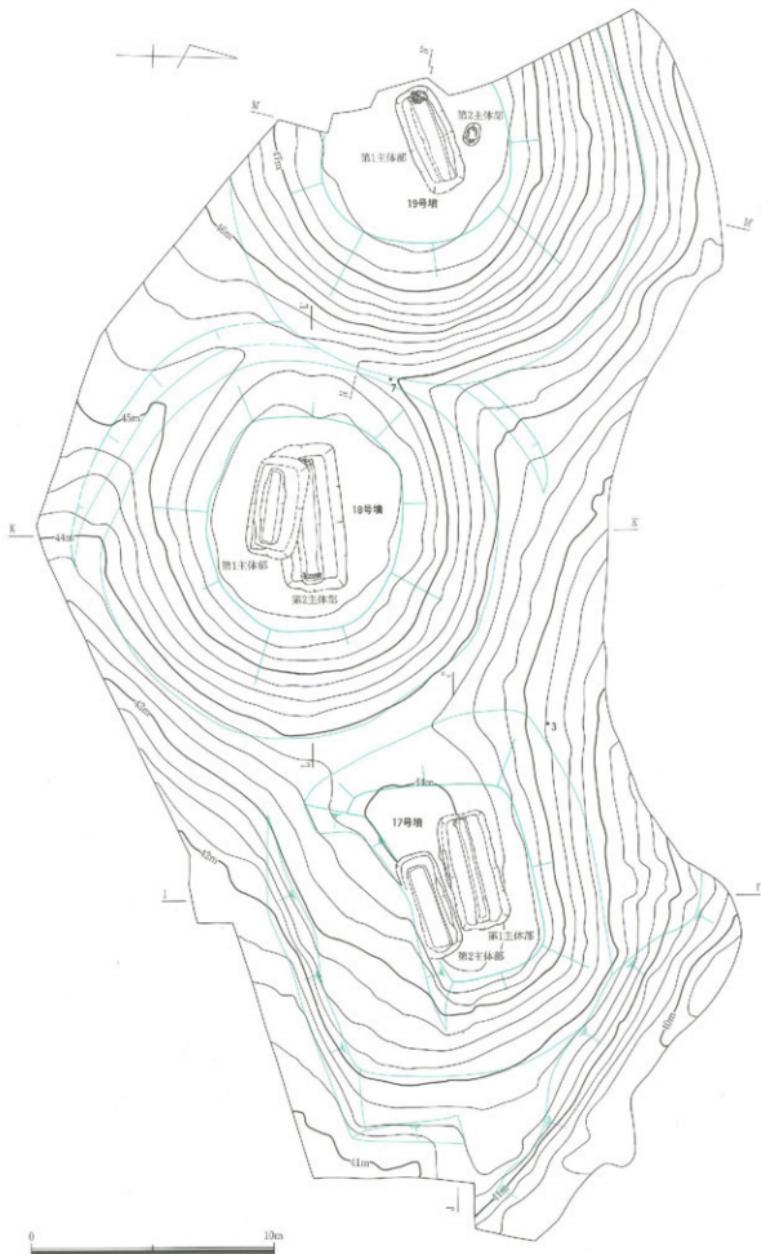
第2主体部(第8図、図版7・38)

第1主体部の北西側約70cmに、同主体部にはば並行して掘り込まれた埋葬施設である。検出は盛土上からで、地山までしっかりと掘り込まれる。墓壙はN-40°-Eに主軸をとり、平面形は隅丸長方形を呈する。南西側の墓壙上位は第1主体部と同様に大きく削平されており、規模は長さ2.71m、幅1.46m、深さ1.11mを測る。北東側には小口穴が掘り込まれ、規模は、長さ48cm、幅15cm、深さ6cmを測る。墓壙断面観察や小口穴の存在等から埋葬形態は組合せ式木棺直葬と考えられ、墓壙中央に長さ1.5m、幅50cm、深さ50cm程度の棺が埋置されたものと考えられる。

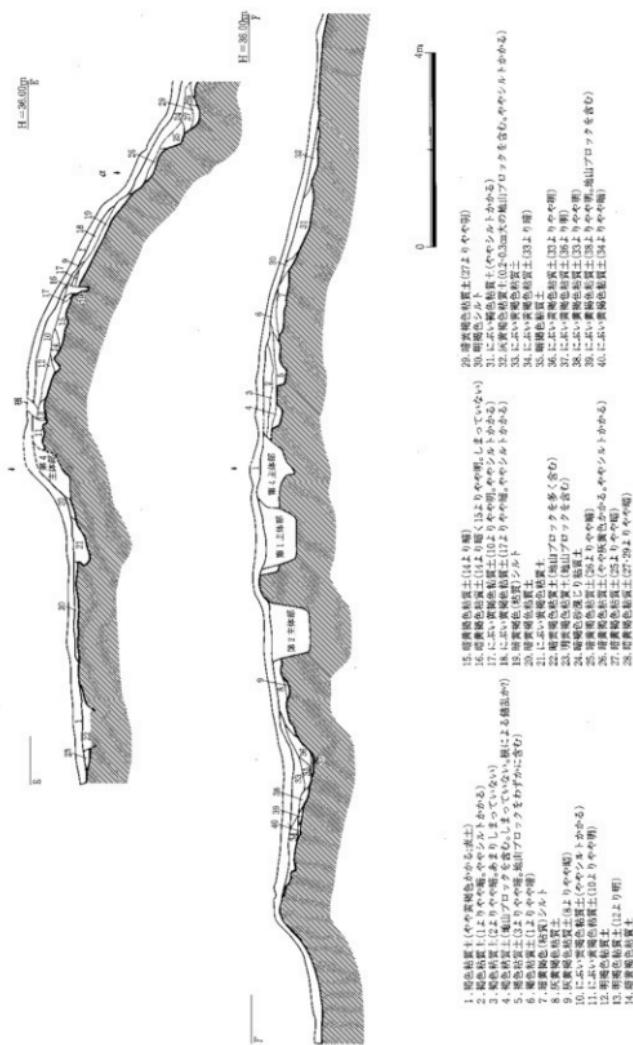


第3図 服部墳墓群調査地地形図 ($S = 1 : 250$)

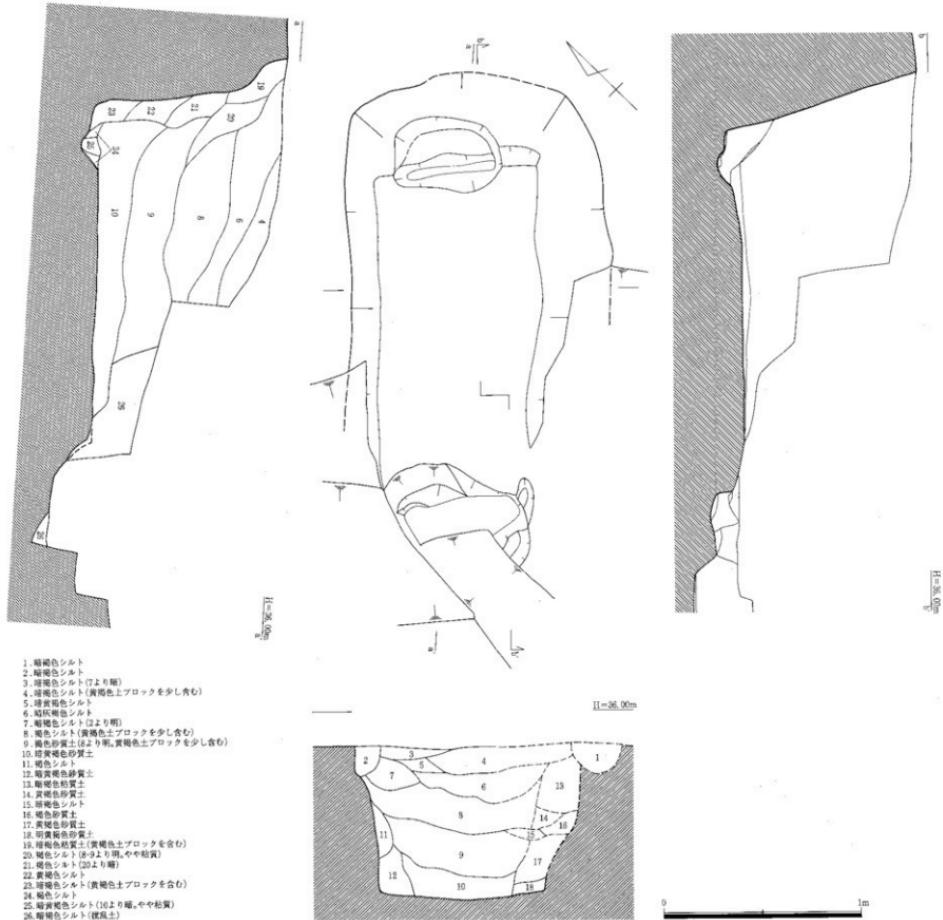




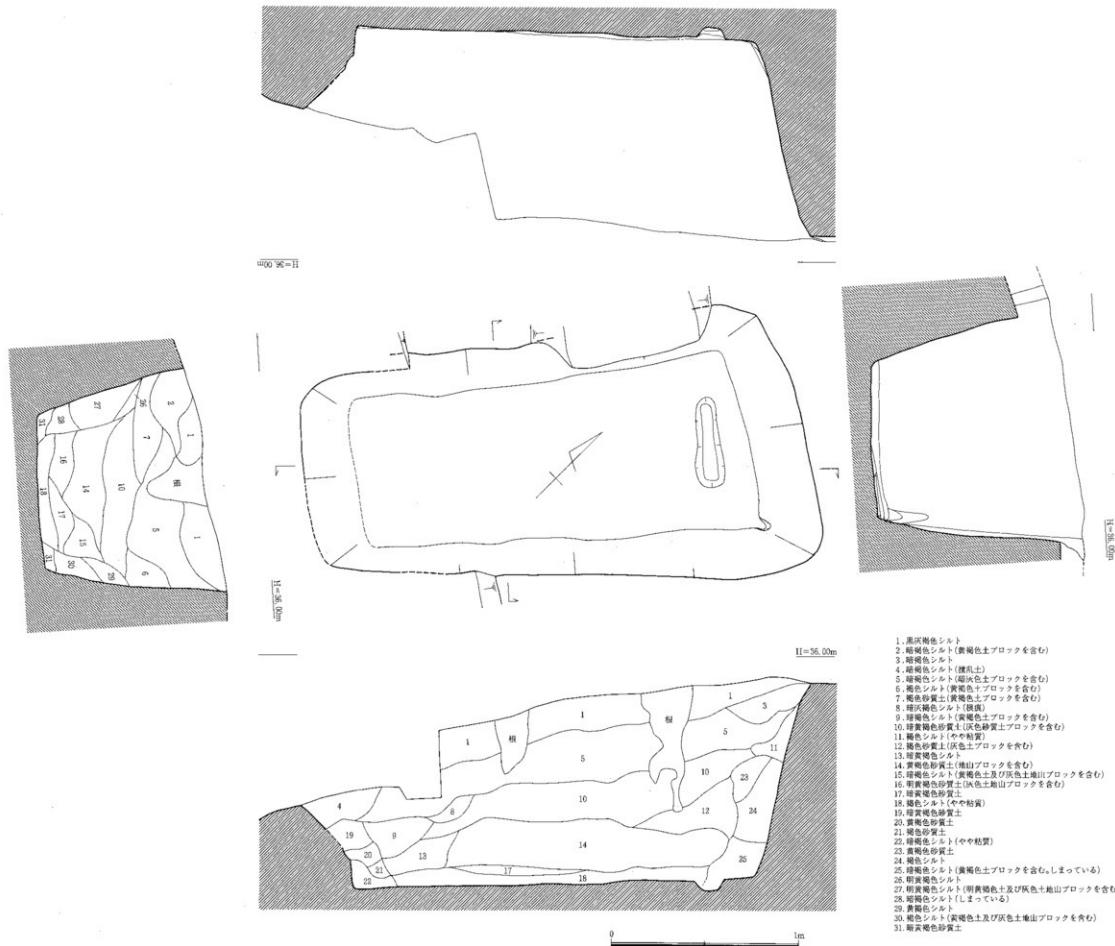
第5図 服部17・18・19号墳墳丘遺存図 (S = 1 : 200)



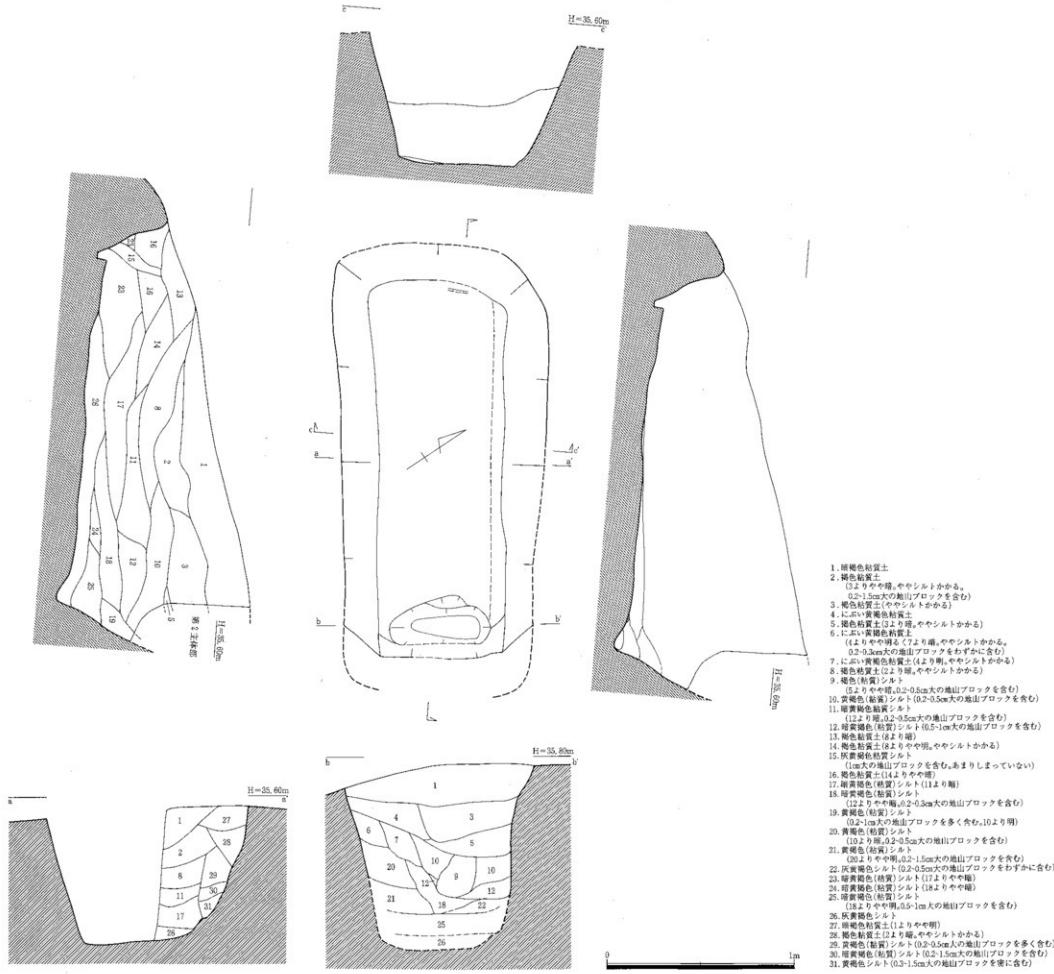
第6圖 股部16号墳埴丘断面図 (S=1:100)



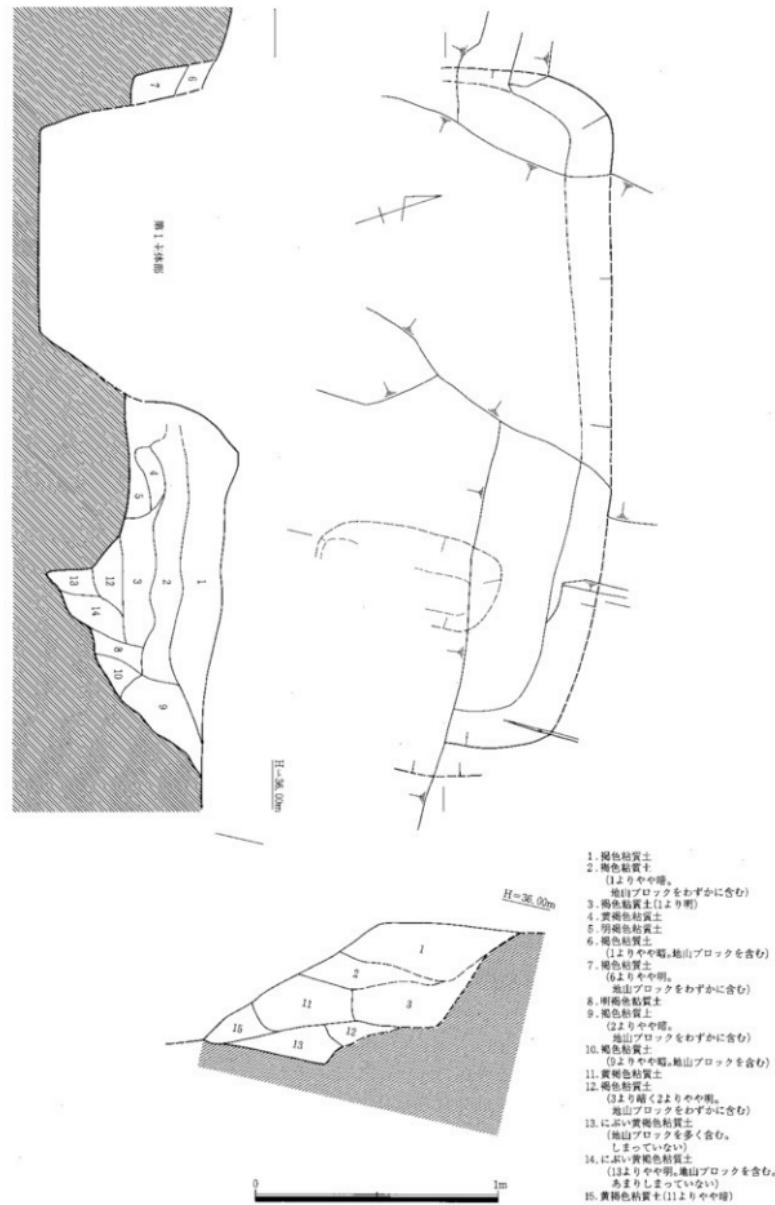
第7図 服部16号墳第1主体部実測図 (S = 1 : 20)



第8図 服部16号墳第2主体部実測図 (S=1:20)



第9図 服部16号墳第3主体部実測図 (S=1:20)



第10図 腹部16号墳第4主体部実測図 ($S = 1 : 20$)

遺物は埋土最上層から壇複合口縁部小片(第11図-1)が検出されているが、混入遺物の可能性を考えられる。

(1)は口縁中位で屈曲外反し、外面に多条の平行沈線を施文後1/3上半を横ナメする。

第3主体部(第9図、図版7・8)

壇丘北西側の壇頂肩部から壇丘斜面にかけて掘り込まれた埋葬施設で、第2主体部の北西側とほぼ直交するように小口端部が切り合う形で位置する。検出は他の埋葬施設と同様に、盛土上からで、地山までしっかりと掘り込まれる。断面観察から、本主体部が第2主体部を切って造っていることが判明した。墓壙はN-56°-Wに主軸をとり、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ2.24mが遺存し、幅1.15mで、深さは壇丘斜面の傾斜に沿って、南東から北西に向けて浅くなり、最大で1.05m、最小で31cmを測る。南東側には小口穴が掘り込まれ、規模は、長さ54cm、幅22cm、深さ6cmを測る。墓壙断面観察や小口穴の存在等から埋葬形態は組合せ式木棺直葬と考えられる。深さ50cm弱程度の棺とみられるが長さ等規模は不明である。

なお床面直上層から土器細片が検出されている。

第4主体部(第10図、図版8)

壇頂部のはば中央部に掘り込まれた埋葬施設であるが、第1主体部に交差するように切られたものと思われる。検出は他の埋葬施設と同様に盛土上からで、地山をしっかりと掘り込んでいる。墓壙は、後世の削平により南西側の半分が消失しているが、尾根に並行より僅かに軸を振るN-45°-E程度に主軸をとるものと思われる。平面形は隅丸長方形とみられ、規模は、長さ2.8m程度、深さ45cm程度が遺存し幅は不明である。断面観察から南東側に深さ30cm程度の小口穴が掘り込まれていたものとみられ、埋葬形態は第1～3主体部同様の組合せ式木棺直葬であった可能性が考えられる。ただし、本主体部の床面が他のものより35cm以上も浅いことは大きく異なる点である。

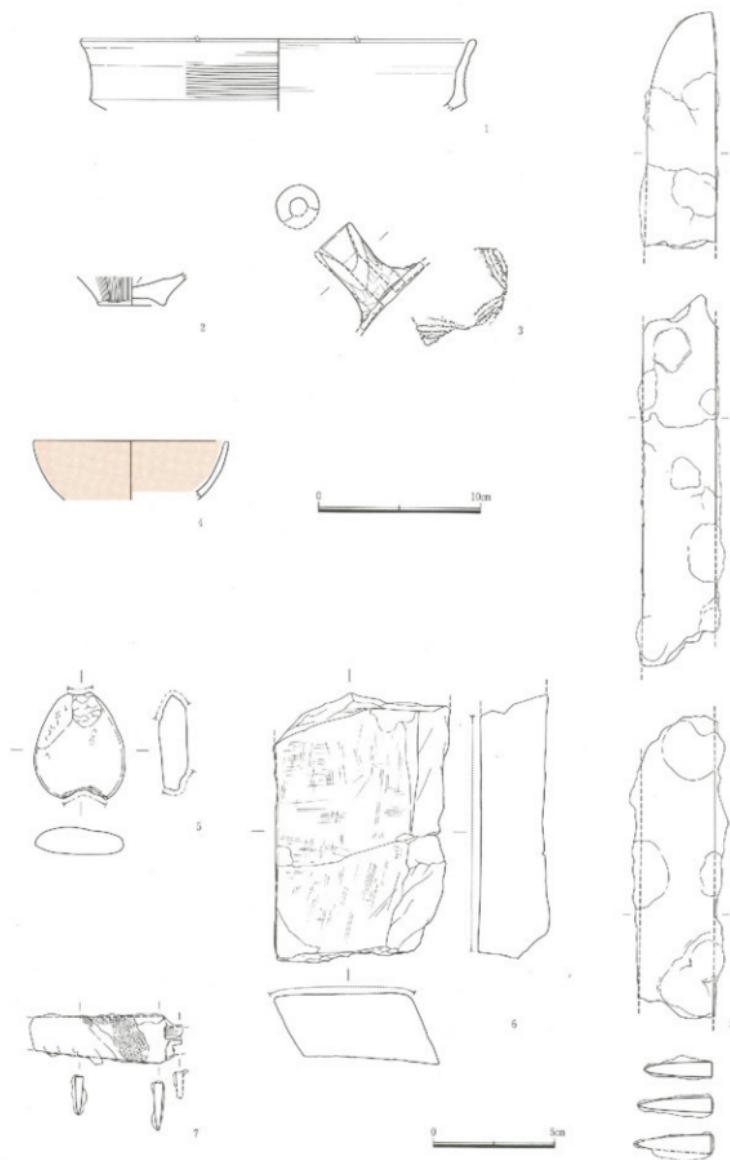
なお墓壙内から遺物は検出されなかった。

その他の出土遺物(第11・12図、図版38・39)

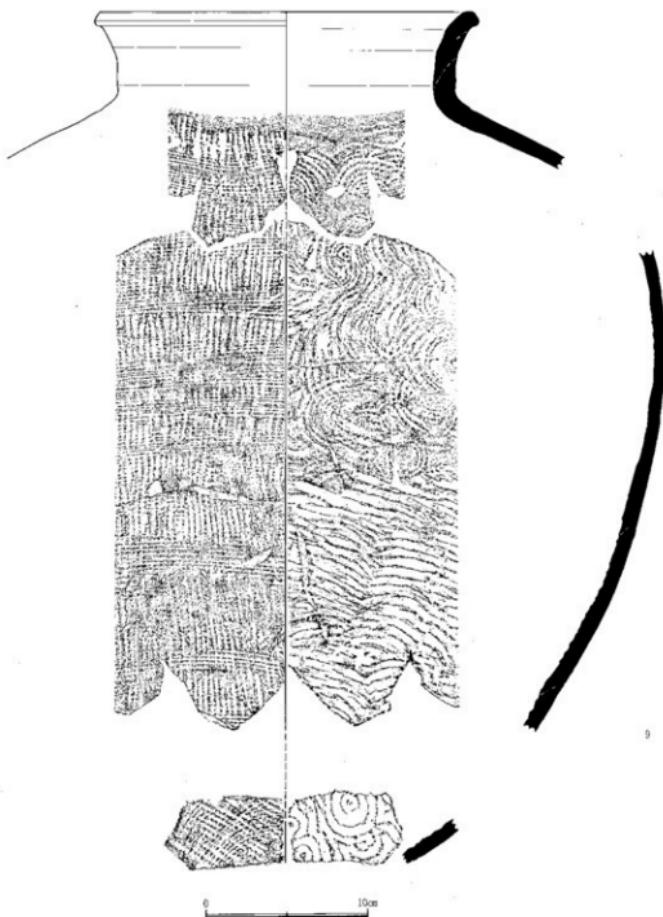
遺物は第2主体部埋土最上層検出の弥生土器壺片(1)等以外に、北北東から東側にかけての壇裾から弥生土器底部片・注口部片・石錘等(2・3・5)、西側周溝内から砥石(6)、北西側壇丘斜面表土中から須恵器片、壇丘中央部付近表土中から刀子・直刀(7・8)、同盛土中から赤彩高杯口縁部片(4)、南東側壇裾付近から須恵器壺(9)等が検出されている。このうち、北北東から東側にかけての壇裾から出土した遺物の中には、当初16号壇出土の遺物として取り上げたものの、後に3号墓検出のものと同一個体であることがわかりそちらの遺物として取り扱ったものもある。次いで壇丘中央部付近表土中から検出した鉄製品は、その位置関係から壇丘が後世に削平された後に残丘の崩落に伴って転落したものと考えると、本来は第4主体部内の遺物であった可能性も考えられるが、明確にはできなかった。また同盛土中検出とした高杯は、ちょうど根痕による搅乱部付近にあたり、あるいは第4主体部内の遺物であった可能性も考えられるがこれも明確にはできなかった。

なお南東側壇裾付近から検出した須恵器壺等は、その検出位置から本壇の遺物として取り扱っているが、壇丘はすでに削平されており実際の壇裾も明確でないことから、何らかの別の遺構等に伴う遺物である可能性もある。

底部(2)は上げ底状の平底で二次焼成を受ける。注口部(3)は先端でわずかに広がる円筒状を呈し、ヘラ磨きされ、注口付け根三方向に円弧文が観察される。高杯(4)は口縁は内湾しながら立ち上がり内外面赤彩される。石錘(5)は扁平な円盤の長軸両端を打ち欠いて作られている。砥石(6)は長軸方向的一面を使用している。刀子(7)は刀身元部の残存で木質や布目痕が観察される。直刀(8)は3片に分かれ接合はしないが遺存長36.95cmを測る。壺(9)は肩部が張り口縁部は直立し上半で外反する形態で、体部外面は平行叩き後カキ目調整、内面は2種の同心円文當て工具痕がみられる。



第11図 服部16号墳出土遺物実測図（1）



第12図 服部16号墳出土遺物実測図（2）

2. 服部17号墳(第3・5・13~18図、図版2・3・9~12・39)

位置と現状

服部17号墳は、調査区の西側に位置し、17~21・33号墳で構成される小支群の尾根下位にあたる東端に造営される。18号墳の東隣にあたり、約60m東下方に34号墳が位置する。標高は44.2m程度で、付近の水出面からの比高差は約35mである。現在では尾根のほぼ稜線上が土地の境界となっており、尾根の南側は部分的にではあるが戦後頃まで畑作が行われていたとされ土地の改変が著しく認められる。現在は檜等の植林が一部になされている。また北側は雜木林となっている。なお調査前の本墳周辺は、東西方向は西隣する18号墳の墳裾部で傾斜が変わって平坦となり、東側で傾斜変換が認められてこれが墳丘斜面と墳裾部となる。南北方向では南側はその1/3程度が大きく削平されるとともに盛土を行って平坦地化が為され、北側には墳裾と見られる傾斜変換点が認められた。

墳丘

南側が大きく改変されているものの、規模は、東西辺14m、南北辺約10.5m、高さは西側周溝底から0.5m、東側墳裾から2.0m、北側墳裾から2.7mを測る方形墳である。墳丘は地山成形と盛土によって造成される。このうち地山成形は、旧表土の遺存状況から、立地する尾根の高位側を一直線状に横断する幅約2m、深さ0.4m程度の溝を掘削するとともにほかの三辺についても若干の地山掘削して墳裾部を整形する。さらに削平・流失により不明な南側を除く墳丘基底部の南西~北~北東にかけては、削平して水平面を作るよう整形したものと思われる。盛土はこの墳丘基底部上に施され、墳丘の南東側には旧地形の傾斜がほかより大きかったために残ったと考えられる旧表土上に最大で厚さ40cm程度が遺存する。

埋葬施設

埋葬施設は、墳頂部中央より北側から尾根のほぼ並行する1基(第1主体部)と、その南東側にはほぼ並行して隣接する1基(第2主体部)の計2基を検出した。切り合いではなく、明確な新旧判断は困難である。

第1主体部(第13~16図、図版10・11・39)

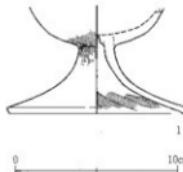
墳頂部中央のやや北側に位置する埋葬施設で、盛土上から掘り込まれる。墓壙は尾根の稜線にはほぼ並行のN-76°-Eに主軸をとり、平面形は隅丸長方形を呈する。いわゆる二段墓壙とは言えないが、床面中央部には両小口間に幅50cm前後、最大深10cm程度の浅い帯状の凹みが認められる。規模は、長さ4.91m、幅2.3m、深さ97cmを測る。土層断面観察から木棺直葬と考えられ、床面中央のやや南寄りに長さ3.6m、幅40cm、深さ50cm程度の木棺が埋置されていたものと考えられる。しかしながらその形式は明確にできなかった。

遺物は、主体部中央よりやや西側の最上層から供獻土器と見られる土師器高杯(1)や口縁部片等が出土している。また主体部西側小口部の棺の裏込め土から、床面から5~10cm程度浮いた状態で混入と見られる土師器細片が検出されている。高杯(1)は残存する杯部は椀状で、壠部は杯部に対し大きく開く形態である。

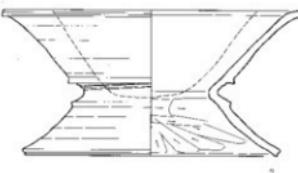
第2主体部(第14~17図、図版11・12・39)

第1主体部南の隣接地に30cm程度東西方向にずれるように位置する埋葬施設で、盛土上から掘り込まれる。

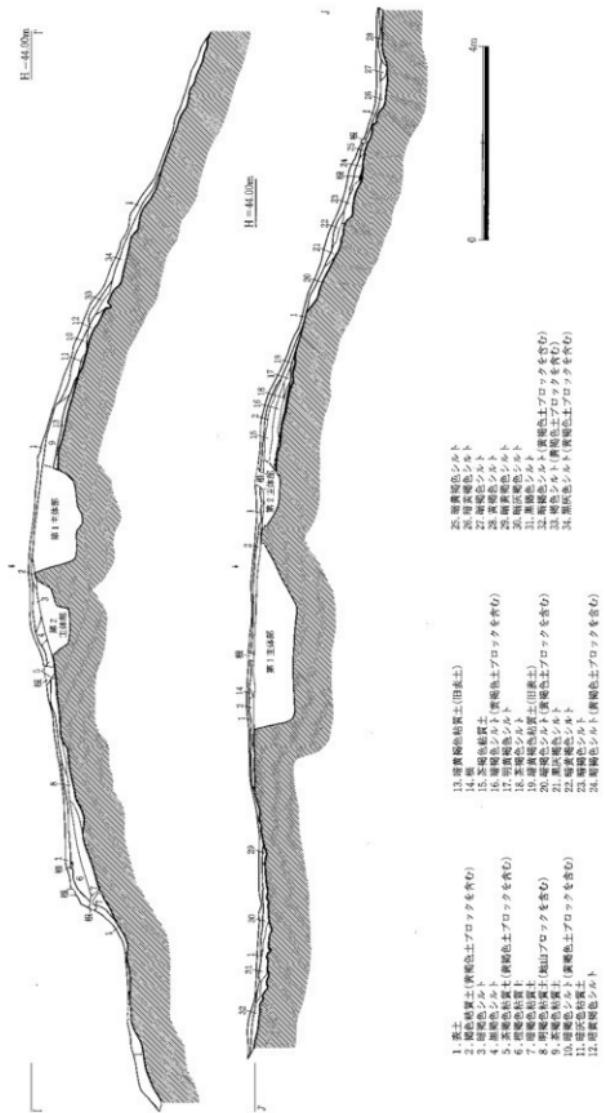
墓壙は第1主体部よりやや南に軸を振るN-70°-Eに主



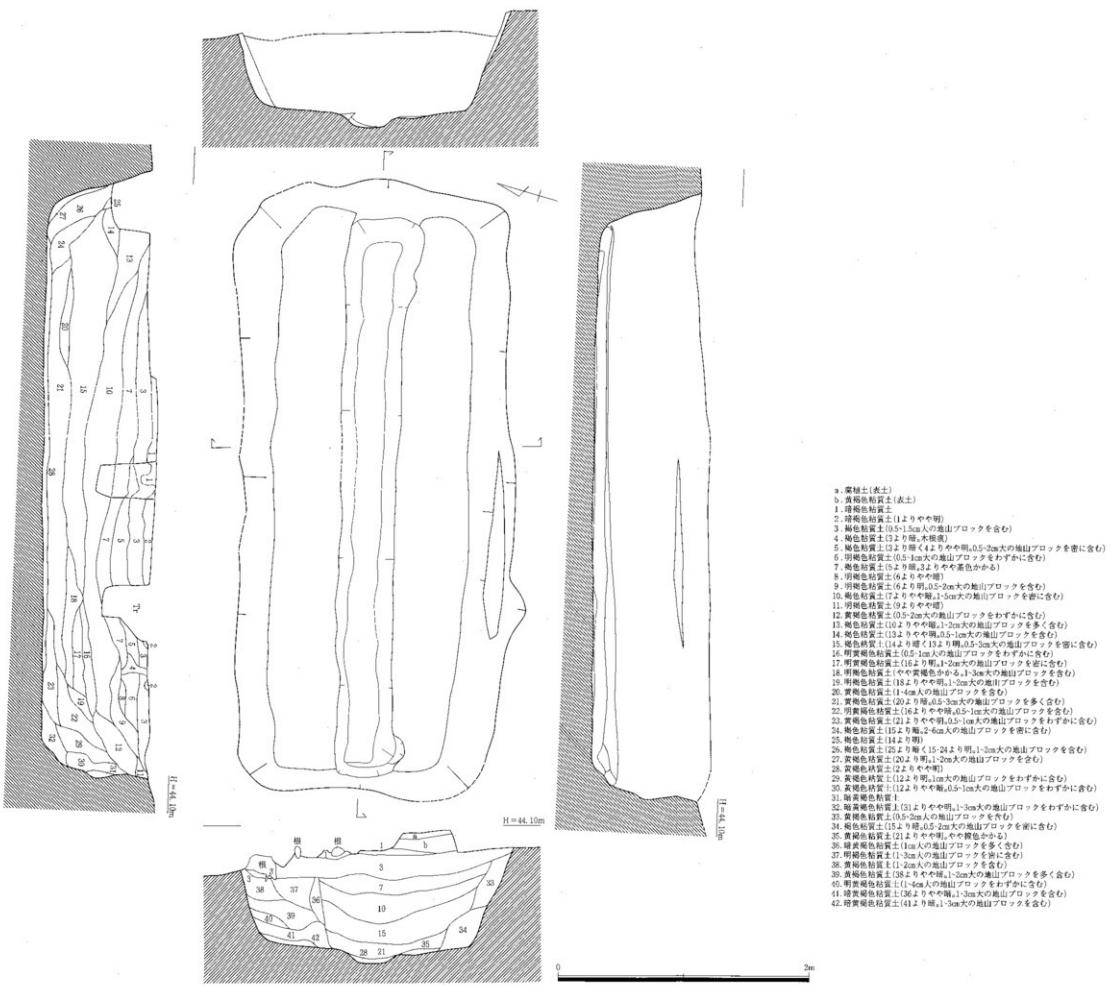
第13図 服部17号墳第1主体部出土遺物実測図



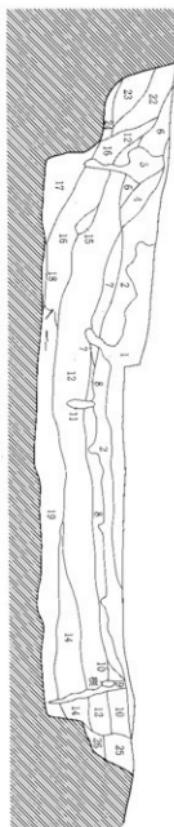
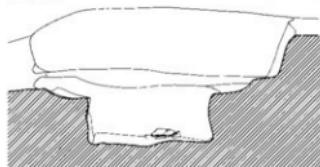
第14図 服部17号墳第2主体部出土遺物実測図



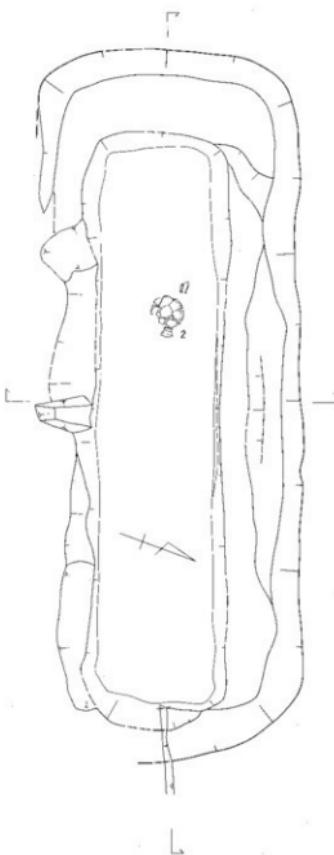
第15図 服部17号堆積丘断面図 ($S = 1 : 100$)



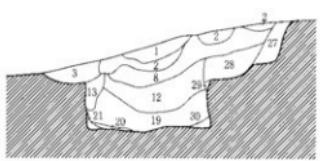
第16図 服部17号墳第1主体部実測図 (S=1:30)



1. 黒褐色粘質土
2. 黄褐色粘質土
3. にじみ黄褐色粘質土(黒褐色粘質土ブロックを含む)
4. 黑褐色粘質土(2よりやや明)
5. にじみ黄褐色粘質土(2よりやや暗)
6. にじみ黄褐色粘質土(2よりやや明)
7. にじみ黄褐色粘質土(8より明)
8. にじみ黄褐色粘質土
9. 黑褐色質土(しまっていないう木根痕)
10. にじみ黄褐色粘質土(8よりやや暗)
11. 黑褐色粘質土(8よりやや明)
12. 黄褐色粘質土(1よりやや明)、1-2cmの大粒山ブロックを含む
13. 黄褐色粘質土(1よりやや暗)、1-2cmの大粒山ブロックを含む
14. 黑褐色粘質土(12よりやや暗)、1-2cmの大粒山ブロックを含む
15. 黑褐色粘質土(しまっていないう木根痕)
16. 黄褐色粘質土(12より暗)、1-2cmの大粒山ブロックを含む
17. 黄褐色粘質土(1より明)、1-4cmの大粒山ブロックを密に含む
18. 黄褐色粘質土(1よりやや明るく17よりやや暗)



19. 黄褐色粘質土
20. 黄褐色粘質土(12よりやや暗く18よりやや明)、1-3cmの大粒山ブロックを含む
21. 黄褐色粘質土(2よりやや明)、1-2cmの大粒山ブロックを含む
22. 黄褐色粘質土(1-1.5cmの大粒山ブロックを含む)
23. 黄褐色粘質土(22よりやや明)、1-2cmの大粒山ブロックを含む
24. 黄褐色粘質土(0.5-1cmの大粒山ブロックを含む)
25. 黄褐色粘質土(12より明)、0.5-1cmの大粒山ブロックを含む
26. 黄褐色粘質土(12より明)、1-3cmの大粒山ブロックを含む
27. 黄褐色粘質土(12よりやや暗)
28. 黄褐色粘質土(12より明)、1-3cmの大粒山ブロックを含む
29. 黄褐色粘質土
30. 黄褐色粘質土(19より暗)



第17図 腹部17号墳第2主体部実測図 (S = 1 : 30)

軸をとり、平面形は隅丸長方形を呈する。いわゆる二段墓壙であるが、東側小口部は一段となる。南南東側の長軸壁は削平により消失しているが、墓壙遺存規模は、長さ4.37m、幅1.6m、深さ88cmを測る。土層断面観察と二段墓壙の形態から木棺直葬と考えられ、長さ3.4m、幅60cm、深さ40cmを測る組合せ式木棺が埋置されていたものと考えられる。

遺物は、主体部中央より60cm程度西側の床面直上から転用枕と考えられる受部を打ち欠いた鼓形器台(2)がつぶれた状態で検出された。このことから墓壙西側が頭位と考えられる。なお(2)は口径18.0cm、器高9.0cmを測り、短い接合部から受部・脚台部いずれも大きく外反し外面は横ナデ調整である。

その他の出土遺物（第16図、図版39）

主体部内検出以外では、墳丘北西隅の墳壙埋土中から低脚杯(3)が検出されている。(3)は底径3.7cmの小型の脚部と杯底部の遺存であり、調整は全面剥落のため不明瞭である。（山田）

3. 服部18号墳（第3・5・19~24図、図版2~4・13~18・40・41）

位置と現状

調査区の西側に位置し、標高46mあまりの尾根上に立地している。18号墳の上方に19号墳が、下方に17号墳が隣接して築造されており、西側調査区外の20、21、33号墳らとともに一支群を成している。調査前の観察では、墳丘の北側斜面に流失の痕跡が僅かにみられたが、墳丘全体として良好な遺存状態を示しており、東側裾部から高さ2m以上が観察された。また、墳頂部も径8mあまりの平坦部が認められ、改変の様子もなく原状を保っている様子がうかがわれる。

墳丘

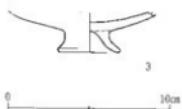
地表下約15cmで墳丘面を検出した。墳丘は、地山成形と旧地表上に盛土をすることによって築造されている。盛土は墳頂部を中心に行われており、厚さ20~40cmあまりが認められる。墳丘断面図（第19図）の第6層（暗灰褐色粘質土）が旧表土とみられ、上層の第3、4、7、8、10、17~19層が盛土と考えられる。地山の成形は、尾根の上方の西側と下方の東側で見られ、東側では僅かな地山の削りだしによって墳丘の裾部を成形している。また、西側では地山を掘削し周溝を廻らしている。周溝はほぼ半周し、幅2m前後、深さ10~20cmを測る。墳丘の高さは西側周溝底から50cm、東側墳裾部から1.8m前後を測ることができる。墳形は円墳で、規模は東西径15.4m、南北径16.5mを測る。なお、上方に位置する19号墳との新旧関係について明確に捉えることができなかつたが、周溝埋土のわずかな違いから18号墳が先行するものと考えられる。

埋葬施設

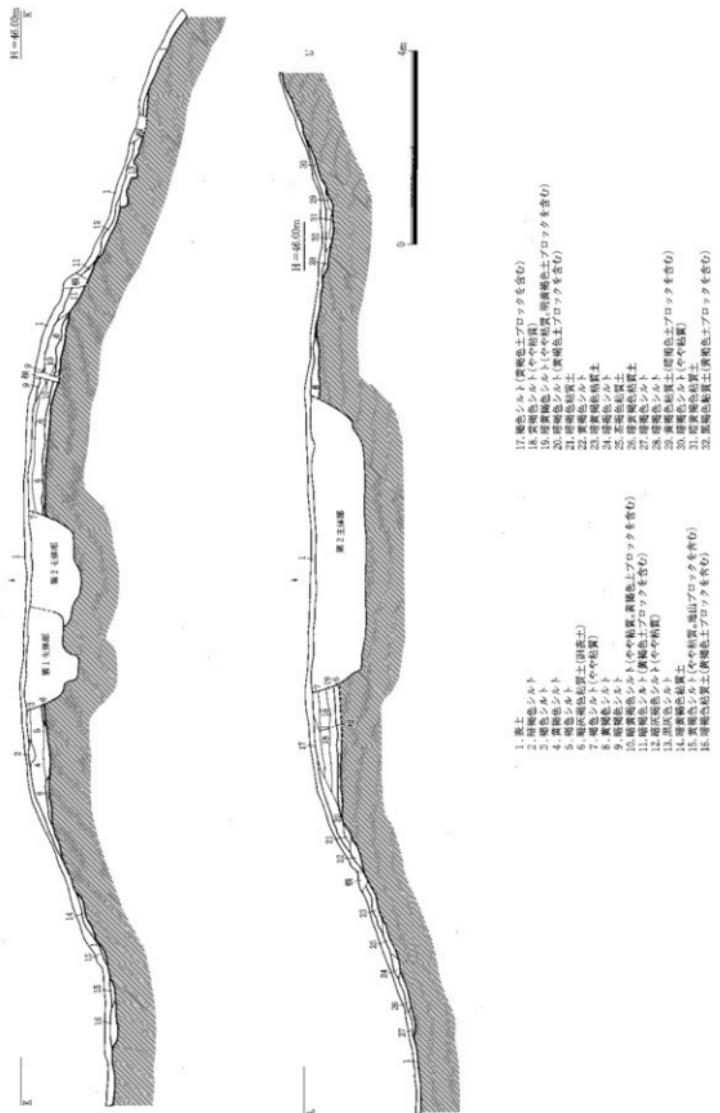
主体部は2基（第1主体部、第2主体部）が検出された。第1主体部は墳頂部中央からやや南により、第2主体部は墳頂部中央に位置している。両主体部には切り合い関係が見られ、断面観察から第2主体部の後に第1主体部が造られていることが明らかとなった。主体部の主軸はいずれも尾根と並行である。

第1主体部（第20・22・23図、図版4・40）

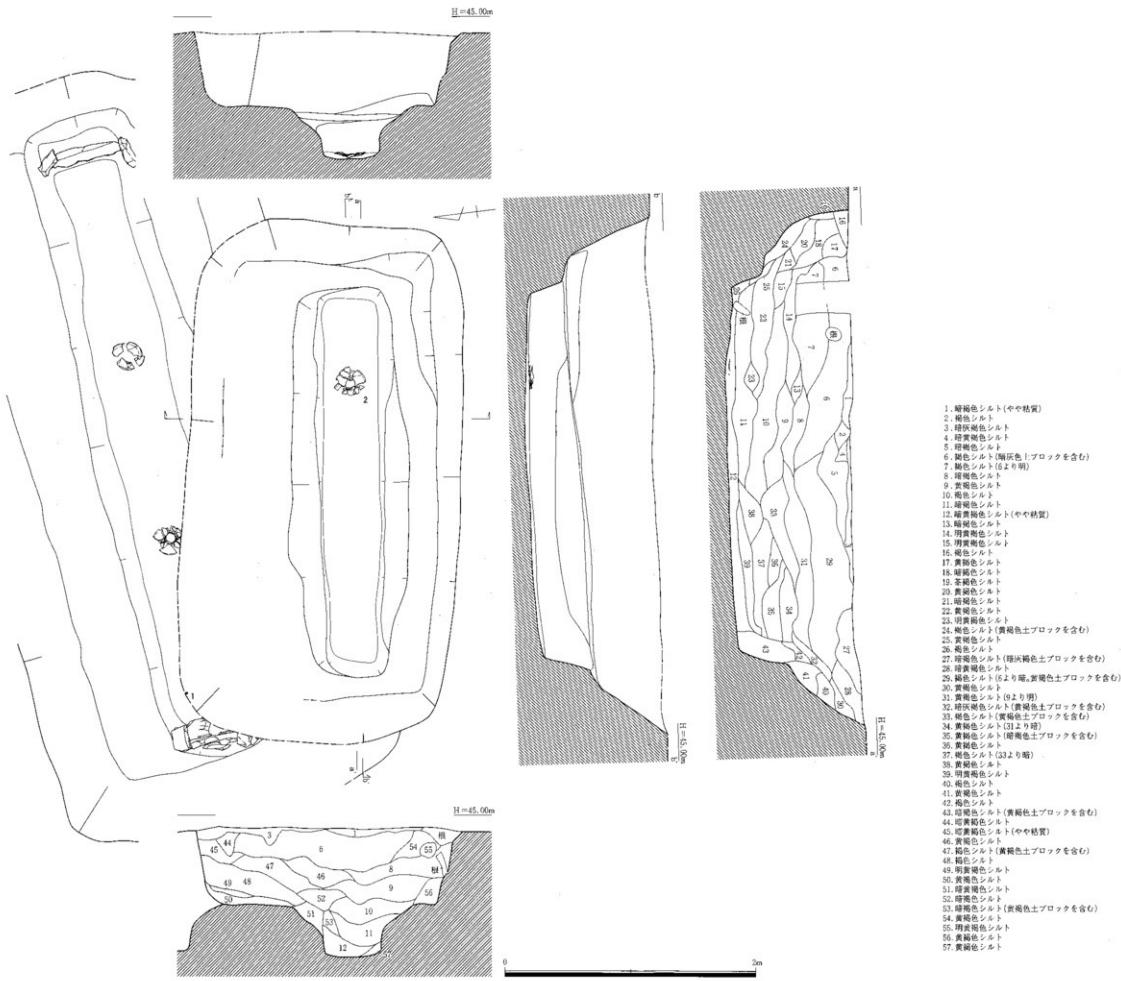
第2主体部の南側を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸はN-80°-Wにくる。墓壙は二段に掘られており、上面の長さ4.06m、幅2.1m、二段目掘り方は長さ3.07m、幅79~92cm、深さ40cmを測る。底面の規模は長さ2.86m、幅36~45cmである。墓壙上面からの深さは1.03mを測る。墓壙埋土の状況から、墓壙内には木棺が納められていたものとみられ、第20図の第25、26、42、43層などが木棺の裏込め土と考えられる。木棺の大きさは断面から推定して、長さ2.6m、幅40cm前後と考えられ、二段目掘り方いっぱいに棺を納めていたことがうかがわれる。



第18図 服部17号墳埴輪部
出土遺物実測図

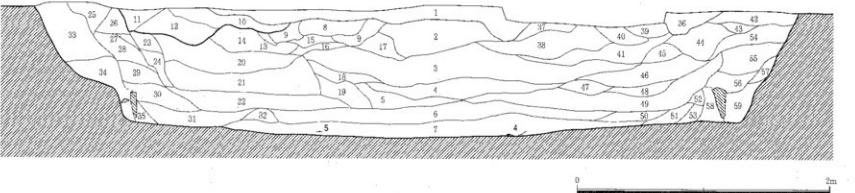
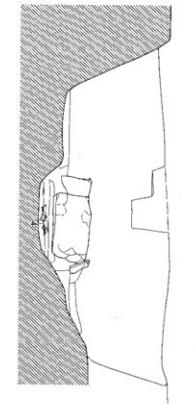
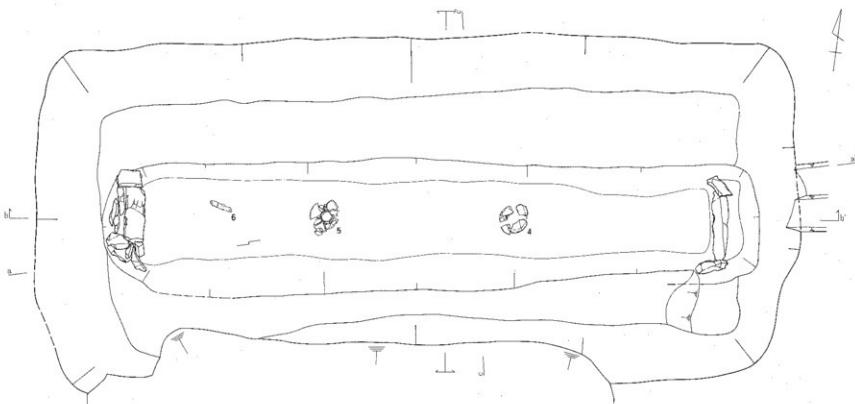
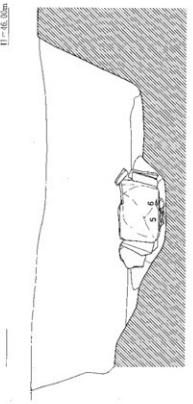
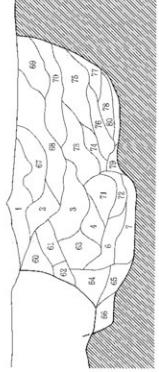


第19図 服部18号堤壙丘断面図 (S = 1 : 100)



第20図 服部18号墳第1主体部実測図 (S=1:30)

H = 46.00m

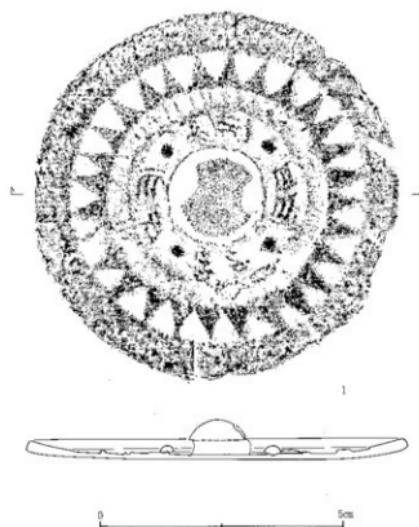
H = 46.00m
a

0 2m

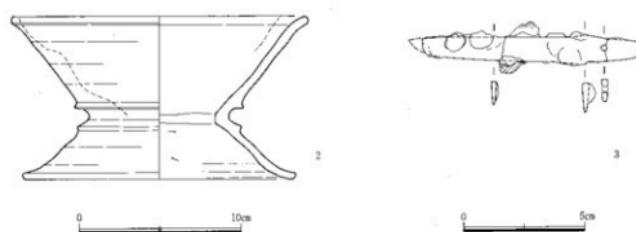
第21図 脇部18号墳第2主体部実測図 (S = 1 : 30)

1. 深灰色シルト
2. 深灰色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
3. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
4. 黄褐色シルト(より明る)
5. 黄褐色シルト
6. 灰色シルト(より暗)
7. 灰色シルト
8. 黄褐色シルト
9. 灰色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
10. 黑褐色シルト
11. 灰褐色シルト
12. 灰褐色シルト
13. 灰褐色シルト
14. 灰褐色シルト
15. 灰褐色シルト(暗灰褐色土ブロックを含む)
16. 灰褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
17. 灰褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
18. 灰褐色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
19. 黄褐色シルト
20. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
21. 灰褐色シルト(しまっている)
22. 黄褐色シルト(しまっている)
23. 黄褐色シルト(しまっている)
24. 黄褐色シルト(しまっている)
25. 灰褐色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
26. 灰褐色シルト
27. 灰褐色シルト
28. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
29. 灰褐色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
30. 灰褐色シルト
31. 明灰褐色シルト
32. 灰褐色シルト
33. 灰褐色シルト
34. 灰褐色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
35. 灰褐色シルト
36. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
37. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
38. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
39. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
40. 黄褐色シルト
41. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
42. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
43. 灰褐色シルト
44. 黄褐色シルト(より暗)
45. 黄褐色シルト
46. 黄褐色シルト
47. 黄褐色シルト
48. 黄褐色シルト
49. 黄褐色シルト(より明)
50. 黄褐色シルト
51. 黄褐色シルト
52. 黄褐色シルト
53. 黄褐色シルト
54. 灰褐色シルト(暗灰褐色土ブロックを含む)
55. 灰褐色シルト
56. 灰褐色シルト
57. 灰褐色シルト
58. 黄褐色シルト
59. 黄褐色シルト(しまっている)
60. 黄褐色シルト
61. 黄褐色シルト
62. 黄褐色シルト
63. 灰褐色シルト
64. 灰褐色シルト
65. 黄褐色シルト(より明)
66. 灰褐色シルト
67. 灰褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
68. 黄褐色シルト(より明)明灰褐色土ブロックを含む)
69. 黄褐色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
70. 灰褐色シルト
71. 灰褐色シルト
72. 黄褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
73. 灰褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
74. 灰褐色シルト(灰褐色土ブロックを含む)
75. 灰褐色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
76. 灰褐色シルト
77. 灰褐色シルト
78. 明灰褐色シルト
79. 明灰褐色シルト
80. 新黄褐色粘質土(より暗)

遺物は、墓壙から銅鏡(1)、鼓形器台(2)、刀子(3)が出土した。鼓形器台、刀子は棺内遺物であり、墓壙底東側から検出された。鼓形器台については、受部を打ち欠いており出土位置や出土状況から枕として転用されたものとみられ、被葬者の頭位が東側であったことを示唆している。刀子は器台から僅かに離れた東側で出土している。銅鏡は墓壙北西隅の埋土上層(第21図第12層中)で検出された。埋葬の最終段階に置かれた可能性のある遺物である。銅鏡(1)はほぼ完形で直径7.8cmを測り、内区に捩文2を対とする4組を配置する捩文鏡である。鼓形器台(2)は口径18.0cm、器高16.5cmを測り、受部・脚台部ともにいずれも大きく外反し外面とともに横ナデ調整である。受部高に対し脚台部が小さい印象を受ける。刀子(3)は切先を欠損するが遺存長8.9cmを測り、刀身部に木質付着、茎部に目釘孔がみられる。



第22図 服部18号墳第1主体部上層出土遺物実測図



第23図 服部18号墳第1主体部出土遺物実測図

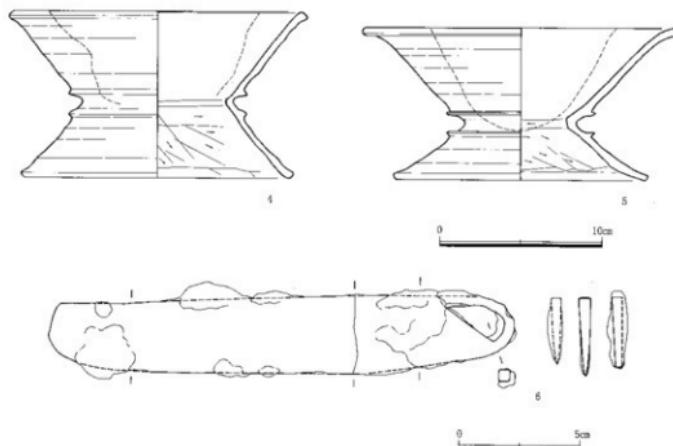
第2主体部（第21・24図、図版16～18・41）

墳頂部中央に位置する。墓壙の平面形は整った隅丸長方形を呈し、N-83°-Eに主軸をとる。墓壙の掘り方は二段に行われ、上面の長さ6.05m、幅2.78m、二段目掘り方の長さ5.23m、幅1.0～1.08m、深さ42cmを測る。底面規模は長さ4.5m、幅44～64cmを測り、西側で幅を増している。墓壙上面からの深さは1.04mである。長さ、幅とともに大型の墓壙といえる。墓壙底の東西両端から棺の小口が検出された。小口は、長さ49～55cm、幅30～34cm、厚さ15cm前後の扁平な石を立て、その周辺に石材を配している。棺小口の遺存状態や埋土状況から墓壙内には長さ4.5m、幅50cm、深さ50cm内外の大型の棺が埋納されていたものと考えられる。第21図の第64、65、74、79層などが木棺の側板の裏込め土と考えられる。

遺物は、墓壙底から鼓形器台2点(4・5)、鉄製品1点(6)が出土した。いずれも底面直上から出土しており棺内遺物とみられる。鼓形器台(4)は東小口から1.6m、(5)は西小口から1.4m内側で検出された。ともに受部を打ち欠いていることから枕に転用されたものと思われる。鉄製品(6)は器台(5)の西側から出土している。(4・5)は受部・脚台部とともに短い接合部から開く形態で、外面横ナデ調整である。(4)の器高10.3cmに対し(5)は9.4cmと低いが口径は逆に(5)が広く18.8cmに対し(4)は17.8cmを測る。受部・脚台部の均整がとれた(4)に対し、(5)は脚台部が小さくその分大きく開く。(6)は全長19.05cm、刃部13.1cmを測り、茎部端部を環状に折り曲げている。鉄鎌の可能性が考えられる。

その他の出土遺物

表土中から須恵器蓋が出土しているが、直接に当古墳とは関係ない遺物と考えられる。



第24図 服部18号墳第2主体部出土遺物実測図

4. 服部19号墳（第3・5・25~30図、図版2~4・19~22・41）

位置と現状

調査区の西端に位置し、標高48m前後の尾根上に立地している。東側裾部に18号墳が築かれ、さらに東に位置する17号墳、西側調査区外の20、21、33号墳とともに一支部を形成している。現状の墳丘遺存状態は良好で、東側裾部から高さ2m以上が残り、墳頂部には径9mあまり平坦部が認められた。墳丘斜面や墳頂部に極端な改変や流失の痕跡も見られず、ほぼ原状を保っていることが予想された。また、上方側には尾根を横断する弧状の周溝がはっきりと認められた。

墳丘

墳丘西側の約1/4は調査区外となるため未調査である。墳丘面は、厚さ15cmあまりの表土を除去した段階で検出された。墳丘の築造は、地山の成形と盛土によってなされ、墳頂部を中心に厚さ20~50cmの盛土が認められる。墳丘断面図(第26図)の4層(暗褐色シルト)が旧表土とみられ、その上に盛られた第2、3、10~14層が墳丘築造時の盛土と考えられる。地山の成形は、南~東側裾部で見られ、地山を軽く削り出して墳丘裾部を成形している。尾根上方側の成形については未調査区となるため詳細は不明であるが、現状での観察でも尾根を横断する弧状の周溝が確認されることから、地山を大きく掘削して溝を廻らしている様子がうかがわれる。墳形は円墳で、規模は南北径16.9m、高さは東側墳丘裾部から2.5m、北側墳裾部から2.9mを測ることができる。

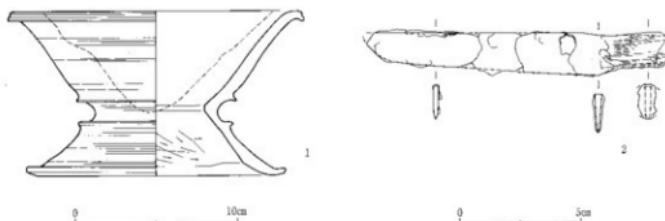
埋葬施設

主体部は地表下約15cmで2基(第1主体部、第2主体部)検出された。第1主体部は木棺直葬墓、第2主体部は土器棺墓である。第1主体部は墳頂部の中央に位置し、第2主体部は第1主体部の30cm北側に軸をやや東西に振って造られている。

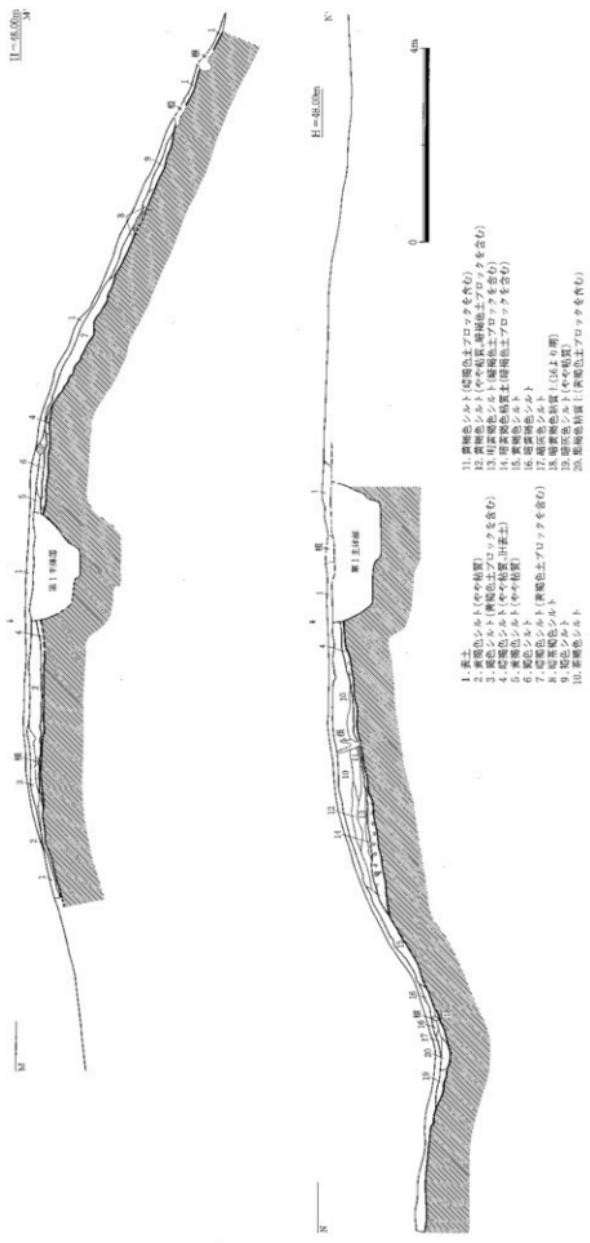
第1主体部(第25・27図、図版4・20・21・41)

平面形は隅丸長方形を呈し、N-68°-Eに主軸をとる。墓壙は二段に掘られており、上面の長さ4.48m、幅1.74~1.95m、二段目掘り方の長さ3.65m、幅0.92m、深さ28cmを測る。底面の規模は長さ3.25m、幅0.50~0.59mである。墓壙上面からの深さは96cmを測る。墓壙の埋土状況から、墓壙内には木棺が納められていたものとみられ、第27図の第34、37、46、53層や、第79、80層などが木棺の裏込め土と考えられる。また、西小口側には10~40cm大の角蹠が多数検出された。断面観察から小口板の背後に積み上げられたものと考えられる。木棺の大きさは断面から推定して、長さ2.4m、幅50cm前後と推測される。

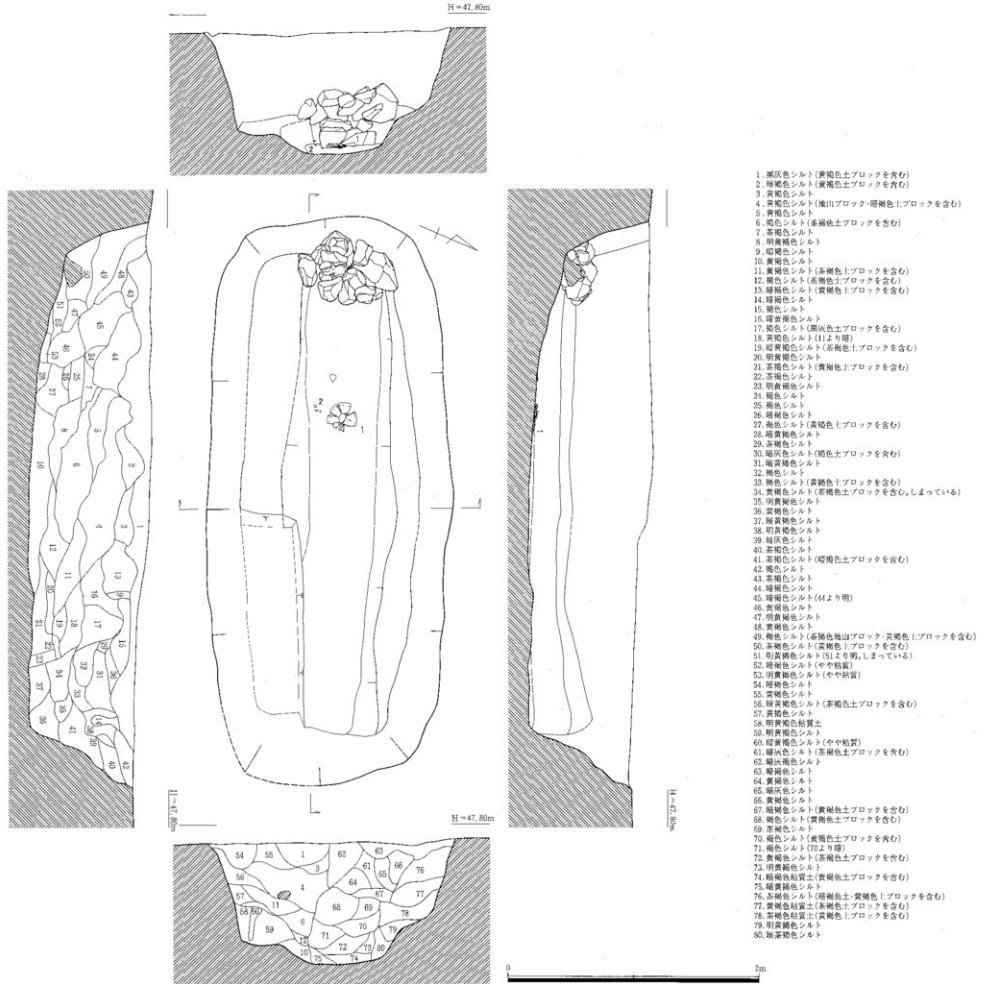
遺物は、墓壙底面から鼓形器台(1)、刀子(2)が出土した。ともに棺内遺物とみられ、墓壙底西側から検出された。鼓形器台については、その出土位置や出土状況、受部が打ち欠きされていることなどから、枕として転用されたものと思われる。被葬者の頭位が西側であったことを示唆する遺物である。刀子は



第25図 服部19号墳第1主体部出土遺物実測図



第26図 服部19号墳埴丘断面図 ($S = 1 : 100$)



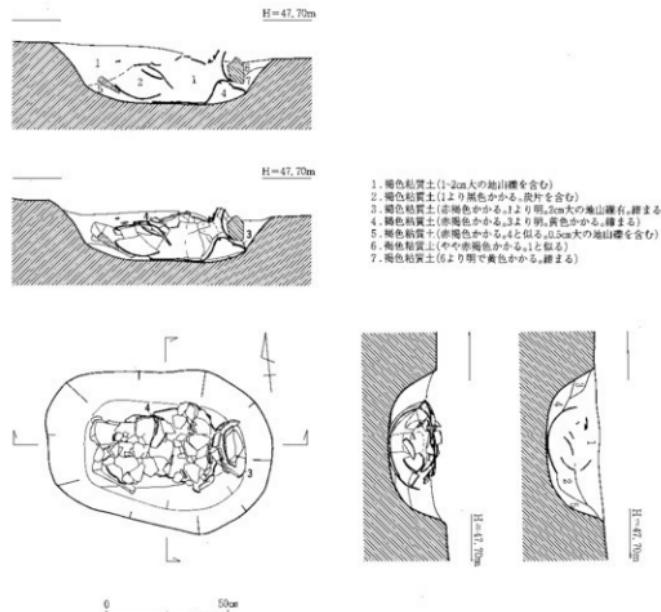
第27図 服部19号墳第1主体部実測図 (S=1:30)

器台からわずか6cm程離れた南側で出土している。(1)は短い接合部から受部・脚台部とともに開き端部で更に外反して面をもつ。外面横ナデ調整前の横ハケ目が観察される。受部に対し脚台部が小さく全体的に肉厚な作りである。(2)は切先と茎尻を欠くが遺存長12.5cm、刃部の長さ9.55cm、刀身元部で幅1.6cmを測り、茎部に木質痕が認められる。(前山)

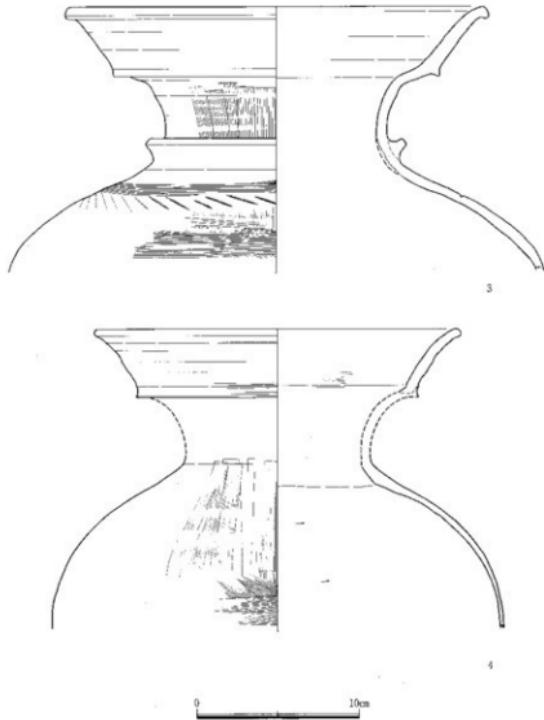
第2主体部 (第28・29図、図版22・41)

表土下の標高47.61mで検出した。第1主体部とは30cmと近接し、主軸は第1主体部よりやや東に振るN-80°Wをとる。墓壙平面形は梢円形を呈し、長さ92cm、幅66cm、深さ24cmを測る。墓壙中央には東側が頭位と推察される壺2個体を用いた土器棺が安置される。底部を打ち欠いた壺(3)へ口縁部を欠いた別個体の壺(4)を肩部から挿入する形態をとり、東側を向いた口縁部は丁寧に打ち欠かれた底部によって閉塞され更に押さえに角礫を用いている。また、西側の別個体の底部部分には両脇に長方形の角礫を置き壺を固定している。打ち欠いた部位については棺の覆いに用いられているが、(4)の口縁部の一部など墓壙内で検出されない部分もみられた。

土器棺に使用された壺はいずれも複合口縁で、大きく外反し端部に面をもつ形態である。体部下位については器壁が薄く、特に西側の壺(4)については厚さ2mm程度を測り、脆弱となって根の搅乱等で変形しており、接合して全体を復元するにはともに至らなかった。ただこの2体の壺については形態差がみられ、東側の壺(3)は西側の壺(4)に比べ口径や最大胴径などや法量が大きく、頸部と大きく張った肩部との屈曲部に凸帯を廻らせ、肩上位に平行沈線と連続刺突文を施す等装飾的である。これに対し西側の壺(4)はやや小ぶりで口縁部も拡張することなく丸味をもって終える形態である。



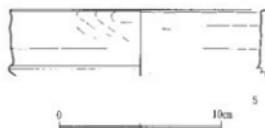
第28図 腹部19号墳第2主体部実測図 (S = 1 : 20)



第29図 服部19号墳第2主体部出土遺物実測図

その他の出土遺物（第30図、図版41）

東側周溝埋土から甕(5)が出土した。直立して端面をもつ複合口縁部で口縁部1/6が残存している。出土状況から19号墳の転落遺物である可能性がある。



第30図 服部19号墳周溝出土遺物実測図

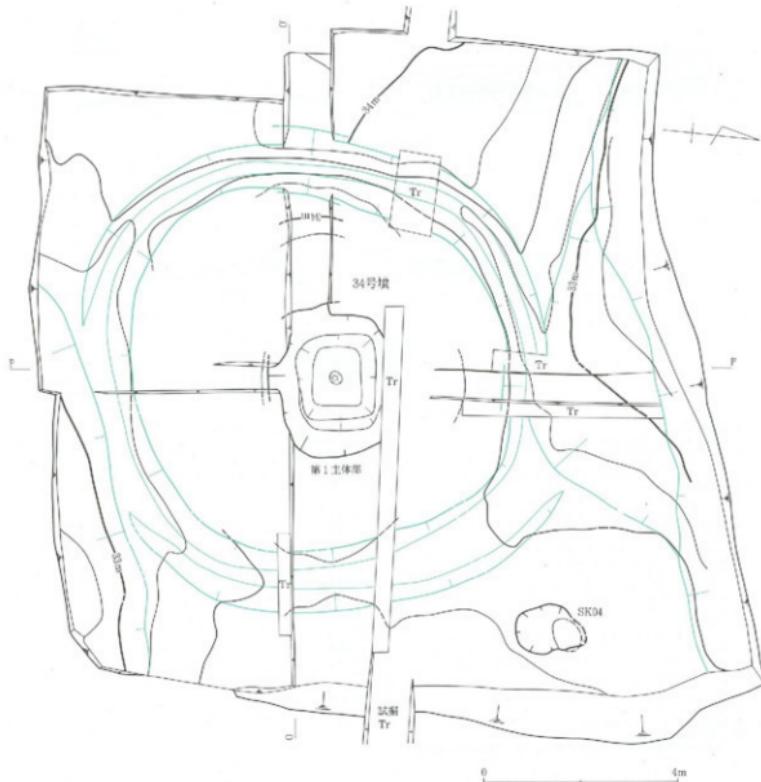
5. 服部34号墳（第3・31～34・35図、図版23・24・42）

位置と現状

調査区中央よりやや西側、標高34mの尾根上に立地する。西側の尾根上位に約60m離れて17号墳が位置し、18m東の尾根下位に位置する16号墳、さらに10m隔てた36号墳とともに小支群を成している。調査前は階段状の平坦地となっており、尾根筋の中央部に幅1m前後、高さ50cm程の道状の高まりが続いていた。平成11年度実施の試掘調査に於いて、この高まりに沿って北側にトレンチを開削した際、溝状および土坑状の落ち込みが確認され、何らかの遺構の存在が予想されていた。ただ、現状では地形の変更が著しく古墳状の高まりや周溝状の窪み等は観察されず、古墳の存在は可能性として挙げるととどまっていた。

墳丘

墳丘の大半は削平されて南北の斜面低位部分に均され平坦地として改変されている。唯一尾根筋にみられる幅1m程の高まり内に旧表土と僅か10cm程の盛土が遺存するにとどまる。墳丘は、尾根筋を古墳



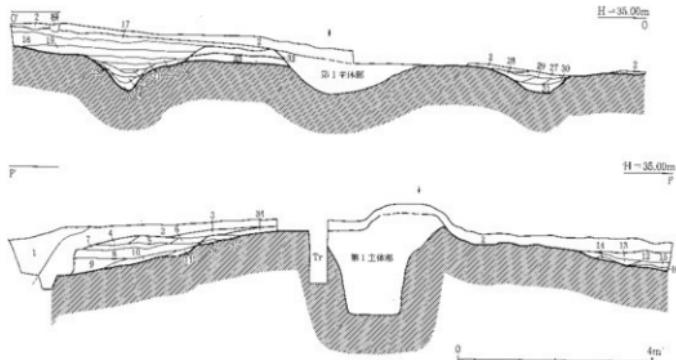
第31図 服部34号墳墳丘遺存図 (S = 1 : 100)

の中心に設定し、地山を成形し、旧地表上に盛土して形を整えることで造られている。周溝は南北方向の一部を除いてほぼ一周し、それによって円墳であることやその規模が明らかとなった。南北径8.6m、東西径8.1m、北側周溝底から第1主体部検出面まで高さ約90cmが遺存する。周溝は北側で幅1.4m、深さ70cmを測る。

埋葬施設 (第33図、図版23・24・42)

墳丘中央やや北寄りで主体部1基(第1主体部)を検出した。検出標高は34.10mで盛土中から掘り込まれている。墳丘掘削時に主体部上層も確認されるだけで30cm程の削平を受け、北側辺を平成11年度のトレンチが掘削する。平面形は若干辺の長短はあるもののほぼ隅丸方形を呈し、底面に主軸を合わせた場合、N-S^{84°}-Eを振り尾根筋に並行となる。墓壙規模は上面で、南北3.15m、東西2.40mを測る。断面は検出面から80cm、標高33.30mあたりまで緩やかなすり鉢状を呈するが、そこから底面までは80°弱の傾斜で急激に1.2m程下り底面へ続く。検出面から底面までの深さ2.08mを測る。底面は平坦で東西に軸をもつ隅丸長方形を呈し、中央に長径28cm、短径25cm、深さ11cmを測る平面格円形の小ピットを有する。

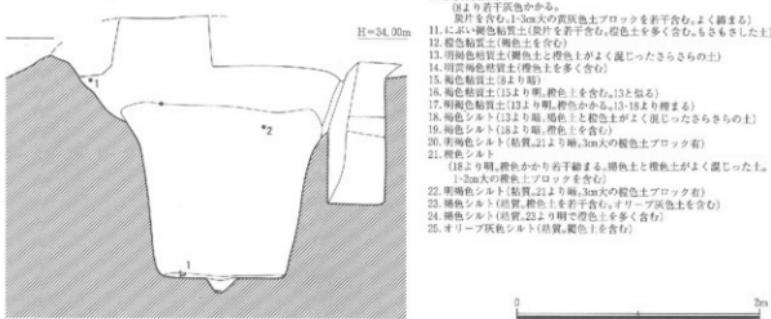
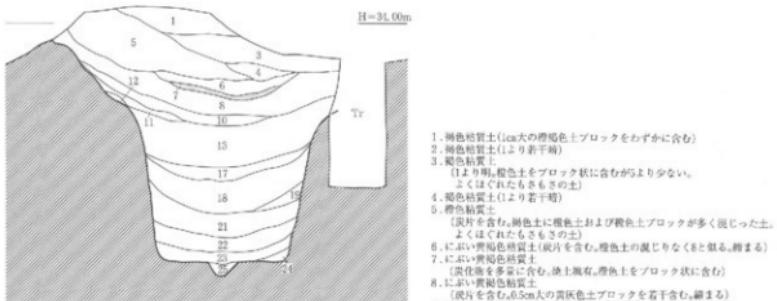
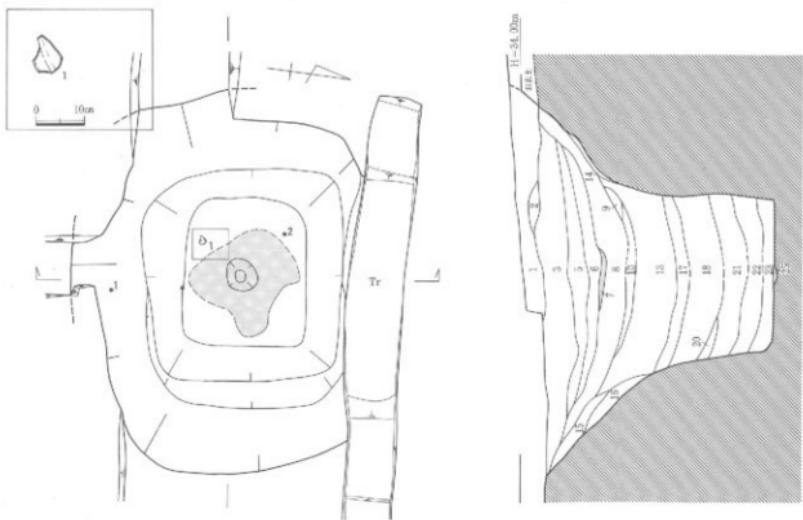
主体部の断面観察から、炭化層である第7層の存在や鉄製品(2)が上面で出土していること等から、



- 1. 棕色粘質土
(赤い褐色土・根を食む。褐色土ブロックを含む)
- 2. 棕色粘質土(腐葉土・表土・耕作土)
- 3. にじいろ褐色粘質土
(2より明るい褐色から。0.3m大的の黄褐色土ブロックをわずかに含む)
- 4. 褐色粘質土(2より暗い)
- 5. にじいろ褐色粘質土(3より黄色から。0.3m大的の黄褐色
ブロックを含む。褐色土を若干含む)
- 6. 明褐色粘質土(シルト質で、より褐色かかる)
- 7. 褐色粘質土(若干含む。0.5m大的の褐色土ブロックを含む)
褐色土を若干含む。僅量土をわずかに含む)
- 8. 褐色粘質土(シルト質より若干明るい褐色土を含む)
- 9. にじいろ褐色粘質土
(2より明るい。0.3m大的の黄褐色土ブロックをわずかに含む)
- 10. 黃褐色粘質土(ほとんどの黒褐色を帯びる部分あり)
- 11. にじいろ黃褐色粘質土
- 12. 明褐色粘質土
(0.5m大的の褐色土・黄褐色土ブロックを含む)
- 13. 黑褐色粘質土(0.5m大的の褐色土・黄褐色土ブロックを含む。褐色土を含む)
(1より明るい褐色土ブロックを含む。部分的に黒褐色かかる)
- 14. にじいろ褐色粘質土
- 15. 黄褐色粘質土(1より明るい褐色の混じりなし)
- 16. にじいろ褐色粘質土(やや褐色かかる)
- 17. 明褐色粘質土(2より褐色かかる)
- 18. 黄褐色粘質土(ブロックの混じりなし)
- 19. にじいろ褐色粘質土
(2より明るい褐色を含む。0.3m大的の褐色土ブロックをわずかに含む)

- 20. にじいろ褐色粘質土(1m大的の褐色土ブロックを含む)
(0.5m大的の褐色土・ブロックをわずかに含む)
- 21. にじいろ褐色粘質土(2より若干暗い。0.5-1m大的の褐色土ブロックを20より多く含む。皮肉を含む)
- 22. 墓壙褐色粘質土(0.2m人の黄褐色土・ブロックを多く含む)
- 23. 黒褐色粘質土(皮肉をわずかに含む。0.2m人の黄褐色土・ブロックを多く含む。
1m大的褐色土ブロックを含む)
- 24. 墓壙褐色土
(皮肉をわずかに含む。やや黄褐色かかる。0.2m大的褐色土・ブロックを含む)
- 25. 墓壙褐色土
(2より明るい褐色土をわずかに含む。0.5m大的褐色土・ブロックを若干含む)
- 26. 黄褐色粘質土
(シルト質。褐色土を若干含む。0.5m大的の黄褐色土・ブロックを若干含む)
- 27. にじいろ褐色粘質土(2より明るい褐色土を含む)
- 28. 黄褐色粘質土(2より明るい。0.2m大的褐色土・ブロックを含む)
褐色土ブロックを多く含む)
- 29. 黑褐色粘質土(0.2m大的褐色土・ブロックをわずかに含む)
- 30. 黑褐色粘質土
(皮肉をわずかに含む。0.5m大的褐色土・ブロックを含む)
- 31. 黑褐色粘質土(皮肉をわずかに含む。0.5m大的褐色土・ブロックを含む)
- 32. 黑褐色粘質土(1.2mもの厚い、ブロックの混じりなし)
- 33. 黑褐色粘質土(0.5m人の褐色土・ブロックを含む。表面土)
- 34. 黑褐色粘質土(褐色土・ブロックを含む。1m大的の褐色土・ブロックを含む)
- 35. 黄褐色粘質土(シルト質)
- 36. 黄褐色粘質土(35より明るい褐色かかる)

第32図 服部34号墳墳丘断面図 (S=1:100)



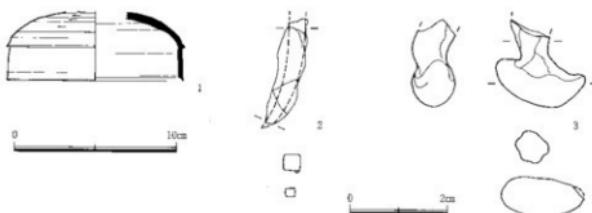
第33図 服部34号墳第1主体部実測図 (S=1:40)

固く締まった第10層灰黄褐色粘質土上面が埋葬施設底面と考えられ、埋葬形態として断面に棺の裏込めのような層は認められず直葬墓とみられる。第10層以下は中央が窪みながらもほぼ同様な堆積状況で、地山のよくほぐれた土を人為的に水平に埋めたものと考えられる。

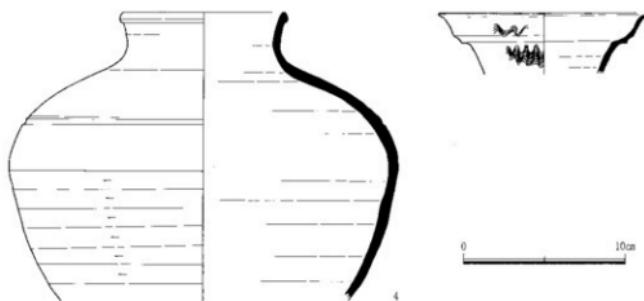
遺物は底面で杯蓋(1)と、それと同一個体とみられる須恵器片が第8層から出土している。また、第10層上面で不明鉄製品(2)、第5層からガラス質滓(3)、その他埋土から土師器細片が数点出土している。遺物はこのうち図化可能な(1~3)を掲載した。(1)は径10.7cm、器高4.2cm弱とみられ、丸く小型化した杯蓋である。稜は鋭く突出し、比較的長い口縁部は端部でやや外傾して内傾する段を有する。(2)は断面方形の不明鉄製品で釘あるいは鉄錐の基部等の可能性が考えられる。(3)は暗灰色の滴状に膨らんだガラス質滓である。

その他の出土遺物（第35図、図版42）

34号墳検出の際、北側の平坦に均された後世の整地層を中心として須恵器片が出土している。このうち壺(4)が接合および図化可能であった。また、34号墳と16号墳の中間部の平坦面に設定された平成11年度第6トレンチで出土したのが甕(5)である。いずれも34号墳に伴う遺物とは言い難いが、当該期の遺構の存在を示唆する遺物である。（谷口）



第34図 股部34号墳第1主体部出土遺物実測図



第35図 股部34号墳周辺出土遺物実測図

6. 服部36号墳（第3・4・36～41図、図版25～27）

位置と現状

調査区の北東端、標高36mに位置する16号墳から北へ下る小尾根上の標高26～29mに位置する。16号墳とは3号墓を間に隔てて約10m離れる。現状では3号墓と同様に、狭いながらも墳頂部ともみられる平坦面を確認できた。平成11年度、傾斜の変換点付近に設定した第7トレンチで土坑状の遺構を検出し、その埋土から石製紡錘車（第36図-1）が出土した。これらの試掘調査の結果から、盛土の流失した古墳あるいは土塙墓などの可能性が考えられた。

墳丘

厚さ5～15cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳丘の築造は、尾根上位側に弧状の溝を切削して成形し、さらに盛土して形を整えている。

盛土の厚さは最大76cmを測るが、尾根上位側は流失したものとみられ15cm程の遺存が観察される。表土除去後の墳頂部の標高は28.26m、墳丘の遺存高は北東墳壇から墳頂部まで最大2.5mを測る。周溝は尾根の上方側半周程度に認められ、規模は北西側で78cm、深さ18cmを測る。墳丘は第2主体部造営時に北東側を中心として拡張されており、規模は南北方向で径10.4m、東西方向で8.8mを測り、尾根筋がやや長い円墳である。

埋葬施設

埋葬施設は2基が検出された。墳丘中央やや尾根上位寄りに第1主体部が、2.5m北東下位に第2主体部がそれぞれ尾根筋に対し直交する軸をもって造られている。

第1主体部（第36・40図、図版25・26・42）

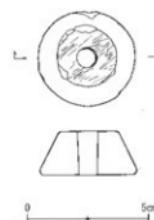
第1主体部は墳頂部ほぼ中央に位置し、主軸はN-59°-Wにとる。墓壇東側を幅50cm弱にわたり平成11年度試掘第7トレンチに掘削される。墓壇は平面が隅丸長方形を呈し、長さ3.94m、幅2.41m、深さ93cmを測る。墓壇床面周縁に浅い溝を掘り込み、最大37×73×55cmを測る角礫を据え、裏込めの土で固定している。これらの石は内側はさほど面が揃わず東側に向けて内幅が広がる傾向があるが、上面は比較的標高27.75m前後に揃っている。ただ、全体的に石材が不揃いで加工も粗雑、組み方も雑然とした印象を受ける。石棺であった可能性も否定できないが、石棺とすれば古墳周囲に蓋石等の石の散乱はみられなかった。土層断面の観察では木棺痕跡を確認することはできなかったが、木棺を固定するための押さえ的なものであったと考えることもできる。石組の内法を復元すると、長さ2.72～2.87m、幅1m、深さ38cmを測る。

遺物は、平成11年度試掘時に床面から5cmばかり浮いた状態で石製紡錘車（1）が出土している。上面2.3cm、底面3.7cm、高さ4.0cmを測る円錐台形で、磨研以前の粗研ぎ筋が残り、鋸歯文等は観察されない。

第2主体部（第37・41図、図版27・42・43）

第2主体部は墳丘の北東側に位置する。本来は据部に地山を掘り込んで築造したものと考えられるが、第2主体部を造った後、封土的に盛土を追加して北東裾が若干拡張されている。主軸は第1主体部よりやや北へ振るN-36°-Wにとり尾根筋に直交する。埋葬形態は箱式石棺で、墓壇は平面隅丸長方形を呈し、長さ1.54m、幅99cm、深さ53cmを測る。墓壇底面は南東から北西へ向けて低くなる傾斜がみられ、北西端には小口および側板石を据える浅い溝が掘られる。石棺の内法は、長さ73cm、幅29cm、深さ25cmを測る。蓋石は長さ60cm程度の比較的大きな石を横位で両小口に据置き、中央に40～50cm程度の二石、更にその隙間を30cm以下の小さめの石で充填している。石材はすべて板石状に加工したものではなく粗雑で厚い割石である。

棺外遺物として、ほぼ完形の杯蓋（2）と破損した杯身（3）が西端側板石上面で蓋石に挟まれた状態で出

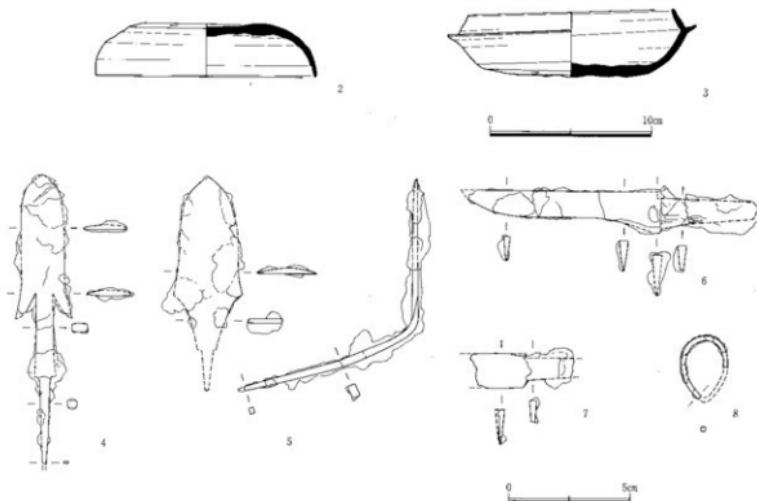


第36図 服部36号墳第1主体部出土遺物実測図

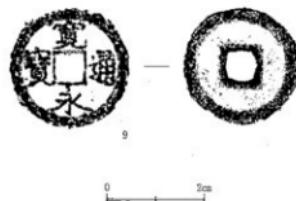
土している。棺内は一面に流入土がみられたが、鉄鎌2点、刀子2点、刀子金具1点がやや南東側に寄った状態で出土している。鉄鎌(5)と刀子(6)は破損して散らばり、床面から12cm程浮いて出土した部位も認められた。(1)と(2)は口径が合わずセット関係を成さないがともに扁平な体部で、同様な成形・調整手法を用いている。外面は外周へラ削りを行うが中央にへラ起し痕が残り、内面は横ナデで消されるものの円弧文工具痕が観察される。鉄鎌(4)は鎌身部平面柳葉形、鉄鎌(5)は平面長三角形を呈し下位で大きく折れ曲がる遺存状態である。刀子(6)はよく使用され刀身元部に比べ刃部がかなり目減りしている。刀子(7)は(6)とは別個体であるがほぼ同様な大きさになるものとみられ刀身元部から茎部にかけての遺存である。刀子責金具(8)は幅・厚さともに2mmを測り倒卵形した環状を呈する。

その他の出土遺物（第38図、図版43）

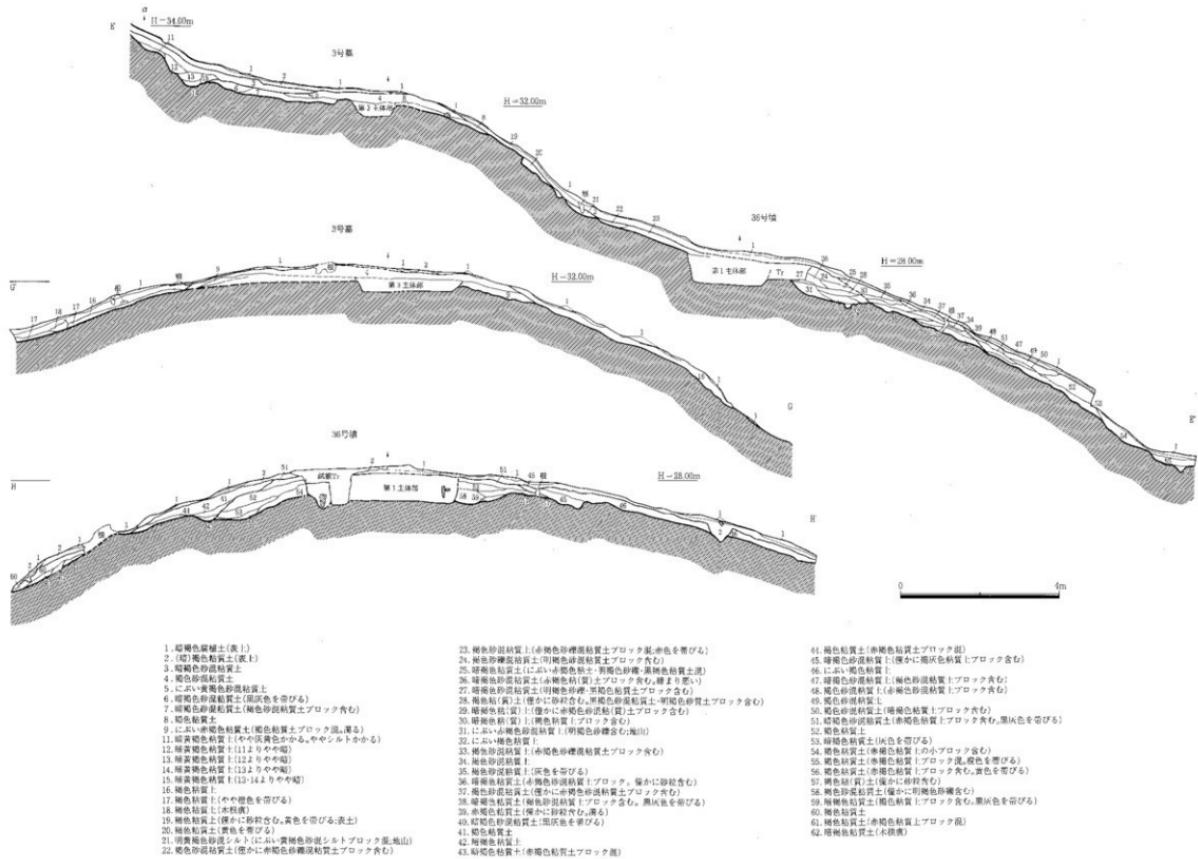
北東埴裾部表土から銅錢(8)が出土している。江戸時代の通貨「寛永通寶」で、直接古墳には関係ないものと考えられる。（藤本）



第37図 股部36号墳第2主体部出土遺物実測図

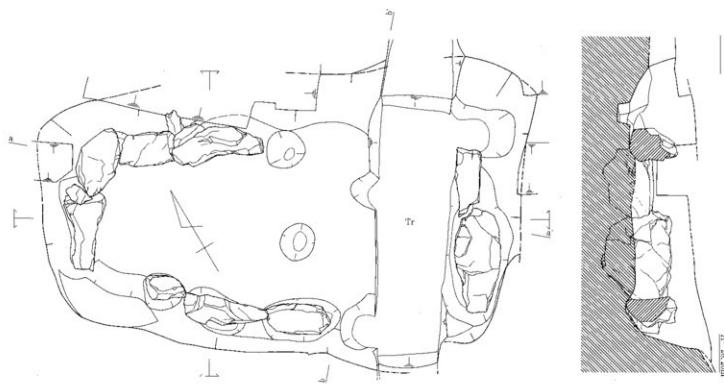
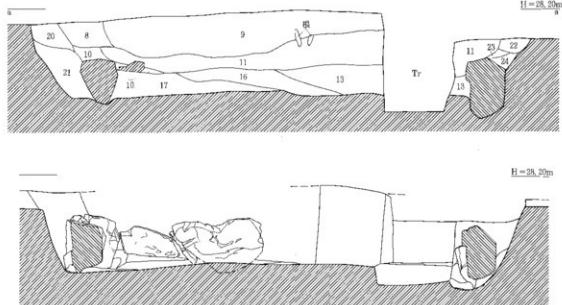
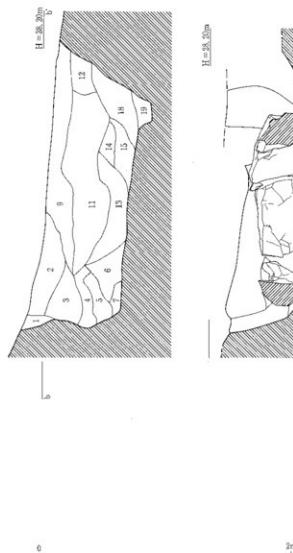


第38図 股部36号墳東裾部出土遺物拓影

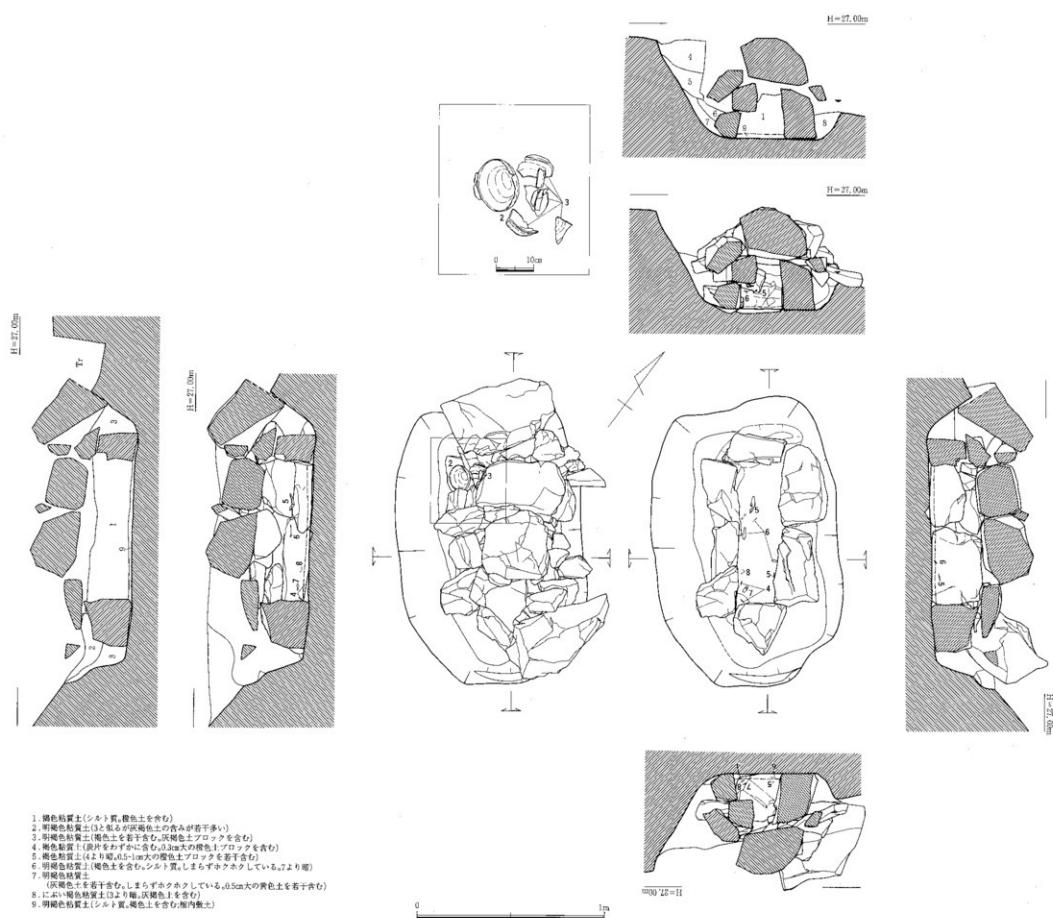


第39図 腹部36号墳、腹部3号墓埴丘断面図 (S = 1 : 100)

- 褐色の砂利土
- 褐色の砂利土(わずかに鉛鉱を含む、鉛色を帯びる)
- 褐色の砂利土(褐色鉱物粘土ブロック層)
- 4.に赤い赤色粘土(わずかに鉛鉱を含む、褐色色粘土質上ブロック層)
- 5.褐色の砂利土(褐色鉱物粘土質上ブロック層)
- 6.褐色の砂利土(鉛色を帯びる)
- 7.褐色の砂利土(赤色鉱物粘土質上ブロックを含む)
- 8.褐色の砂利土
- 9.褐色の砂利土
- 10.褐色の砂利土(赤色を帯びる)
- 11.褐色の砂利土
- 12.褐色の砂利土(赤色を帯びる、灰陶色粘土質上・灰陶色粘土ブロック層)
- 13.(?)褐色の砂利土(鉛色を多く含む、赤色を帯びる)
- 14.褐色の砂利土
- 15.褐色の砂利土(鉛色を帯びる)
- 16.褐色の砂利土(鉛色を帯びる)
- 17.褐色の砂利土(に赤い赤色砂利粘土質)
- 18.褐色の砂利土(褐色を帯びる、鉛色を含む、褐色色今年質土ブロック層)
- 19.褐色の砂利土(明褐色を帶び、褐色鉱物を多く含む)
- 20.褐色の砂利土(に赤い赤色粘土質上ブロック層)
- 21.(?)褐色の砂利土(褐色を帯びる、褐色色粘土質上ブロック層)
- 22.褐色の砂利土(に赤い赤色粘土質上ブロックを含む)
- 23.褐色の砂利土(わずかに鉛鉱を含む)



第40図 服部36号墳第1主体部実測図 (S = 1 : 30)



第41図 服部36号墳第2主体部実測図 (S = 1 : 20)

7. その他の埋葬施設と出土遺物（第4・42~44・45図、図版28・43）

S X - 0 1 (第4・42・44・45図、図版28)

調査区の南東部、尾根筋から5m弱下った標高34mの南斜面に立地する。位置的には1号墓の南東隅裾部にあたり、削平されて南裾が明確ではないものの16号墳からは本来7~8m程南に位置するものとみられる。

埋葬形態は箱式石棺で、検出した段階で既に蓋石ではなく、側板もやや内側に傾いている状況であった。墓壙自体も尾根上位からの流土で流失が認められた。墓壙は平面隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.49m、幅92cm、深さ31cmを測る。主軸は傾斜に対しやや南北に振るN-19°-Wをとる。箱式石棺は、墓壙や西寄りに据えられ、その内法は長さ80cm、幅23cm、深さは側板の上端より11cmを測る。石棺の構造は、墓壙底面に厚さ10cm弱の石2枚を棺床面が水平になるように固定し、側板は長さ40cm、幅15cm、厚さ6~10cm程度と比較的そろった2枚を角辺でつなぎ、両小口でやや大きめの石で側板石をはさみ込むよう組み合わせ構築している。また、墓壙上層で石棺の周囲に両小口と側板中央部の石のつなぎ目を中心として角礫の配置がみられる。裏込め的に使用されたかもしくは蓋石の構造がどんなものであったのか不明であるが、遺存する棺の状況から厚さ数cmの板石が使用されたとは考え難く、これらの角礫は蓋石の名残りである可能性も考えられる。

遺物は、棺埋土の第2層中より口縁部片(第43図-1)が出土しており、流入遺物と考えられる。橙褐色の色調で、高杯あるいは碗とみられる。

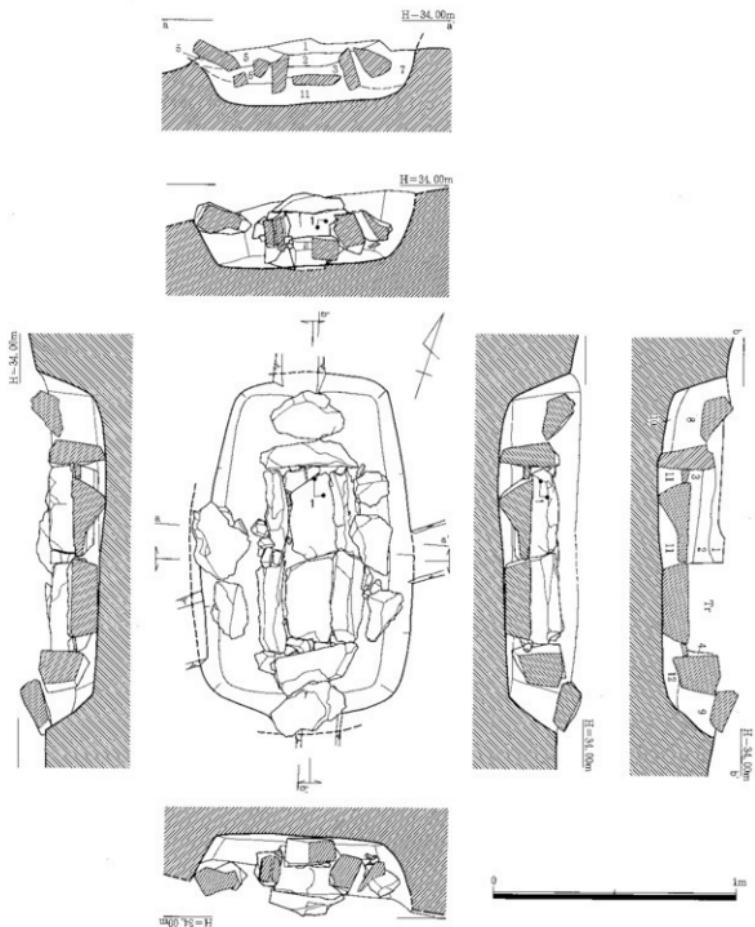
なお、調査区南東端のC18区、S X-01から10m南東に離れた南斜面、標高32.5mで高杯(第45図-1)が出土している。直接S X-01と関わる遺物とはいえないが、この時期の遺構の存在を示唆する遺物である。(1)は杯底部から口縁部へ向けて内湾気味に開き、脚部は裾部で屈曲して聞く形態である。赤彩される。杯部内外および脚部外面の調整は剥落のため不明瞭である。

S X - 0 2 (第4・43・46図、図版43)

調査区北東部、16号墳から北東へ派生する小尾根筋から5m程下った北斜面、標高32mに立地する。位置的には16号墳の北側裾から4m、高さ1.5m程下った場所である。16号墳の墳頂部から距離にして10m、高さ3.7mの位置である。

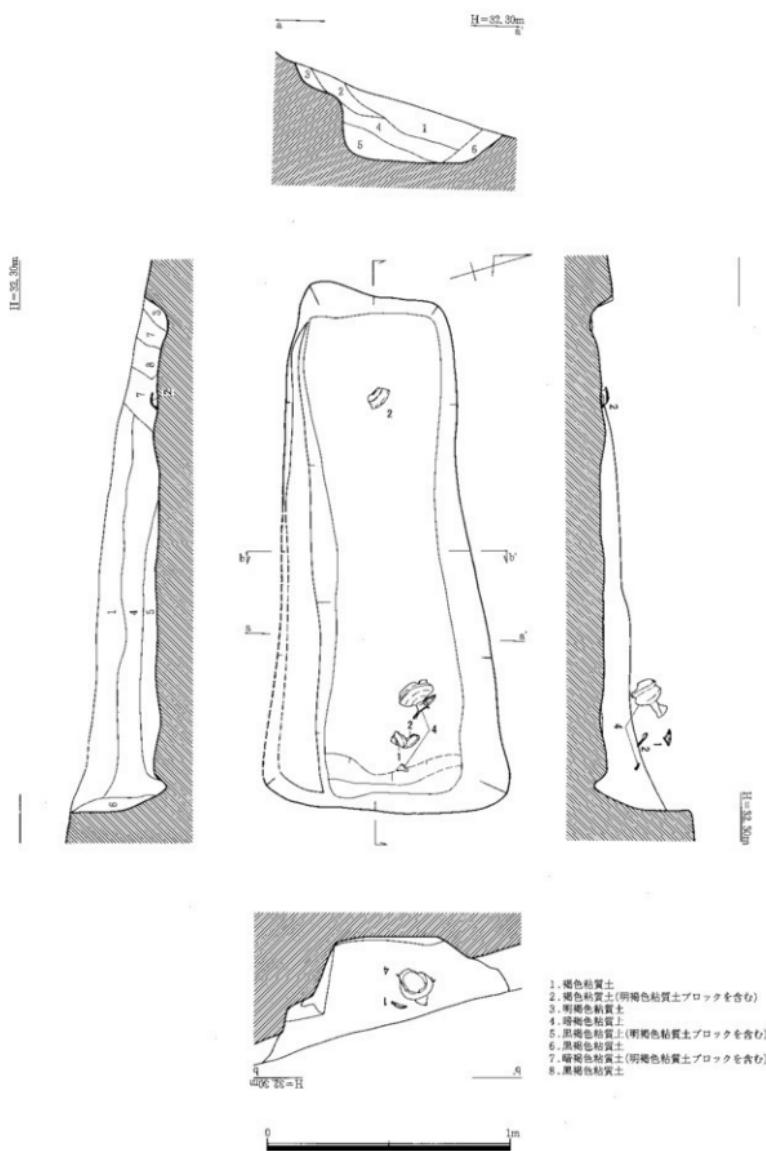
墓壙平面はやや東側が膨らむ隅丸長方形で、主軸は16号墳から下る傾斜に対し若干北へ振るもの直交し、N-76°-Wをとる。墓壙規模は長さ2.18m、幅は西側で64cm、東側で1.02m、深さは東側で51cmを測る。南側で一部二段掘りとなっており、西側から東側へかけて徐々に幅を広げている。底面はやや凹凸がみられ、長さ1.90m、幅56cm程度を測る。東端に小口穴とみられる深さ5cmの溝がある。土層断面の観察から、木棺痕跡は認められなかったが、小口穴と考えられる溝や第6層等が棺の裏込めと考えられること、一部二段墓壙であること、墓壙上部が流失していることなどを加味し、埋葬形態として木棺直葬の可能性が強いものと思われる。

遺物は、杯蓋(1)、杯身(2・3)、台付壺(4)がある。墓壙東端の第1層中、底面から13cm程度浮いた状態でまとまって出土している。このうち杯身(2)は接合する個体が約1.4m離れた墓壙西側床面で出土している。床面からかなり浮いた状態であり、木棺とすれば棺外の遺物とみられる。蓋杯類(1~3)は焼上がりが(4)に比べ甘く、器壁厚く器高も3.6cm程度と扁平で端部は鈍い作りである。杯身(2)は(3)に比べ立上りが短く内傾する。(4)はなめらかなハの字状に開く薄く整った脚部に対し、口縁部を中心として焼き歪みがあり、体部の厚さも一定でない。扁平な壺底部から肩部で張り出し頸部ですばまつて外傾する口縁部へ続く広口の壺である。(谷口)



1. 黄褐色粘質土¹シルト質。0.3cm大の黄褐色土ブロックをわずかに含む
 2. 黄褐色土質。
 (より明。若干黄褐色かかる。0.5cm大の黄褐色土ブロックをわずかに含む)
 3. 黄褐色粘質土(灰片を含む)。黄褐色土を含む。黄褐色土ブロックをわずかに含む)
 4. 黄褐色粘質土(0.3cm大の黄褐色土ブロックをわずかに含む)
 5. 黄褐色土質。(より若干不明。緑まる)
 6. 黄褐色土質。
 (より明で若干黄褐色かかる。0.5cm大の黄褐色土ブロックを含む。緑まる)
7. 黄褐色粘質土
 (赤褐色かかる)。灰片を若干含む。0.5cm大の黄褐色土ブロックをわずかに含む)
 8. にぶい黄褐色粘質土(發褐色土ブロックを含む。黄褐色土を若干含む)
 9. 黄褐色粘質土(やや赤褐色かかる)。灰片を若干含む)
 10. にぶい黄褐色粘質土
 (若干赤褐色かかる)。灰片を含む。黄褐色土を含む。灰褐色土ブロックを含む)
 11. 黄褐色粘質土(灰片を含む)。灰褐色土を若干含む)
 12. にぶい黄褐色粘質土(0より若干明。灰褐色土ブロックを含む。棕褐色土を若干含む)

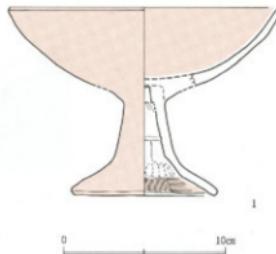
第42図 SX-01実測図 (S = 1 : 20)



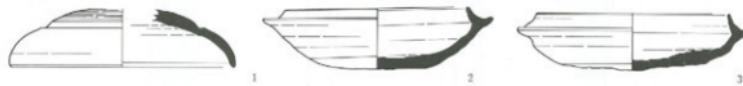
第43図 SX-0 2 実測図 (S = 1 : 20)



第44図 SX-01出土遺物実測図



第45図 C18区出土遺物実測図



第46図 SX-02出土遺物実測図

第3節 弥生時代の墳墓の調査

平成11年度、12年度にわたる今回の調査で、服部1～3号墓と計3基の弥生時代後期の墳墓を検出した。これらの墳墓は、当初古墳として認識され、服部15、14、35号墳として調査を進めてきたもので、その後墳形や主体部、出土遺物等の検討から上記のように名称の変更を行った。

位置的には、これら3基は調査区の東側に分布し、前方後円墳である23号墳が占換する標高80m弱の丘陵頂部から東へ下って600m余り延びる尾根筋のうち、鞍部を介し主稜線が南東へ屈曲する尾根中央部の西側に位置する。

1. 服部1号墓(第3・4・47～53図、図版29・30・44)

位置と現状

服部1号墓は、独立丘陵(標高80m弱)の東西方向に延びる尾根のはば中央部に立地し、尾根上の北西から続いていた平坦地の南東端部に位置する。当初服部15号墳として認知されてきたが、調査の結果、判明した周辺の数基の墳墓とともに墓群を形成する。立地する独立丘陵の稜線はこの墳墓から東側にやや細りながら曲がって下り、2号墓が東側に隣接して造営される。標高は34.9m程度で、付近の水田面からの比高差は約26mである。調査前の観察では、近年まで畑あるいはきのこ栽培等に利用されていたものと見られ、ほど木の残欠や畠状の落ち込みが認められたが、現在は荒地に復している。現況では墳丘の北東及び南西側は自然な斜面で、北西側と南東側に僅かに傾斜の変換が認められる程度であったが、試掘調査の結果古墳の存在が想定されていた地点である。なお、本墳墓の北～北西側墳裾付近を後世の道によって若干切られる。

墳丘

墳頂部は、削平を受け、近年の耕作等に伴うものと見られる幅20～30cm程度、深さ20cm前後の溝が尾根にほぼ並行の北西～南東方向にはほぼ80cm間隔で6条掘り込まれる。墳形はややいびつな長方形形状を呈し、北西～南東辺16.0m、北東～南西辺12.8m、高さ北東および南東側墳裾から1.16m、北西側溝底から0.37mを測る。墳丘は主として地山成形によって形成され、まず尾根統きの墳丘北西側に幅1.8m、深さ0.3mの溝を掘り込むことによって墳丘を尾根から分離するとともに、南西側は不明瞭ながら、北東側および南東側は僅かながら地山カットしてそれぞれ裾部を造り、整形した様子が見受けられる。またこの区域内には地山成形のためか旧地表は遺存していないものの厚さ10～30cm程度の盛土と思われる土層が遺存する。しかしながら盛土の流失あるいは墳頂部が大きく削平された可能性は否定できないものの、墳丘の形状がいびつであることなどを考慮すると、本墳墓は墳丘を積極的に造成するといったものではなく、埋葬施設周辺の空間を若干区画して整形する程度のものであったと考えられる。

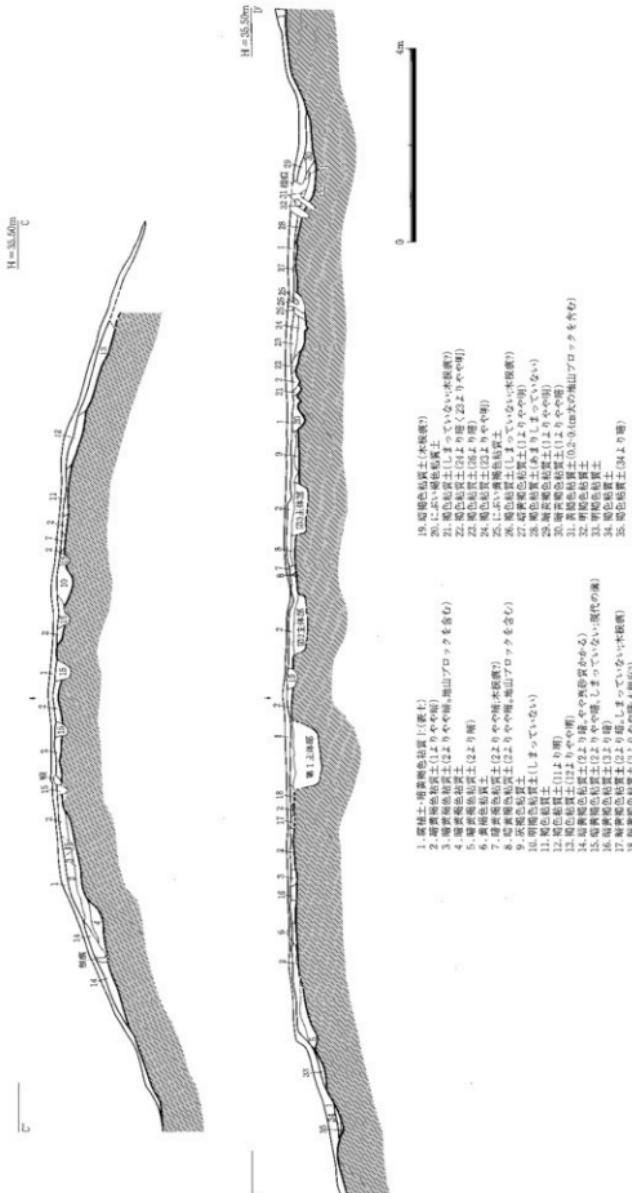
埋葬施設

墳頂部に計4基の埋葬施設を検出した。軸が尾根と直交方向の3基(第1～3主体部)、尾根と並行方向が1基(第4主体部)である。このうち第1～3主体部は墳頂部の中央部にそれぞれ1.4、1.1mの間隔をあけ、やや南西へずれるものはほぼ並行に配列する。第4主体部は第1～3主体部とは軸を90°程振り、第3主体部の北東側に第2主体部北西側隅と約10cm離れて配置する。これらの位置関係から、第3主体部が第4主体部を意識して南西側にずれ掘り込まれたと考えると、第1・2・4主体部は第3主体部より先行することになるが、切り合い関係もなく新旧関係は不明である。

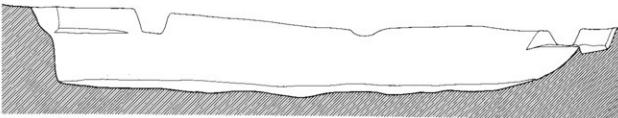
第1主体部(第48・52図、図版29・30・44)

墳頂部中央よりやや南東から検出した。4基の主体部の中で南東端の位置にある。掘り込みは僅かながらの盛土上から為された可能性も考えられるが、地山面でしか検出できなかった。

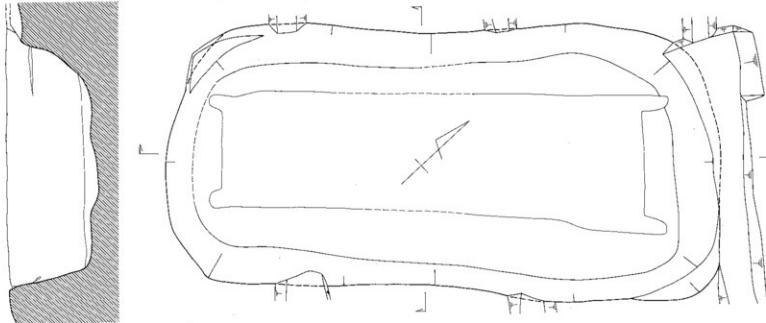
墓壙は、主軸を尾根稜線に直交方向のN・45°・Eにとり、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙上位は近年のものと見られる溝2条に切られるが、遺存規模は、長さ2.94m、幅1.48m、深さ48cmを測り、



第47圖 服部1号墓埴丘断面図 ($S = 1 : 100$)



H=34,70%



0
Im

1. 明るい褐色の土質でよくまろやかしている(代謝の土質)

2. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、細かい粒の砂(リコグロク)を含む

3. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

4. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、細かい粒の砂(リコグロク)を含む

5. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

6. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

7. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

8. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

9. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

10. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

11. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

12. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

13. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、山地(サンブ)リコグロクを含む

14. 黄褐色土質

15. 黄褐色土質

16. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

17. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

18. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

19. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

20. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

21. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

22. 黄褐色土質(さういろいろじき)

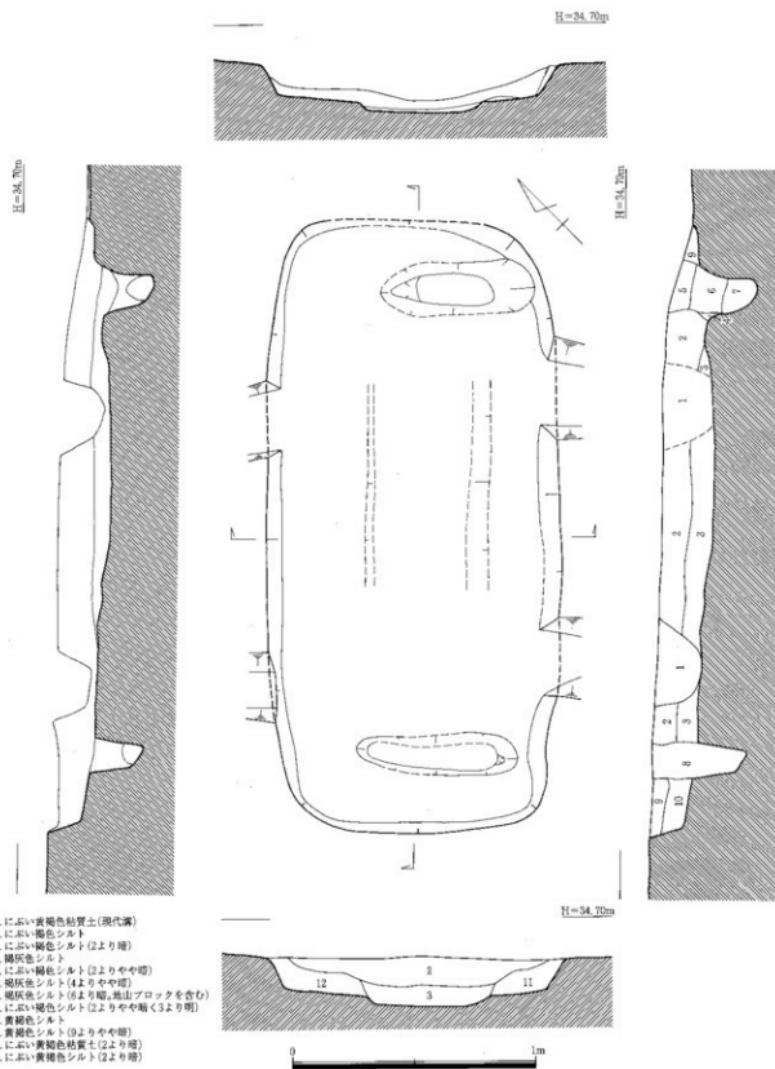
23. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

24. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

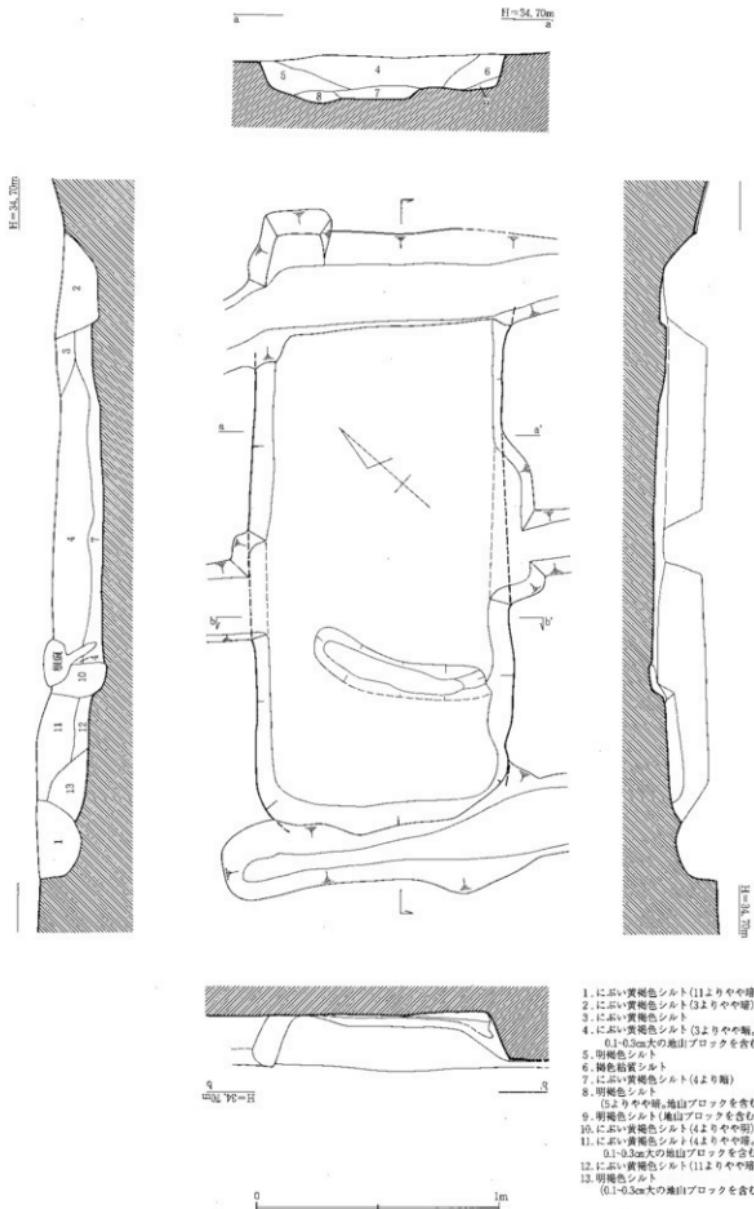
25. 黄褐色土質(さういろいろじき)で、よくやわらかく、粗い粒の砂(リコグロク)を含む

27. 桜井色粘土質土(山川ブロックを多く含む)
28. 黄褐色粘土質土(0.5-0.6mの高さの山川ブロックを含む)
29. 雨岸色粘土質土(山川ブロックを多く含む)
30. 紫褐色粘土質土(山川ブロックを多く含む)
31. 岩葉色粘土質土(24.1%より多い認められていまい)
32. 稲葉色粘土質土(31.1%より多い認められていまい)
33. 鳥居色粘土質土(31.1%より多い認められていまい)
34. 芦原色粘土質土(31.1%より多い認められていまい)
35. 鶴見色粘土質土(31.1%より多い認められていまい)
36. 鶴見灰土質土(31.1%より多い認められていまい)
37. 黑瀬色粘土質土(31.1%より多い認められていまい)
38. 鹿嶋色粘土質土(31.1%より多い認められていまい)
39. 寒川色粘土質土(31.1%より多い認められていまい)

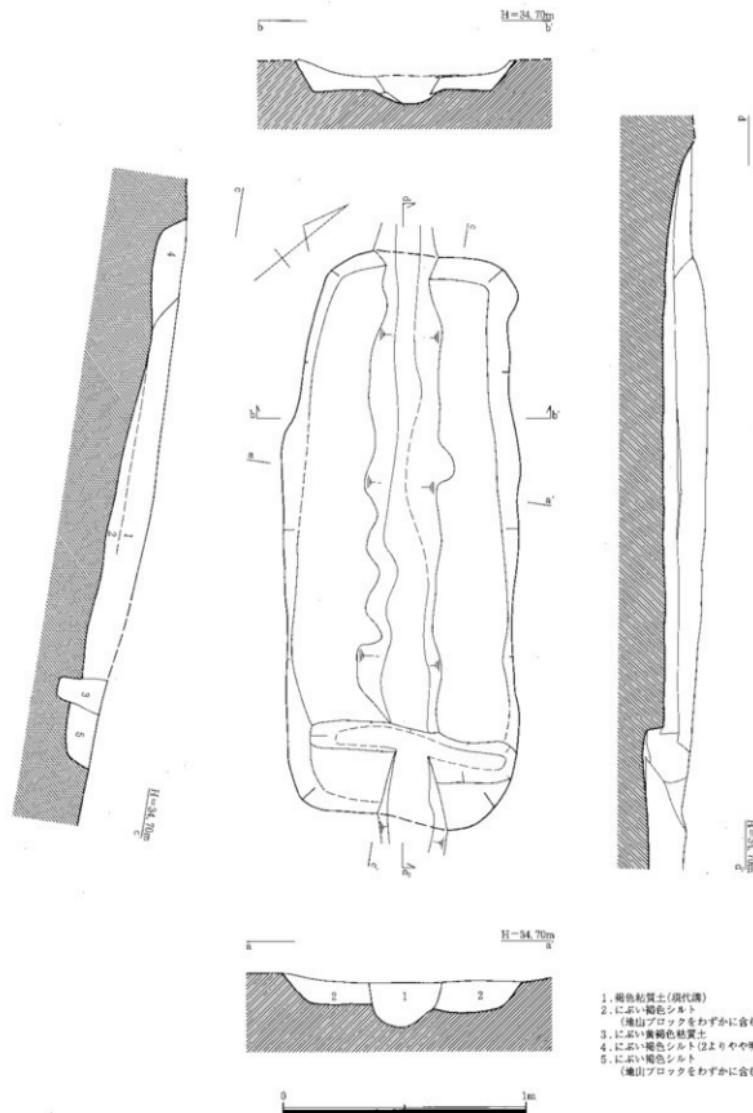
第48図 明治1号墓第1主体部実測図 (S=1:20)



第49図 服部1号墓第2主体部実測図 (S = 1 : 20)



第50図 脱部1号基第3主体部実測図 (S = 1 : 20)



第51図 脱部1号基第4主体部実測図 ($S = 1 : 20$)

1号墓で検出された4基の主体部の中では最大である。埋葬形態は、平面および断面観察から組合せ式の木棺直葬とみられる。厚さ5cm程度の板材を用いた長さ2.0m、幅50cm、深さ38cm程度の棺が埋置されたと考えられる。棺痕跡の平面検出では北東側小口部の方が南西側小口部より幅が広く、北東側が頭位と思われる。

遺物は、墓壙埋土中位層からいずれも小片の肩部(1)、鼓形器台(2)、赤彩された小片(3)が出土している。このうち器台(2)は墳丘北東側肩部周辺から出土したものと接合しており、棺埋置時の混入遺物と考えられる。また他の2点も同様の出土状態であることからいずれも混入遺物と考えられる。(1)は肩部片で外面に押引きの波状文が観察される。(1)は筒部をもつ形態の鼓形器台の受部で、外面に多条の平行沈線が施され後軽く横ナデされている。(3)は杯類の屈曲部とみられ赤彩される。

第2主体部(第49図、図版30・31)

墳頂部の中央北西寄りの地山面から検出した。南東1.4mに第1主体部が、北西1.1mに第3主体部がほぼ並行に配置し、4基の主体部の中で中央に位置する。

墓壙はN-46°-Eに主軸をとり、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙上位は後世の溝2条に切られるが、遺存する墓壙規模は、長さ2.52m、幅1.22m、深さ26cmを測る。両小口穴が墓壙南東長辺側に偏って掘り込まれ、両小口穴の間は最大深4cm程度の凹みがみられる。北東側小口穴は長さ63cm、幅22cm、深さ20cm、南西側小口穴は長さ66cm、幅17cm、深さ20cmを測る。土層の断面観察や小口穴の存在等から埋葬形態は第1主体部と同様の組合せ式の木棺直葬と考えられ、墓壙中央よりやや南東寄りに長さ1.7m、幅40cm程度、深さ20cm以上の棺が埋置されたと考えられる。

墓壙内から遺物は出土しなかった。

第3主体部(第50図、図版31)

墳頂部の北西側に位置し、南東1.1mに第2主体部が並行に、北東約40cmに第4主体部が直交方向に配置する。第1~3主体部と同様に地山面からの検出である。

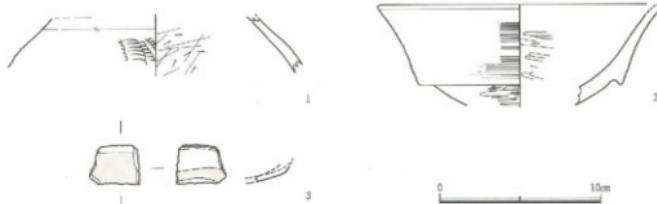
墓壙はN-49°-Eに主軸をとり、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壙上位は後世の溝3条に切られた墓壙の両小口端部が不明確である。遺存する墓壙規模は、長さ2.3m程度、幅1.07m、深さ20cmを測る。床面からは墓壙の南側1/4程度の位置にやや円弧ぎみに曲がる長さ76cm、幅17cm、深さ5cmの溝状の落ち込みを検出した。小口穴の可能性も考えられるが、墓壙の内側にやや寄り過ぎた位置である。また土層断面の観察でも棺の存在を明確にできなかった。ただその規模や他の主体部との位置関係等から、木棺墓か土塚墓かは明確ではないものの埋葬施設であることは間違いないと思われる。

墓壙内から遺物は出土しなかった。

第4主体部(第51図、図版31)

墳頂部の北側に位置し、南西約40cmに第3主体部が、南約10cmに第2主体部がそれぞれ直交方向に軸を振り配置する。第1~3主体部と同様に地山面からの検出である。

墳丘の流失と削平が進んでおり、加えて後世の溝が墓壙のほぼ中心線を縦断することから墓壙の遺存状況は極めて悪い。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸はN-42°-Wをとる。遺存する墓壙規模は、長さ2.38m、幅97cm、深さ16cmを測る。墓壙の南東小口部に墓壙幅いっぱいの小口穴と見られる長さ85cm、幅



第52図 服部1号墓第1主体部出土遺物実測図

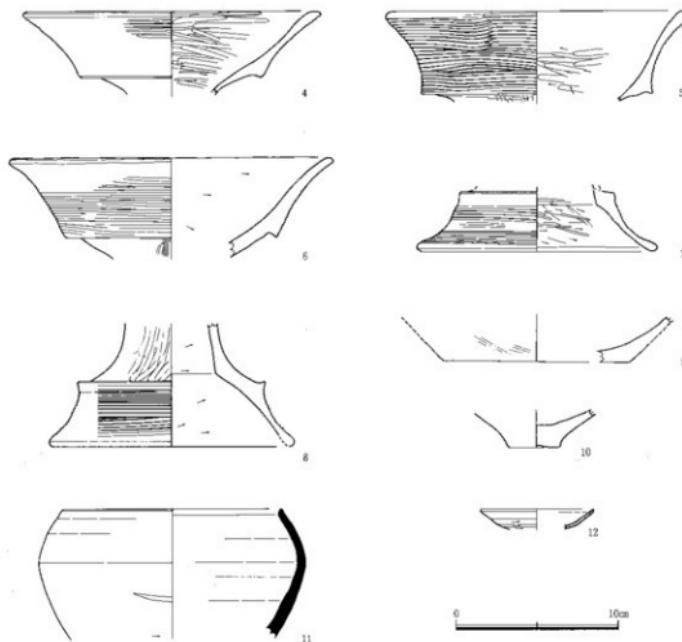
20cm、深さ20cmを測る溝状の落ち込みを検出した。よって埋葬形態は木棺直葬と考えられるが、その規模等は明確にできなかった。

墓壇内から遺物は出土しなかった。

その他の出土遺物(第4・53図、図版44)

遺物は、第1主体部内で出土した小片(第48図-1~3)以外、第1主体部の北側にある墳丘肩部付近検出のもの(4~10)、表土および後世の溝埋土中のもの(11・12)がある。墳丘肩部のものは第1主体部から約1.7m北側の1m程度の範囲内に集中する傾向があり、遺構に伴うものではないことが判明している。これらの遺物は遺存盛土にややめり込むように検出されたこと、また第1主体部内で出土した鼓形器台の小片(2)と接合したことなどを考慮すると、木棺埋設時の葬送儀礼に使用された遺物が、封土的な盛土を行う際にこの位置にまとめて廃棄あるいは置かれたものである可能性があるものと考えられる。なお、南側墳裾部の表土から検出された須恵器鉢(11)は、1号墓に伴うものとは考えられず、現在は遺存していないものの、周辺に当該期の遺構が存在した可能性が考えられる。陶器皿(12)は位置的には第3主体部を切る後世の溝埋土からの出土である。この他に周辺表土中からは陶磁器細片や砥石、近代瓦片が出土している。

墳墓に伴うとみられる遺物には、鼓形器台(4~8)と底部(9・10)がある。鼓形器台(4~8)はいずれも外面に多条の平行沈線を施し、(4)は(5・6)と比べて受部やや浅く大きく聞く形態であるが、(5・6)は深い受部で聞き具合もやや小さく全体的に肉厚で、(8)のようなしっかりした筒部へ続くものとみられる。



第53図 車部1号墓出土遺物実測図

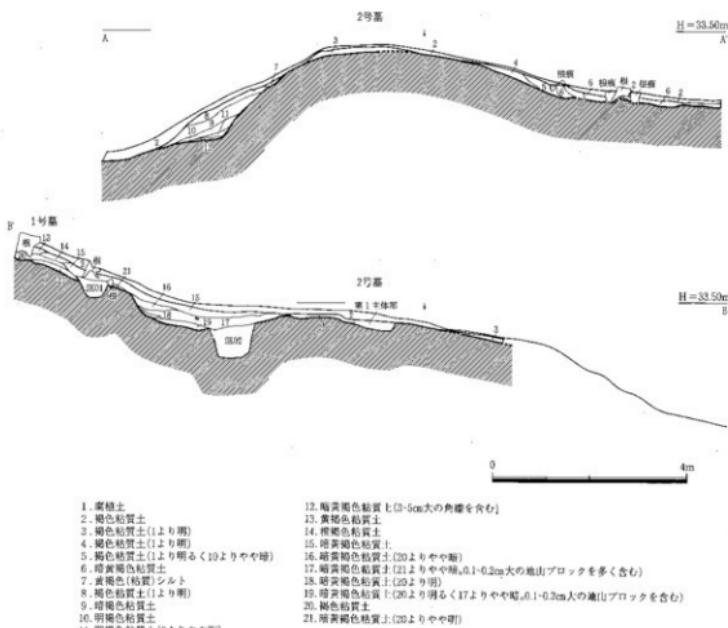
2. 服部2号墓(第3・4・54・55図、図版32・33)

位置と現状

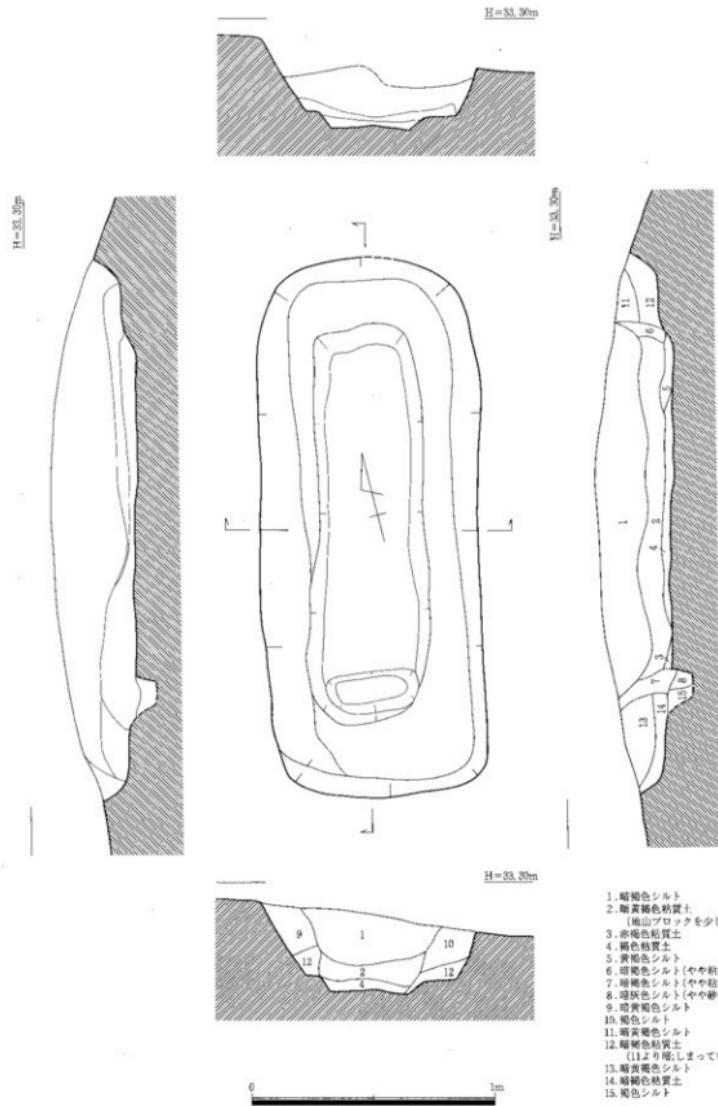
服部2号墓は、調査区東端に位置し、東部分が調査区外となる。1号墓の北東部に隣接して造営されており、尾根の平坦部から丘陵東側の鞍部に向けて高さを減じる傾斜地に立地する。標高は33m程度で、付近の水田面からの比高差は約24mである。当初服部14号墳として認知され調査を進めたが、墳墓の可能性が強く服部2号墓として名称変更を行った。調査前の観察では、雑木林となっている尾根高位の西側で若干の傾斜の変換が認められ、古墳あるいは墳墓の存在が想定された。なお墳丘の東側約1/3は現状変更予定地で、今回の調査は西側の約2/3が対象となった。

墳丘

本墳墓の規模は、東西辺約9m弱、南北辺7.1m、北側墳裾から高さ1.9m、南側墳裾から1.08mを測り、形状は方形状を呈する。墳丘は主として地山成形によって築造されており、墳丘の西側の尾根の高位側には一直線状に横断する長さ3m程の溝が掘削され、南側についてはやや不明瞭であるが北側は地山を削って整形している。東側は調査対象外のため未調査であるが、現地形の観察からは明瞭な傾斜の変換が見受けられ、北側ほどではないものの裾部の掘削がなされたとみられる。尾根の高位側の溝壁と北側墳裾はやや鋭角に掘削され、墳墓側の溝壁と南側墳裾は鈍角な掘削となっている。なお地山成形のため旧表土は認められないものの、墳丘上には若干の盛土も為されており、部分的ながら最大厚10cm強が遺存する。



第54図 服部2号墓墳丘断面図 (S = 1 : 100)



第55図 服部2号墓第1主体部実測図 (S = 1 : 20)

第1主体部(第55図、図版33)

墳頂部中央やや西寄りから墓壙1基を検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、尾根の稜線には直交するN-13°-Eに主軸をとる。規模は、長さ2.23m、幅92cm、深さ31cmを測る。南小口部に長さ38cm、幅17cm、深さ8cmを測る小口穴が掘り込まれる。埋葬形態は、土層断面観察や浅い二段墓壙の形態等から組合せ式の木棺直葬が推察される。深さ5cm程度の浅い二段掘りの内側に、厚さ5cm程度の板材を用いた長さ1.3m、幅30cm程度の棺が埋置されたものと考えられる。墓壙の深さがあまり遺存していないことや盛土の遺存の在り方等から、本来はこの墓壙(木棺)上にもう少し多くの封土的な盛土が為されていたと思われる。

墓壙内から遺物は出土しなかった。

その他の出土遺物

南側墳丘斜面表土中から須恵器部小片が、また南側墳裾及び西側周溝埋土中から土器小片が出土しているが、時期等は不明である。(山田)

3. 服部3号墓(第3・4・39・57~60図、図版4・34・35・45)

位置と現状

調査区の北東部に位置する。16号墳を頂として北東側に派生する小尾根上の16号墳の北東側から若干下った標高32~33mに立地する。現状では平坦面を確認するに留まり、墳丘状の高まりは観察されなかった。16号墳の表土除去の際、北東端から相当量の遺物が出土していることや不自然な平坦面は人為的なものである可能性が高いことなどから墳墓以外の遺構の存在の可能性も含めて、調査範囲を拡張して発掘調査を実施する運びとなった。

墳丘

尾根側と谷側の地山を削り出して成形し、現状で平面形台形状の平坦面を造っている。本来は長辺11m、短辺7.0m程度の方形だったとも考えられる。盛土は最大32cm程度である。表土除去後の墳頂部の標高は32.38m、墳丘の遺存高は盛土が確認される北東墳裾から墳頂部まで最大0.98mを測る。墓域を介する尾根側の溝は遺存状態が悪く、墳丘断面での確認に留まり平面で検出することができなかつたが、本来は尾根の上方側を等高線に沿って直線的に掘削していたと考えられる。断面での溝の規模は幅1.5m、深さ18cmを測る。

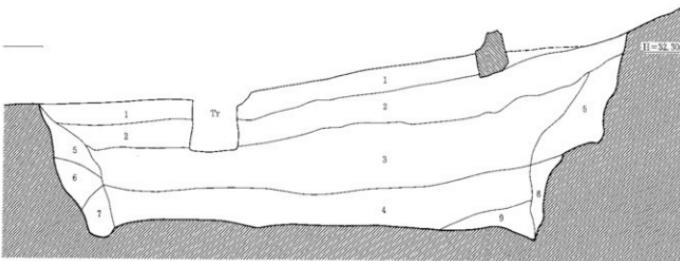
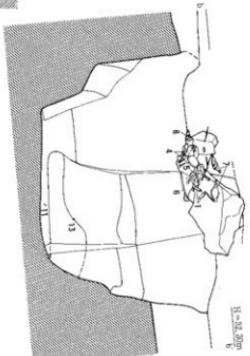
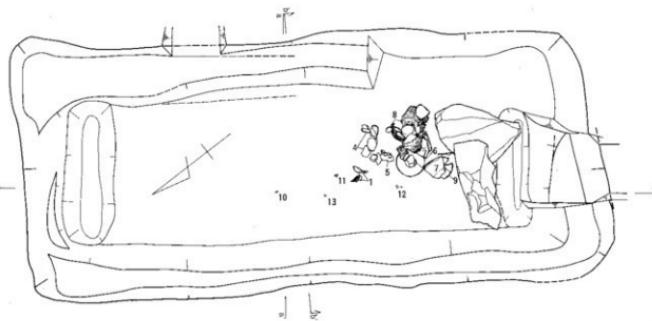
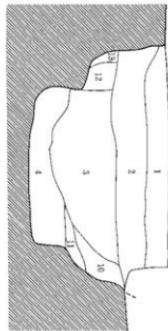
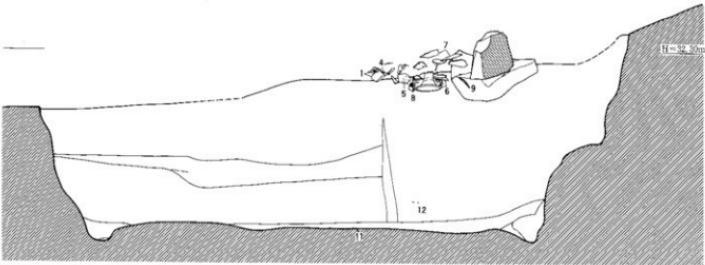
埋葬施設

墳頂平坦部のやや東側に寄った位置で埋葬施設3基を検出した。第1主体部と第2主体部は尾根筋に並行方向、第3主体部が直交方向の軸をとる。第2主体部と第3主体部に切合い関係があり、第2主体部が第3主体部より先行する。なお、主体部の形状や規模、出土遺物等から、3号墓の主たる埋葬施設は第1主体部と考えられる。

第1主体部(第56・57図、図版4・34・35・45)

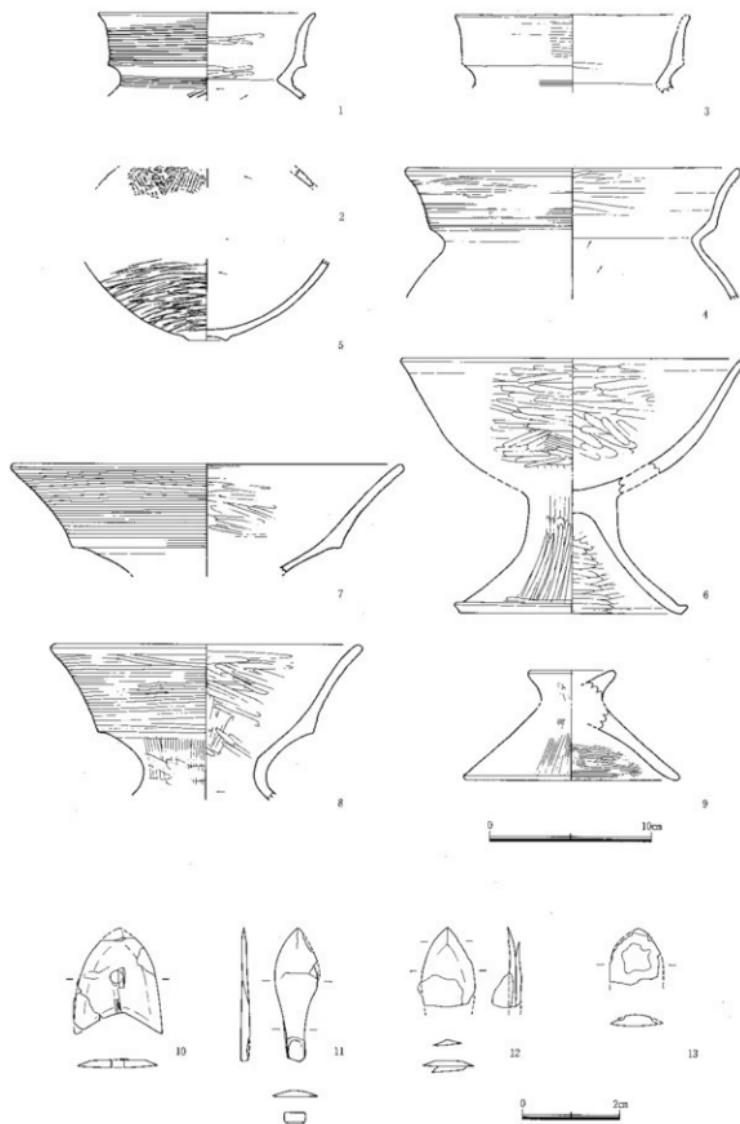
第1主体部は墳頂平坦部の南東寄りに位置し、第2主体部から1m南東、第3主体部から50cm南西の尾根高位側に配置する。墓壙平面は隅丸長方形を呈し、主軸は尾根筋に並行方向のN-36°-Eをとる。規模は長さ2.96m、幅1.31m、深さ99cmを測る。所謂、二段墓壙であり、木棺痕跡を明瞭にすることはできなかつたが、土層断面で棺の裏込め土の層が観察され、墓壙底の両端には棺の小口板を立てた小口穴が認められたことから埋葬形態は木棺直葬と考えられる。棺の規模を推定すると長さ1.4m、幅60cm、深さ40cm程度になるものと思われる。

墓壙上面の中央部より南西側に寄った位置で、弥生土器の壺(1・3)、甕(4)、高杯(6)、器台(7・8)、蓋(9)等が長さ45cm程度の標石とみられる割石2点と共に出土している。土器は石と近接しながらも石の下敷きになることなしに北東側50cm弱内に集中し、石が置かれてから後に土器が廃棄あるいは放置さ



1. 明黄色砂漠粘土質(しまり悪い)
 2. 淡黄色砂漠粘土質
 3. 黄褐色砂漠粘土質
 4. [明黄色砂漠粘土質を多く含む。しまり悪い]
 5. 明黄色砂漠粘土質(しまりやや悪い)
 6. 淡黄色砂漠粘土質
 7. (明黄色砂漠粘土質・黒褐色砂漠粘土質ブロックを含む。しまり悪い)
 8. 黑褐色砂漠粘土質(しまりやや悪い)
 9. 黄褐色砂漠粘土質(しまりやや悪い)
 10. 明黄色砂漠粘土質(しまりやや悪い)
 11. 黄褐色砂漠粘土質
 12. 淡黄色砂漠粘土質(しまりやや悪い)
 13. ぶい状砂漠粘土質(しまり悪い)

第56図 腹部3号墓第1主体部実測図 (S=1:20)



第57図 服部3号墓第1主体部出土遺物実測図

れたものとみられる。また、これら供献土器のはば下位となる墓壙底面付近で、鉄鏃4点(10~13)が散らばって出土している。

供献土器は全体的にみて、多条の平行沈線を有し、ヘラ磨き調整の多用が特徴となっている。複合口縁部(1)は口縁上位で屈曲して外方へ摘み出す形態である。口縁部頭部にヘラ工具による3~4条の沈線と下位に貝殻復縫による刺突文があり、(2)と同一個体の可能性があることから装飾壺と思われる。壺(3)は(1)に対し口縁部の外反が緩く、(4)は弓なり状で外面の平行沈線後中位を軽く横ナデする。底部(5)は底端部の摘み出しにより本来は丸底に径2.3cmの平底を作っている。高杯(6)は鉢状となる深めの杯部に基部からハの字に開いて小さな端面をもつ脚部が接合する。鼓形器台(7・8)は(8)が(7)に比べ口縁部の開きが小さく器厚である。蓋(9)は摘み部と体部いずれも端部部分の残存であるが、ハの字に開き摘み部にヘラ磨きが一部観察されるもののハケ目を主体とした調整である。鉄鏃(10~13)はいずれも鏃身あるいは鏃身先端部の残存である。このうち(10)が無茎鏃であり、平面三角形を呈し平造、中央部に目釘孔があり装着された木質痕が元部方向両面に遺存する。(11)は平面柳葉形を呈し、片丸造である。(12)は平造、(13)は片丸造である。

第2主体部(第58・59図、図版35・45)

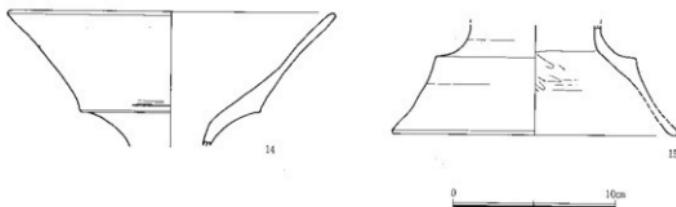
第2主体部は墳頂平坦部中央のやや北寄りで検出し、埋葬施設3基の中では墳墓の中心的な場所に位置する。墓壙平面は隅丸長方形で、主軸は第1主体部とはほぼ並行のN-45°-Eにとる。墓壙は東隅を第3主体部に切られるが、規模は長さ2.34m、幅1.15m、深さ32cmを測る。埋葬形態は、土層断面観察において棺痕跡や棺の裏込めなどが観察されず、棺を伴わない土壙墓の可能性が考えられる。

遺物は検出面から弥生土器の鼓形器台(14・15)が出土している。いずれも風化剥落著しいものの、受部(14)は外面に平行沈線が観察される。

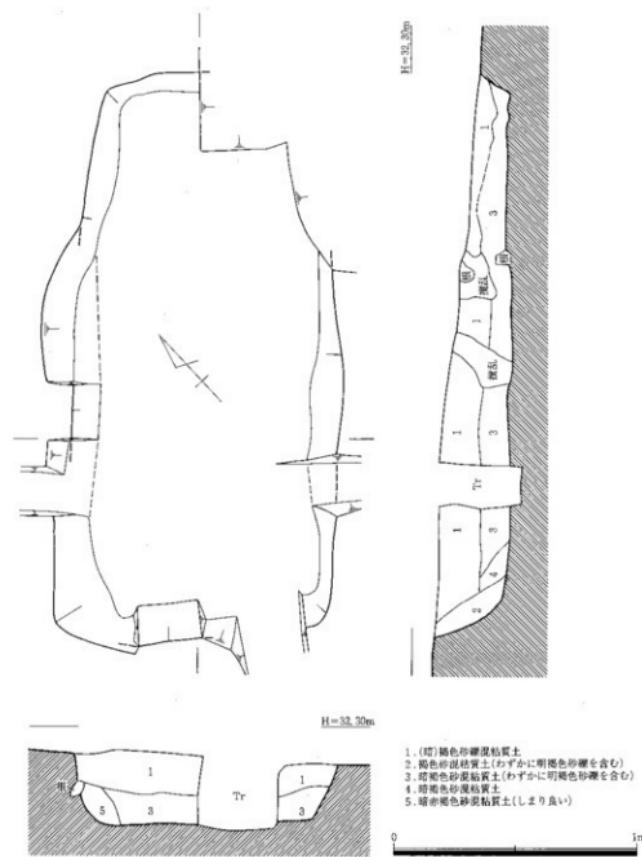
第3主体部(第60図、図版35)

第3主体部は墳頂平坦面の北東寄りで検出し、埋葬施設3基の中では尾根低位側に位置し、軸も第1主体部、第2主体部とは直交し、第2主体部の東隅を切る。墓壙平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-60°-Wにとる。規模は、長さ2.30m、幅1.13m、深さ36cmを測る。埋葬形態は、土層断面観察においても棺痕跡や棺の裏込めなどが明確でなく、特定し得なかった。土壙墓とも考えられる。

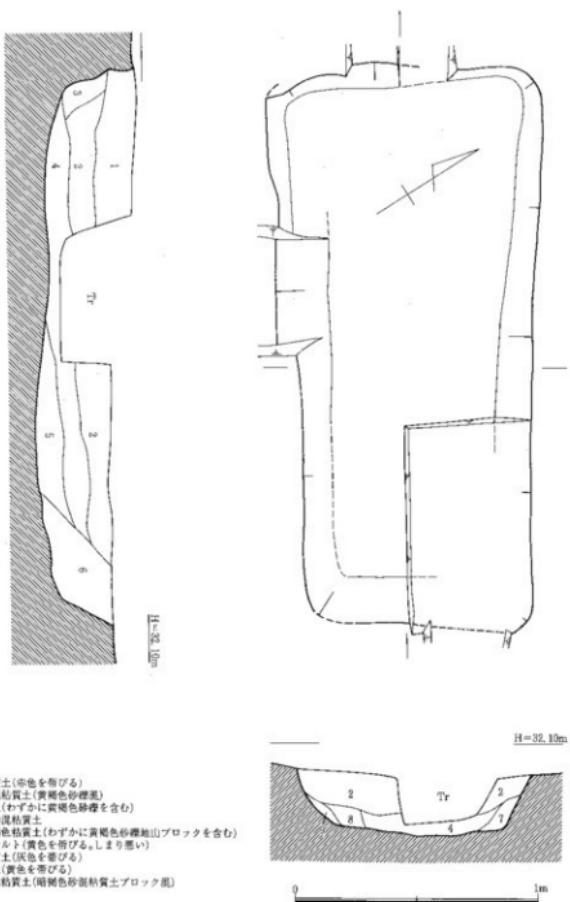
遺物は出土しなかった。(藤本)



第58図 服部3号墓第2主体部出土遺物実測図



第59図 服部3号基第2主体部実測図 ($S = 1 : 20$)



第60図 服部3号墓第3主体部実測図 (S = 1 : 20)

第4節 その他の遺構(第4・54・61~65図、図版36・37)

埋葬施設以外の遺構として、調査区東側を中心として土坑4基を検出した。このうちSK-01~03は調査区最東端に位置する2号墓の南西部にまとまって配置している。また、平成11年度実施の試掘調査の第1トレーンにおいて、C9坑近くで溝状の落ち込みが確認され、詳細把握のためC9調査Xとして6m四方に範囲を広げ精査を行った。

SK-01(第4・54・61図、図版36)

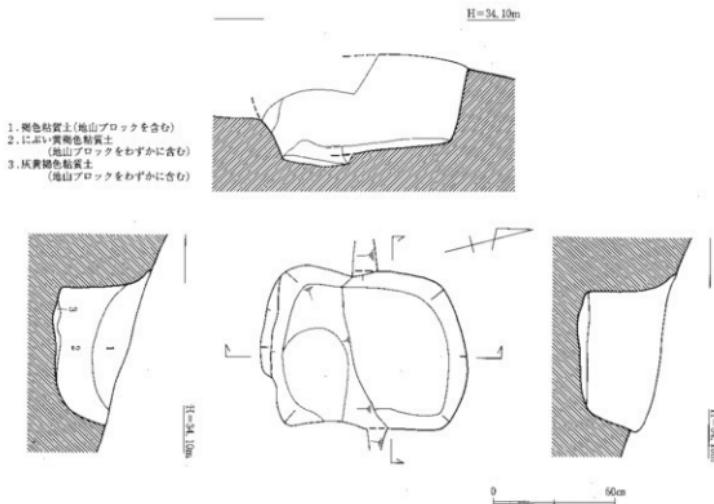
調査区東端、1号墓の北東隅の墳頂付近、標高33.96mの墳頂流土下から検出した。2m東にSK-02が位置する。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸は尾根稜線に直交方向のN-16°-Eをとる。規模は、長さ84cm、幅65cm、深さ41cmを測る。断面形は逆台形状であるが地山の傾斜に伴って南東方向に深さを減じる。1号墓築造時頃あるいはそれ以前の遺構の可能性も考えられる。

遺物は出土しなかった。(山田)

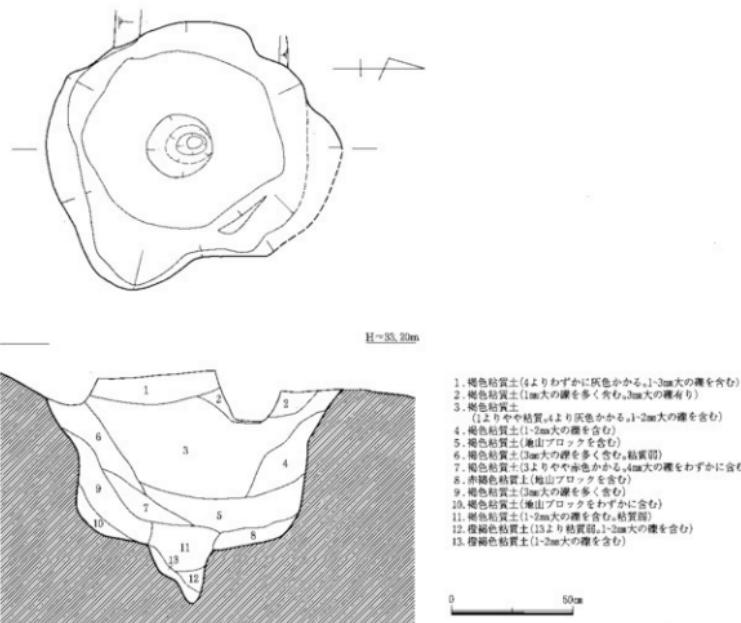
SK-02(第4・62図、図版36)

調査区東端の2号墓の西裾部、標高33.08mの地山面で検出した。2m西にSK-01が、2.5m南東にSK-03が位置する。平面形は不整円形を呈し、長径1.21m、短径1.01m、深さ73cmを測る。検出面から30cm程まではすり鉢状に下り、屈曲して直線的に下り底面まで碗状の断面となる。底面中央部に上端径27cm、深さ23cmを測る先尖りの円形ピットが検出された。

遺物は出土しなかった。



第61図 SK-01実測図 (S=1:20)



第62図 SK-02実測図 (S=1:20)

SK-03 (第4・63図、図版37)

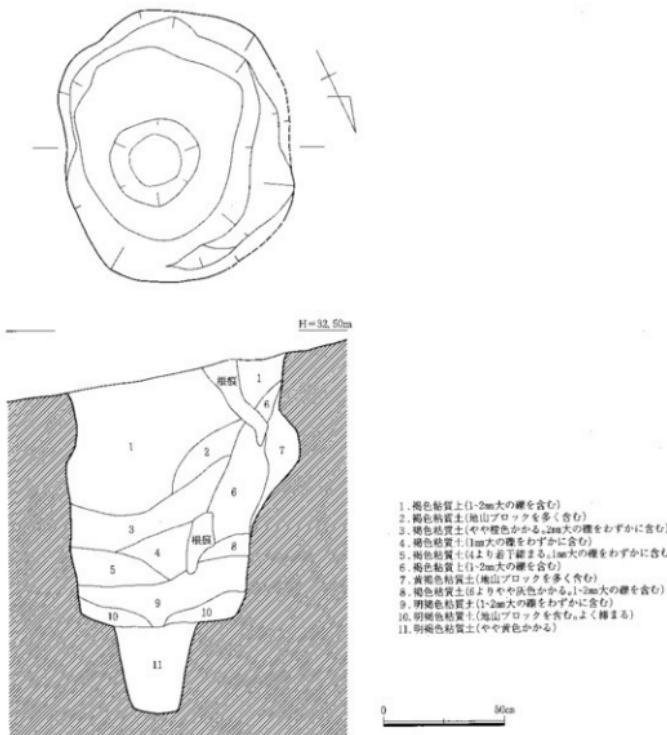
調査区東端の2号墓の南裾部、標高32.41mの地山面で検出した。2.5m北西にSK-02が位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径1.01m、短径0.94m、深さ1.12mを測る。主軸は尾根筋に直交するN-17°-Eをとる。断面は若干の凹凸はみられるものの検出面から底面に対し85°の急傾斜で掘り込んでいる。底面中央やや北寄りに径37cm、深さ36cmを測る円形のピットが検出された。

遺物は出土しなかった。

SK-04 (第31・64図、図版37)

調査区中央よりやや東側に位置する34号墳の北側、尾根筋より4m程北側に下る標高33.72mの地山面で検出した。平面は北側が張り出す不整な楕円形を呈し、主軸は南北に近いN-4°-Wをとる。規模は長径1.47m、短径1.04m、検出面から深さ1.10mを測る。断面は底部が北側に寄った不整なU字状を呈する。南側からなだらかな傾斜で途中2ヶ所の三日月形のテラスをもちながら底部へ続く、北側ではやや袋状の断面となり、内湾しながら急傾斜で下り底部へ続く。底面は東西に長い楕円形で、中央ピットはみられなかった。

遺物は出土しなかった。



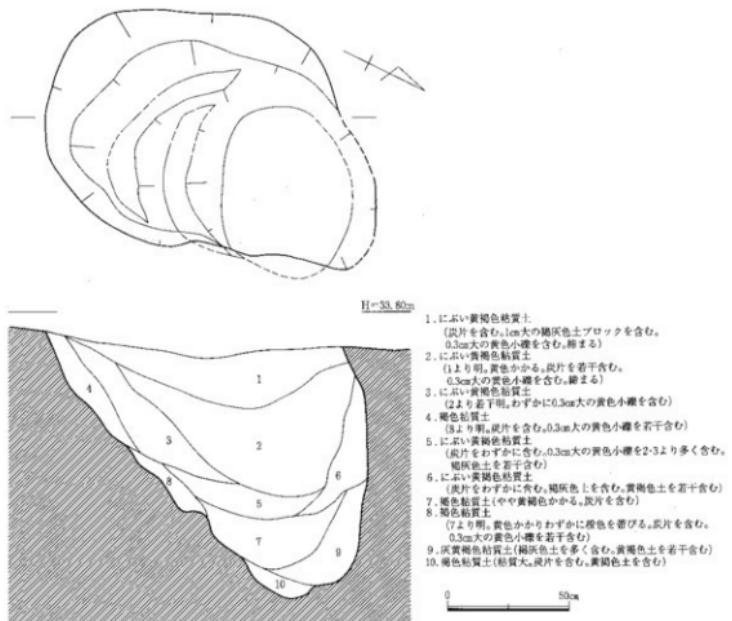
第63図 SK-03 実測図 (S = 1 : 20)

C9 調査区 (第3・65図、図版37)

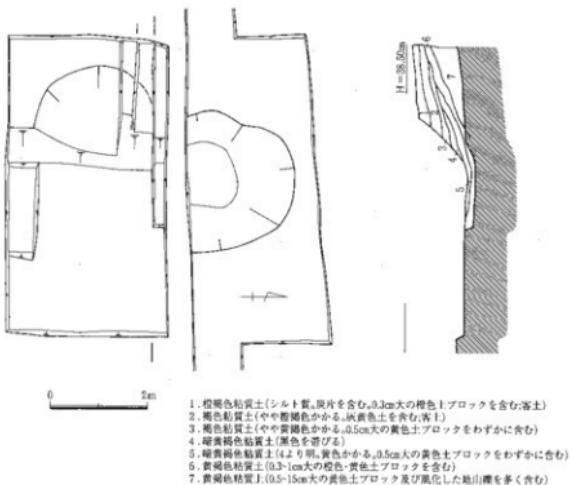
調査区中央やや西寄りの尾根筋、標高38m前後に設定した約6m四方の調査区である。平成11年度試掘の第1トレンチにおいて暗褐色土の溝状の落ち込みが認められ、古墳の周溝等の可能性を考慮して、周辺部の拡張調査が必要となっていた。位置的には17号墳から28m東で、24m東に34号墳が配置する。尾根高位から続く尾根筋やや南に造成された階段状の平坦面北東隅がC9調査区のはば中央にあたる。

調査の結果、土層断面第1・2層は平坦地造成時の客土で、第4層が試掘時の第3層に該当するものとみられる。第6層以下地山である。第4層は南側で径2.5~3mの窪み状となっており、東側は平坦地造成時の掘削を受ける。また、調査区北側でみられる径2.8m程度の窪みは上層の一部は南側から続く窪みの広がりとみられるが下位は中央に成育する木根の搅乱と考えられる。

遺物は出土しなかった。(谷口)



第64図 SK-04 実測図 (S = 1 : 20)



第65図 C9 調査区実測図 (S = 1 : 100)

出土遺物観察表

一記載事項について

挿図番号 遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器種 土器は形態的特徴から、壺・甕・高杯・低脚杯・器台・鉢・杯・皿等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は()で表示。石製品は形態、使用痕等の観察から、砥石・石錐等の名称を用いた。

法量 土器……口径：① 底径：② 最大胴径：③ 器高：④ Dをcmで示す。なお、()は復元値。()は推定値。ただし目安としての径の残存が7分の1以下を推定値とした。

石製品・鉄製品……長さ：L 幅：W 厚さ：T 径：Dをcmで示す。()は現存値。

形態・手法の特徴 主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

- ① 胎土 砂粒の大きさとその量を示す。
- ② 焼成 良好(堅微)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。陶磁器については硬質・軟質で表した。
- ③ 色調 主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(外)・(内)で表示。陶磁器の場合は素地・露胎を(素)・(露)で表示。

備考 赤彩、黒斑、釉、粉痕、煤、炭化物付着の有無等を記載。石製品等は重量を記載。()は現存値。

遺物登録番号 出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

一遺物実測図中における表示

須恵器：黒塗り 陶磁器：

遺物使用痕範囲：

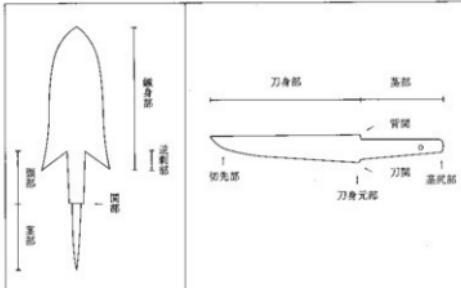
石製品実測図磨滅範囲：

土器実測図のヨコナデ調整による稜：

一土器の部分名称について

一部位名称を略す場合は頭文字を()で表示。

一鉄製品 部分名称



鉄製品細部の名称

服部16号墳（第11・12図）

件番 番号	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	① 土上 ② 烧成 ③ 色調	残存状況	備考	出土 登録 番号	
1	叉	① (24.0)	鋸合口縫。 口縫部は外反して開き端部 は丸い。 口縫部に多状の沈線。	(外) 1)腰部且鉗縫様による平行沈線後10上半ヨコ ナデ。 (内) 口縫部横方向のナデ。ハケ目焼。	① 1~2mmの砂粒を含む ② 黒 ③ 深褐色	(II) 1/6		39
2	瓶 瓶	③ 4.0	上げ底底の底面。	(外) 尖ハケ目、底面ナデ。 (内) ハケ削り。	① 1mm前後の砂粒を含む ② 黑 ③ 深褐色	(底) 1	一次焼成 受	3
3	(注)瓶	注J 2.9	底面部は体部から僅かに斜 く。	(外) 注底部への書き、体部との接合部に複数の円弧 刻文を施し3方向が残る。4方向の可能性。	① 1mm以下の砂粒を含む ② 黑 ③ 深褐色	(注) 1		3
4	高 杯 (杯 邪)	① (11.8)	口縫部は内凹して開く。	(内外) ナデ。	① 1mm以下の砂粒を僅かに含む ② 黑 ③ 深褐色	(口) 1/4	赤彩	32
5	石 錐	L 6.7 W 5.6 T 1.8	扁平な白自然石の両端部に加 工痕。	長軸削落部を打ち欠く。	③ 深褐色	完存	77.5g	4
6	瓶 右	L (16.2) W 10.8 T 4.8	自然石の一面前に使用範 囲。左端部は自然肌。	長軸1端部から側面1部は成形削面、多端部削面。 使用面は多角の研ぎ面。	③ 深褐色		(1200)g	42
9	須恵器 蓋	① 22.8	口縫部は外反して開き端面 をもつ。	(外) 体部平行刃と目皿後カキ目。 (内) 体部上半、下半で別種成て工具使用。上半は周 心円文当て工具痕。下半は同心円文当て工具で 青背渦文状に施した後底部に同心円文である。	① 1mm以下の砂粒を多く含む ② 黑 ③ 深褐色	(I) 1/2 (体) 片		12 28 68 69

服部17号墳（第13~14・18図）

1	高 手	② (19.8)	脚部は基部から大きく範広 がりに開き端面をもつ。	(外) 接合部ハケ目、底面落不明顯。 (内) 断面画落不明顯。脚部上半ナデ、下半ハケ目後 脚部横方向のナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ② 黑 ③ 深褐色	(手-足) 1/3 (脚) 1		3
2	器 台	① 18.0 ② 15.4 ③ 9.0	類似器台。	(外) ヨリナデ後部、台脚部削落面に1条の沈面。 後部から下部大きく外縫 し受部は口縫部で外反する。 両端部は凸面をもつ。	① 1mm以下の砂粒を含む ② やや不良 ③ 深褐色	(受) 1/2 (台) 1	打欠き有	4 5
3	低脚杯	② 3.7	脚部は小形。 脚部は基部から外反して開 き端部は丸い。	(内外) 全面削落不明顯。	① 1mm以下の砂粒を含む ② やや不良 ③ 深褐色	(脚) 1		1

服部18号墳（第23・24図）

2	器 台	① 18.0 ② 16.5 ③ 10.3	致形器台。	(外) ヨコナデ。 (内) 受部、接合部丁寧なナデ。台脚へラブリ後丁寧 なナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ② 黑 ③ 深褐色	(受) 1/2 (台) 1	打欠き有	4 5
4	器 台	① 17.8 ② 16.4 ③ 10.3	短形器台。	(外) ヨコナデ。 (内) 受部、接合部丁寧なナデ。台脚部丁寧なハラ削り。 脚部は口縫部で外反して端部をもち 端部は丸いをもつ。	① 0.5mm以下の砂粒を含む 1mm粒有 ② 黑 ③ 橙色 深褐色 (内) 深褐色 深褐色	(受) 3/4 (台) 1	打欠き有	2
5	器 台	① 18.1 ② 15.4 ③ 9.4	短形器台。	(外) ヨコナデ。 (内) 受部風化するがナデ。接合部、台脚丁寧なハラ 削り後ナデ。	① 1mm以下の砂粒を含む ② 黑 ③ 深褐色	(受) 3/4 (台) 1	打欠き有	9

服部19号墳（第25・29・30図）

1	器 台	① 17.6 ② 15.9 ③ 10.2	致形器台。	(外) 山形面1条の沈縫後山形面ヨコナデ。以下後 脚部から下部に外反し削 面部で外反する。受部で凹 面部、端部は凸面をもつ。	① 0.5mm前後の砂粒を多く含む 1mm粒有 ② 黑 ③ 深褐色	(受) 3/4 (台) 1	打欠き有	6
3	土器始 亞	① 25.2 ② (36.0) ③ (36.0)	移行口縫。	(外) 前脚部ヨコナデ。脚部に断面形状の凸部を陰 付後削頭部、凸部部、肩部までヨコナデ。 肩部にハケ目工具による平行沈縫を削頭させた 下部に切ハケ目工具で深窓剥突文とする。 腹部に凸部を有し、体部は 上位に最大径をもつ。	① 1mm脚部の砂粒を含む ② 黑 ③ 深褐色	3/4	黒化し復 元不可能	7 8
4	土器始 亞	① (22.0) ② 27.8	移行口縫。	(内外) 口縫部ハケ目後ヨコナデ。 (外) 脚部細かい延ハケ目ヨコナデ。以下削頭、横ハケ 目。 (内) 受部丁寧なナデ、僅かに砂の動きが残る。	① 0.5mm前後の砂粒を多く含む 1mm粒有 ② 黑 ③ 深褐色	(口) 1/3 (脚) 1/2	黒化し復 元不可能	7 8
5	叉	① (15.9)	複合口縫。	(内外) 脚部多く。	① 0.5mm以下の砂粒を含む 2mm 粒有 ② 黑 ③ (外) 乳灰色 (内) 淡褐色 黄褐色	1/6	黒斑有	15

服部34号墳（第34・35図）

捕獲番号	器種	法量(cm)	形態・手法の皆歴			①若士 ②成虫 ③色調	残存状況	備考	漁物登録番号
			①口 ②底 ③最大径 ④高	⑤	⑥				
1	須唇節 蓋杯 杯蓋	①(10.7)	天井部は丸い。 天井部から直下へ続く口縫 部は底部でつまみ内縫する 凹窓面をもつ。 天井部と口縫部を分ける縫 は鋭い。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部4/5時計回りの屈筋へア別り。 (内)天井部不定方向のナゲ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)淡灰色 淡色 (内) 淡灰色	(口)1/10 (天)1/5			14 21 23
3	ガラス質 海	L 1.85 W 1.80 T 0.85	ガラス状の海物。			④暗灰色	小片 (2.0g)		9
4	須唇節 蓋	①(9.8) ②(24.1)	口縫部は外縫し端部で外縫 に肥厚して端面をもつ。 (内)体部ヨコナデ。	(9) 体部上ヨコナデ、肩部に1状の沈縫。下半へ ナリ。 (内)体部ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒多くを含む ②不良 ③灰白色	(口)1部 (天)1部 (内)3部 (天)3部			2 3 6
5	須唇節 壁	①(12.9)	口縫部は内凹して開き端面 は凹面をもつ。 頭部と口縫部との境は板状 縫縫で凹なり明瞭な段差をもつ。	(内外)ヨコナデ。 (外) 口縫部に4条、縫縫部に9~10条単位の波状紋。	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③暗灰色	(口)1/12		磯紅色 然然	99 試測 D-6

服部36号墳（第36—38図）

1	石 瓦 筋跡串	D上式 2.30 D底式 2.70 D底式 4.02 D底 0.75	碧器。円錐台形状の中心軸 に穿孔がある。	全面を著くが上面、底面とも着き無の荒削り感が不 定方に残る。 上面には片面彫刻。 上面縦部と設置縦部に欠損感が多い。	③オリーブ灰色 41号光沢 23.6g	39 状態 Tr-7
2	須恵器 蓋 杯 杯 盖	① 13.4 ④ 5.5	扁平な器形。 半坦な天津部から内側へ向 け口縁部が下げる。底部は先 端より丸く削める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天津部削出しへラ切り後ナデ。のちに時計回りの へりを2回ほどさせる。中心部へラ引きし直。 (内) 天津部の内凹部を工具で回転するナデ削し。 1縫合部は1条の辺縫合後縫合部をヨコナデ。	①0.5mm以下の移砂を含む ②黄 ③灰褐色 はば光沢 はば光形	1
3	須恵器 蓋 杯 杯 身	① 12.5 (外) 15.2 ③ 4.0	扁平な器形。 立上がり内側に脚部はない。 受部は底部から上端へ向 て上方に削る。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転へラ切り後ナデ。のちに時計回りのへ りを2回ほどさせる。中心部へラ引きし直。 (内) 底部円柱工具を回転するナデ削し。	① 1mm前後の移砂を含む 8mm 大の砂縫有 ②黄 ③(外)灰色 暗緑色 (内)灰色 (口) 3/4 (体) 1	セッタ焼 2 3 4 19

S X - 0 1 (第44図)

1	(口崩船)	① (13.8) 口崩部は内面して上方へ納め番部は丸い。	〈外〉刺繡不明瞭。 〈内〉ナデ、ハケ目抜。	①1mm以下の糸紋を含む ②負 ③橙褐色	(II) 148		42
---	-------	------------------------------	--------------------------	----------------------------	----------	--	----

C-18区(第45図)

1 高 梅	① 18.7 脚部は横状。 ② 12.6 脚部は脛から腰や下に り下半身の字形状に縮 毛をもつ。	(内) 片脚基底不明瞭。 (外) 脚部基底不明瞭。 (脚) 脚部基底不明瞭。 (脚) 脚部基底不明瞭。	① 1cm以下の絆毛を含む ② ③ 絆被毛色	(外) 12 (脚) 1	33 34
-------	---	--	---------------------------	-----------------	----------

S X - 0 2 (第46図)

1	頬器 妻 杯 身	① 13.6 (受) 13.8	天井部から10mmまで内側 しながら下り端部は丸みを もつ。	(内外) ヨコナデ。外側中位は強イヨコナデ。 (外) 天井部カキ目、カキ目工具による跡の発見者。	① 1mm前後の砂粒を含む 粒有 ②やらず不良 ③(外) 乳化色 (内) 淡褐色	1/6	8
2	頬器 妻 杯 身	① 11.1 (受) 13.8 ③ 3.8	立上りは内傾し端部は凸面 をもつ。底部は平だ。 受部は脇から伸びて外上 方に延びる。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部脇部へ切り後丁寧なナデ。 (内) 中心部不定方向のナデ。	① 1mm前後の砂粒を含む 粒有 ②黄 ③紙色	1/2	9-19
3	頬器 妻 杯 身	① 11.8 (受) 14.0 ③ 3.6	2より扁平な形状。 立上りは凸面、端部は組る。 受部は脇から伸びて外上 方に延びる。	(内外) 軸J,巻き上げ後形ヨコナデ。 (外) 底部ナデ。中心部にヘラ剥こし痕を残す。 (内) 中心部不定方向のナデ。	①0.5mm前後の砂粒を含む 粒有 ②黄 ③灰色	(口) 1/2 (体) 3/4	11- 19
4	頬器 台付型	① 12.5 ② 13.5 ③ 10.7 ④ 13.8	両は口部脇が直角不整形。 3D 体部は上位で直角に突出 し浅い。台部は基部から外 反して突き出端部をもつ。	脇部 (内外) ヨコナデ。 (外) 底部ヘラ剥。	① 1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③有色灰 灰色	(口) 5/6 (体) 1 (台) 5/6	7- 9
				台部 (内外) ヨコナデ。 (外) 丁寧なヨコナデ。			

服部1号墓（第52・53図）

放課後（外見）					
1 奥 (肩 部)		(外) 肩部具眼鏡によると押引き波状文。 (内) 肩部にラブリ。	①2mm前後の砂粒を多く含む ②赤、波状褐色	小片	30
2 脊 台	①(17.2)	蝶形舞台。 受部は外反して閉く。 外面に多条の波状。	①露部多い。 受部平行直線後端ナデ。 結合部はハケ日後張へ引き。 (内) 受部へラブリ後へラブリ重複。	①1~2mmの砂粒を含む ②赤、(外)波状褐色　(内)淡 青褐色、波状褐色	12 13 30
3 (赤影片)		(内外) 氯化著しく 固膜不明瞭。 (内) 25%半が剥離する。	①1~2mmの砂粒を含む ②赤、波状褐色	小片 赤影	30 35

服部1号墓（第52・53図）

辨別番号	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	造物登録番号
4	器台 (受部)	①(17.5)	器部面白。 受部は外反して開く。 4は縦幅を外へへんまし、 9、6は内縦幅をもつ。 口縁部に多条の沈線。	(外) 黒化著しく剥落多く。 受部横幅平行沈線後へ ラ磨き。 (内) 受部ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③黄褐色	(口) 1/6 (受) 1/2	黒斑有 10 14
5	器台 (受部)	①(17.7)		(外) 受部貝殻模様による平行沈線を3段に施す。 口縁部横幅へラ磨き後軽いココナデ。 縦合部に縦縫跡へラ磨き後、縦下部削りヨコナデ。 (内) 受部上半削落不明瞭。ドマヘラ削り後ヘラ磨き	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③黄褐色	(受) 1/6	16 17
6	器台 (受部)	①(19.2)		(外) 受部貝殻模様平行沈線後3段以上?施した後1段目 平ヨコナデ。 縦合部ヘラ磨き後ヘラ磨き。 (内) 受部削落多く有。ヘラ削り直面。	①1~2mmの砂粒を多く含む 5mm大的砂粒有 ②良 ③赤褐色 淡褐色	(受) 1/4	12 25 27
7	器台 (台部)	②(14.2)	菱形器台。 台部は外反して開く。 縦縫部は丸く納める。	(外) 台部貝殻模様による平行沈線を横斜め施すした後 横縫部と中央部ヨコナデ。 (内) 台部ヘラ削り前後ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③黄褐色	(台) 1/7	17
8	器台 (台部)	①(14.8)		(外) 台部貝殻模様による平行沈線を2段に施す。 縦合部ヘラ磨き後部軽いヨコナデ。 (内) 台部横幅ヘラ削り後ナダ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	(台) 1/4	18, 21 25, 26 28
9	底部	②(11.4)	平底。	(内外) 刮落不明瞭。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②や不良 ③(外) 淡褐色 (内) 褐色	(底) 1/3	12
10	(底部)	② 11.4	平底。	(内外) 刮落不明瞭。 (外) 底面ナダ。	①1mm以下砂粒を多く含む ②良 ③褐色	(底) 1	9
11	縦合部 鋸	①(13.3) ②(16.4)	体縫上部に最大径をもつ 縫合部は内側し、縫合をもつ。 口縫部は外傾して縫合をもつ。	(内) ヨコナデ。 (外) ヨコナデ。 縫合部ヘラ削り、縫合ヘラ削り後ナダ。	①1mm以下砂粒を多く含む ②や不良 ③褐色	1/6	3
12	周器 皿	①(6.9)	口縫部は外傾して縫合をもつ。	(外) 体部ヘラ削り。 (内) 体部ナダ。	①微細 ②實質 ③(素・真) に ぶい赤褐色	1/6 備付書	32

服部3号墓（第57・58図）

1	蓋?	①(13.2)	縦合口縫。 口縫部は外反して開き縫合部 は丸い。 口縫部に多条の沈線。	(外) 口縫部横縫平行沈線を2~3段に施した後口縫 部、縫合ヨコナデ。縫合部立した3~4条の沈 線、その下位に貝殻模様による刺突文。 (内) 口縫部ヘラ磨き、体縫ヘラ削り後ナダ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	(口) 1/3 2と同一 固体の可 能性	1 4
2	(体部)			(外) 肩部貝殻模様による刺突文を8条以上?を交差 して施し、横縫する。 (内) ヘラ削り後丁寧なナダ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	(肩) 1部 5と同一 固体の可 能性	6
3	蓋?	①(14.3)	縦合口縫。 口縫部は外反して開き縫合部 は丸い。 口縫部に多条の沈線。	氯化著しい。 (外) 口縫部横縫平行沈線後ヨコナデ。 肩部2段以上の沈線。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②や不良 ③淡褐色	(口) 1/7	5
4	蓋	① 20.2	縦合口縫。 口縫部は外反して開き縫合部 は丸い。 口縫部に多条の沈線。	(外) 口縫部貝殻模様による平行沈線を3段に施した 後中縫を軽くヨコナデ。体縫小明瞭。 (内) 口縫部ヘラ磨き、縫合部ヘラ削り後丁寧なナダ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 3.5mm有 ②良 ③(外) 褐色 (内) 淡褐色	(口) 5/6 (肩) 1	4 6
5	(底部)	② 2.3	上げ底状の小さな底部から 膨らむもともと体縫へと異く。 体縫器身均等。	(外) 体縫部細かいヘラ磨き。底部ナダ。 (内) ヘラ削り後丁寧なナダ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	(底) 1 黒斑有	2 4 9
6	高杯	① 20.8 ② 13.5	杯縫部は内溝して開き口縫 部は内側し縫合部を持つ。 縫合部は底部から外反し縫合部 でハの字形に開き、上縫部 をつまむ。	杯縫部(内外) 縫ヘラ磨き、外縫にハケ目有。 脚部(外) 底ヘラ磨き後縫合部ヘラ削り。 (内) 縫ヘラ磨き後縫合部ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③(杯) 褐色(脚) 暗褐色	(杯) 2/3 (脚) 1	3 5
7	器台 (受部)	①(23.6)	菱形器台。 受部はやや外反して開き縫合 部をもつ。外縫に多条の沈 線。	(外) 受部貝殻模様平行沈線を複数段施すした後縫合部ヨコナ デ。以降剥落不明瞭。 (内) 受部ヘラ磨き、縫合部の動き有。	①1mm前後の砂粒を含む 4mm 大の砂粒有 ②良 ③(杯) 褐色 暗褐色	(口) 1/4 (受) 1/2	黒斑有 2 3
8	器台 (受部)	① 18.5		(外) 受部貝殻模様平行沈線を3段以上施す。縫合部横縫 ケ部後ヨコナデ。くびれ部ナダ。 (内) 体縫部ナダ、D位に縫合部の動き有。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③褐色	(受) 3/4 (脚) 1	黒斑有 4
9	蓋	つまみ6.1 ①(12.9)	つまみは四角をもつ。 体縫は直線的にハの字形に 開き縫合部は丸い。	つまみ頭ナダ。 (外) つまみヘラ磨き。体縫部ヘケ目。 (内) 体縫横縫のハの字形。	①1mm前後の砂粒を含む ②や不良 ③褐色	(口) 1/4 (脚) 2/5	3
14	器台 (受部)	①(19.7)	菱形器台。 受部は直線的に開き縫合 部をもつ。	氯化著しく全表面剥落不明瞭。 (外) 受部に平行沈線。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③黄褐色	(受) 1/4	11 45
15	器台 (台部)	③ 17.1	菱形器台。 台部はやや外反して開き縫合 部は丸く納める。	氯化著しく剥落甚多く。 (外) 台部ヨコナデ。 (内) 台部上半ヘラ削りヘラ磨き。接合部不明瞭。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(台) 3/4	18

服部墳墓群 銅製品

(単位) : cm

出 土 地	辨認番号	器 様	L (社さ) W (幅) T (厚さ) D (径)	其の他測定値	形 態 の 特 徴				残存状況	備 考	遺物登録番号
					平面形等						
服部18号墳 第1主体部	第22回1	銅 線 模文鏡	D: 7.89 T: 最大0.85 T: 最小0.11 D: (径)	T字跡 0.25 円形 T字跡 0.20 T孔部 0.30 T模文 0.25 T鉢形 0.85	略化著しく全面漆緑色を呈する。 鏡面は外縁方向へやや反り屈み呈する。 鏡背は外縁が半鐘形で中心方向へて鏡文文帯、細曲文帯、圓鍵、 鏡人面、團鑄、鍾乳、鏡が配される。 鏡面文款28、鏡文不明、原文題には乳孔4があり対角線上に 配したことでの区分を4部分としている。区隔には模文2を組とする 4組が配される。鏡孔は絞乳が貫通し乳径約0.3cmを測る。	ほぼ完存	(37.3)g	7			
板鏡36号墳	第38回9	銅鏡 寛永通鑄	D: 2.48 T: 0.10	D方形孔 0.60 円形	道存良好。裏面文字無。	完存	29g 1636年	18			

服部墳墓群 鉄製品 (1)

出 土 地	辨認番号	器 様	全 長	法 量					形 態 の 特 徴	残存状況	備 考	遺物登録番号		
				刀 部		茎 部		断 面						
服部16号墳	第11回7	刀 子	(6.25)	(5.25)	二等辺 三角形	(1.00)	長方形状	刀身先端 刀身中央部 茎基部	1.99 1.57 0.36	0.40 0.36 0.26	刀身先端は背側 刃身先端部 厚を減らす。 両側から基部へと幅を減らす。	刀身體部	(10.9)g 木質柄 有目痕	36
								刀身中央部 切先部	3.00 2.84	0.54 0.55	鈍化する。刀身先端は刃開 刃身先端部 厚を減らす。 切先部へ向いて幅を減らす。	刀身體部3片	(282.0)g 2, 34 5, 36 51	
服部18号墳 第1主体部	第23回3	刀 子	(8.90) U形孔邊 0.25	(6.70)	二等辺 三角形	2.20	長方形状	刀身先端 刀身中央部 茎中央部	1.21 0.95 0.91	0.25 0.22 0.25	鈍化する。刃身先端は刃開 刃身先端部 厚を減らす。 基部に目釦1。	切先部欠	(6.8)g 木質付有	6
								刀身先端 刀身中央部 茎中央部	3.20 2.70 2.90	0.42 0.40 0.42	鈍化する。 刃身先端の2/3が刃部。他端部 多中空理 茎中央部 0.50	刀身體部	108.0g	13
服部19号墳 第1主体部	第25回2	刀 子	(12.50)	(9.55)	二等辺 三角形	2.95	長方形状	刀身先端 刀身中央部	1.60 1.35	0.30 0.25	鈍化する。刃身先端は刃開 刃身先端部 厚を減らす。	切先部欠	(14.7)g 木質柄	5
								刀身先端 刀身中央部	1.70 1.10 1.00	0.42 0.38 0.25	鈍化する。刃身先端は刃開 刃身先端部 厚を減らす。 基部は目釦1。	刀身體部	(15.5)g 木質柄	7
服部36号墳 第2主体部	第37回6	刀 丁	(11.90)	(7.75)	二等辺 三角形	4.15	長方形状	刀身先端 刀身中央部 茎中央部	1.70 1.10 1.00	0.42 0.38 0.42	残存良好。刃身先端は刃開 刃身先端部 厚を減らす。	切先部欠	(15.5)g 木質柄	8
								刀身先端 刀身中央部 茎中央部	2.00 1.40 0.90	0.42 0.30 0.30	鈍化する。刃身先端は刃開 刃身先端部 厚を減らす。	刀身體部	(3.4)g	12
								下位	0.20	0.20	平面部は倒卵形の焼缺。 横断面は半円状。	3/4残存	(1.0)g	14

服部墳墓群 鉄製品 (2)

出 土 地	辨認番号	器 様	全 長	頭 部				重 部				形 態 の 特 徴	残存状況	備 考	遺物登録番号		
				平 面	輪郭線	透 制	闊 部	平 面	輪郭線	透 制	闊 部						
服部34号墳 第1主体部	第34回2	不 明 鐵製品	(2.30)									方 形	上端部 W: 0.35 T: 0.35	鈍化著しい。	尖端部	(0.80)g	18
服部36号墳 第2主体部	第37回4	铁 鏊	(11.80) ① (5.70) ② (3.40) ③ (3.60)	鑿 壓形 平 直	元部 W: 1.90 T: (0.25)	動快 W: 0.80	台 形 方 形	中央部 W: 0.65 T: 0.35	中央部 W: 0.40 T: 0.30	方 形	元部 W: 0.52 T: 0.34	鍼身先端部からふくらをも ち瓶に張り付けて横断面へと 縮んでいく。	基端部欠	(13.3)g	11		
															13		
服部3号墓 第1主体部	第57回10	铁 鏊	① (1.95) ② 2.75	三 角 形 片 丸 直	中央部 W: 1.55 T: 0.18 孔延 0.30	透制 0.40	長方 形	元部 W: 0.40 T: 0.20	元部 W: 0.52 T: 0.34	鍼身先端部からふくらをも ち瓶に張り付けて横断面へと 縮んでいく。	尖端部	(1.00)g	鈍化著しい。	尖端部	(1.00)g	12	
													14				
第57回11	铁 鏊	① (1.63)	平 直	中央部 W: 0.90 T: 0.13			長方 形	元部 W: 0.40 T: 0.20	元部 W: 0.40 T: 0.20	鍼身先端部からふくらをも ち瓶に張り付けて横断面へと 縮んでいく。	尖端部	(0.65)g	鈍化著しくはされる。	尖端部	(0.65)g	15	
													13				
第57回13	铁 鏊	① (1.15)	片 丸 直	先端部 W: 1.00 T: 0.25			長方 形	元部 W: 0.40 T: 0.20	元部 W: 0.40 T: 0.20	鍼身先端部は瓶を観察。	尖端部	(0.35)g	鈍化著しい。	尖端部	(0.35)g	13	

第5節まとめ

今回の調査は、服部墳墓群 総数45基のうち、古墳6基(16~19、34、36号墳)、弥生時代の墳墓3基(1~3号墓)の計9基について行った。調査地は、鳥取平野の南西縁辺部、千代川から1km離れた独立丘陵上に位置する。調査地以北の地域、特に1km北東の菖蒲集落の西側一帯では、1990年代に入って次々に行われた発掘調査から、縄文時代後晩期、弥生時代中後期、古墳時代、奈良~中世期と数々の成果が上がっている。一方調査地から南の地域では、平野部の圃場整備ⁱⁱⁱや丘陵部の果樹園等の造成に伴う遺物の出土が知られる程度であるが、丘陵上には下味野23号墳(全長73.5m)をはじめとする前方後円墳が連なり、低丘陵上にも小規模な古墳を中心として数多くの分布がみられる地域である。今回の調査では、古墳時代前期・後期、弥生時代後期の墳墓、落とし穴とみられる土坑等を検出し、弥生の墳墓については、近年徐々にその調査例が増えてきてはいるが不透明な部分が多く、貴重な成果となった。

1. 古墳について

調査を行った9基の墳墓は、千代川を東に望みながら北東へ延びる丘陵のうち、平野先端部に程近い標高30~80mを測る独立丘陵の中央部西寄りに位置する。丘陵の北には有富川を介し丘陵部の最北となる釣山(標高105m・独立丘陵)がそびえ、南側には小さな谷を挟み中国山地へ脈々と続く丘陵が隣接する。丘陵の頂部には墳墓群中唯一の前方後円墳である23号墳(全長32.5m)が占拠し、そこから標高36m弱の丘陵東頂部へ600m余り続く尾根上に墳墓が分布する。鞍部や高まりを繰り返す地形を上手く利用し、東面あるいは北面する高まり部分に要となる径15m規模の古墳、その周辺に7~10m規模の若干小さな古墳を配し、それは北へ張り出す小尾根上にも及ぶ。東郷谷を正面に見下ろしながらかつ鳥取平野南部を視野に入れた丘陵頂部の前方後円墳を除き、続く東尾根上に造られた古墳は、このような6ないし7の小単位に分かれ、その中でも核となる古墳についてはそれぞれ東ないし北方向を強く意識して造られているといえる。尾根中央の鞍部西側にあたる今回の調査地においても、17~19号墳と16、34、36号墳とは内容や時期が異なる別群である。

服部17~19号墳

17~19号墳は、丘陵頂部から下る尾根筋が一旦狭まって膨らむ地点に19号墳が立地し、南に張り出す小尾根の広がりを意識してやや南寄りに18号墳が、尾根の軸がやや北側に張り出した位置に17号墳が立地する。3基について立地的に優劣はあまり窺えない。尾根下位から見れば、東端に位置する17号墳の辺りから傾斜がやや急となり、また尾根筋方向ではそれほど立地の制約があるとは思えないが、17~19号墳はほぼ接するようにして造られている。17号墳は方形墳(長辺14.0×高さ2.7m)、18号墳(径16.5×高さ1.8m)と19号墳(径16.9×高さ2.9m)は円墳であり、規模の点では19号墳が多少大きいがあまり大きな差はないいずれも径15m規模の系列で累々と造営されたものとみられる。

周溝の埋土状況から、19号墳が18号墳より後出であった可能性が大きく、とすれば弥生時代の系譜を引く方形墳の17号墳、円墳の18号墳、19号墳と尾根上方への築造順が考えられる。17号墳と18号墳とは18号墳と19号墳間よりも多少離れた位置にあり、そこには距離だけでなく方形墳から円墳の採用という一つの大きな画期をみることができる。ただ17~19号墳ともに共通するのは、尾根高位側の墳丘には封土を除くと明らかな盛土が認められず、尾根低位側の旧地表上への盛土と地山の整形を行って東あるいは南側の墳丘基底部を明確にしている。一方、尾根北側は急斜面となっており、尾根筋の北側いっぽいに寄せて築造しなおかつ墳裾をあまり明確にしないことで、墳丘と北側の傾斜とを一体化させ、北側から見て視覚的に墳丘を誇張した効果が得られているものと推察される。しかし、17号墳は、方形墳の造営方法自体に起因する基本的な差があるものと考えられるが、あくまで地山成形を主体にして墳丘を作り出し旧地表面上に盛土を行って墳形を整えており、18、19号墳は盛土と地山の整形によって造られた墳丘である。

埋葬施設はそれぞれの墳頂部で主体部2基が検出され、19号墳の土器棺(第2主体部)を除き、木棺直

葬である。これらの主軸は他の古墳を意識したものではなく、あくまで尾根筋に並行にとっており、土器枕から頭位も統一性がみられない。いずれも二段掘り墓壙となっており、このうち中心主体と考えられる17号墳第1主体部、18号墳第2主体部、19号墳第1主体部は墓壙の長軸いっぱいに二段目を掘り込んでおり墓壙形態が類似する。しかし、棺規模からみると、17号墳第1主体部(長さ3.6m)に対し18号墳第2主体部(長さ4.5m)は長大で、19号墳第1主体部(長さ2.4m)では急激に縮小化する。また、18号墳第2主体部は板石を用いた両小口で側板を挟み込む箱形の形態をとり、19号墳第1主体部は西側小口の裏込めに石を利用している。木棺の小口に板石を採用した例は広岡79号墳(円墳・径12m)³等であり、箱式石棺導入の萌芽ととらえることもできよう。ただ箱式石棺の導入は円墳の採用と同時にではなく、石棺導入当初も副次的な性格をもち、中心主体に箱式石棺を用いるようになるのは更に時期が下るものとみられる。また、19号墳では第2主体部に土器棺を用いており、これから後は土器棺が多くみられる時期でもあり、17号墳、18号墳、19号墳の流れを示す指標のひとつとなり得る。

供獻土器の可能性があるものとして17号墳第1主体部墓壙最上層から高杯が出土している他、17号墳北西隅墳裾埋土から低脚杯、19号墳東側周溝埋土で壺口縁部が出土している。17号墳第1主体部、19号墳土器棺を除く主体部から計5点の鼓形器台が出土しているが、いずれも受部を打ち欠きした転用枕である。また、18号墳第2主体で鉄鎌(?)、第1主体で刀子、19号墳第1主体で刀子が、いずれも頭位外側で出土しており、17号墳、19号墳土器棺を除く各主体部で鉄製品1点を副葬していたことになる。鼓形器台は、受部に対する脚台部の縮小化、器厚化が始まっており、受部、脚台部とともにその形態や法量の差から19号墳(第25図-1)がより器壁厚く受部に対し脚台部が低く縮小しており時期的に新しい要素をもつ。また、注目すべき遺物として、18号墳第1主体部埋土上層から捩文鏡が出土している。埋葬後の最終段階で置かれたものとみられるが、これまで銅鏡が棺外で出土した例は所轄では古墳前期の広岡81号墳⁴で二段掘り墓壙隅のテラス屈曲部から内行花文鏡が出土している。捩文鏡は、周辺では島根県鹿島町奥才古墳群⁵の壺棺で出土した例があり、径7.8cmと同じ大きさである。背面は中心から捩文帯、撚文帯、鋸齒文帯と乳4ヶ等、文様構成はほぼ同じであるが、捩文や弧状の複線の数、服部18号墳の鋸齒文が28に対し奥才古墳のものが48を数えるなど全体的に本墳のものが大柄の文様で、粗雑な印象である。

このように、17号墳と18、19号墳の間には、墳形の違いという大きな差があるが、内部主体の形態、鼓形器台の転用枕の使用、主だった供獻土器が見られないこと等、副葬品の有無を除き内容的にはそれほど大きな差は認められない。17~19号墳の築造時期は方形墳の17号墳、18号墳を切る19号墳の関係、出土遺物等から、17号墳、18号墳、19号墳の築造順と考えられ、鼓形器台や楕形高杯(第13図-1)などの年代観から、概ね古墳時代前期中葉の時期⁶が与えられる。

服部16、34、36号墳

16、34、36号墳は、立地からひとつのまとまりとしてとらえているがそれぞれやや離れて位置し、内容的にもかなりばらつきが認められる。16号墳は明確な旧地表は確認できず、比較的の地山は掘削され整形された痕が認められ、南西半を大きく掘削されることから場合に寄っては円墳以外の墳形も可能性を残す。鞍部の西側頂部という立地の良さからすると現況で径11.2mと必ずしもそう大きくはない規模である。盛土は厚さ45cmが観察され、第2主体部の遺存状況から上部はそれほどの削平は受けていないものと考えられる。また、円墳である34号墳(径7.8m)は16号墳に副するにしてはやや離れた位置に立地しており、地山整形はあまり行われず、主として周溝を掘削して旧地表面へ盛土することによって築造されている。36号墳は尾根高位を切削して低位側へ多量に盛土することによって墳丘を造っている。尾根上方には3号墓の平坦面がみられるが、墳墓としての認識があったのかそれを利用することなく3号墓の下方に造営している。また、当初径7m弱の小規模な古墳であったが、北据部に第2主体部を設けたことからさらに盛土して10.4mの規模に拡張している。これは、36号墳に副次的な埋葬施設を構築したこと

場合、墳丘上にはそれほどのゆとりがなく36号墳自体比較的急斜面で尾根下位に立地することから、さらに外周に溝を掘削し墳丘を追加したものとみられる。

16号墳は南側が掘削を受けているため全容は不明瞭ながら切り合う埋葬施設4基が検出されている。いずれも長さに対し比較的幅が広い墓壙は似通った規模であるが、第1～3主体部は小口穴が認められ、第4主体部は他より浅い墓壙である。棺の形態は側板で小口を挟むH形とみられ、規模や形態的には1号墓や3号墓と共通する部分が見受けられる。34号墳は、主体部墓壙平面が隅丸正方形で深さ2.08mと埋葬施設の形態としては異質であり、墓壙底面に小穴を有する。また、ほぼ墓壙底面から須恵器杯身が出土しており、同一個体とみられる破片が上層で出土している。これらのことから一つの可能性として、もともと落し穴状遺構があり、そこへ主体部墓壙掘り下げ時に重複し、平面円形であったものが方形に掘り直され、その後丁寧に土を互層に敷きその上に遺体を安置したものと考えられる。土層断面からも第13層以下はよくはぐれた互層となっており、その上層のよく締まった粘質土である第10層の上面があるいは埋葬施設としての床面と考えることができる。36号墳の2基の埋葬施設は、いずれも石を用いている。第1主体部は木棺直葬あるいは箱式石棺が想定されており、石棺とすれば内法が長さ2.8m、幅1.1m、深さ40cmを測る大型である。市域におけるこれまでの調査で、六部山82号墳(長さ2.05m、幅76cm、深さ75cm)³⁰、海蔵寺4号墳(長さ2.00m、幅72cm、深さ70cm)、海蔵寺3号墳(長さ1.89m、幅64cm、深さ85cm)³¹等が大型の石棺として報告されているが、これらは側板に片側1枚あるいは2枚の大型の板石を用いており、36号墳の石材は小規模な自然石で異質である。S X-01の箱式石棺についても、深さが1cmしかなくあるいは側板上に石を横積みするような形態であった可能性も考えられる。36号墳の第2主体部も目張り粘土などは観察されず蓋石の構造も粗い構造であり、今回検出された箱式石棺はいずれもあまり石材を薄く加工することなく、自然石を多用したやや大ざっぱな造りであるといえる。また、S X-01、S X-02については、やや離れ過ぎた感があるが位置的にはともに16号墳を強く意識した埋葬施設と考えられる。

出土遺物は、16号墳墳丘表土や墳裾、周溝等から直刀や刀子、須恵器甕、土師器高杯、石錘、砥石、弥生土器等が出土しており、34号墳では須恵器杯蓋、鉄鎌あるいは釘とともにみられる不明鉄製品、ガラス質滓が出土している。36号墳では第1主体部で石製紡錘車1点に対し、第2主体部では棺内に刀子や金具、鉄鎌を副葬し、蓋石する前に棺外に蓋杯を置いている。築造時期については、出土した須恵器の年代観から陶邑TK47～TK43³²の範囲に入るとみられ、古墳時代中期末から後期前葉にかけて主稟線上の1号墳や34号墳が、そしてやや間をおき小尾根上の36号墳が後期後半に造営されたと考えられる。

2. 弥生墳墓について

今回の調査で、弥生時代の墳墓3基(服部1～3号墓)を検出した。丘陵全体では最大の鞍部である尾根中央部より西側の高まり、標高34m余りに立地する1号墓を中心として展開する。1号墓の東側に2号墓、西側は16号墳を隔ててその尾根下位に3号墓の位置関係となる。ただ16号墳に関しては、主体部の形態、出土遺物等から弥生の墳墓としての可能性があり、とすれば、3号墓の立地も納得できる位置である。

墳丘は地山成形を主として方形、長方形に造り出し、わずかに盛土して墳形を整えている。3号墓については、尾根高位側を掘削して平坦面を造り出しており、尾根高位側は小規模ではあるが溝で区画されている。急斜面の立地ということもあるが、墳裾部が明瞭でなく、わずかな盛土は認められるものの墳形を整えることより平坦面を確保することに主眼を置いたようにも見受けられ、台状墓的であるといえる。

埋葬施設は2号墓を除き、いずれも墳丘上に複数埋葬される。ただ、中心主体となる埋葬施設とそれ以外のものとでは、規模の面ではあまり差異は認められない。墓壙の長さに対し幅広でいずれも木棺直葬あるいは土壙墓とみられる。墓壙底面には小口穴を掘り込むものが多く、木棺痕跡等からH形の箱式

石棺が想定される。また、2、3号墓第1主体部はいわゆる二段掘り墓壙である。1号墓は上部削平のため全容は不明ながら、北側で鼓形器台、壺壺類の底部が出土しており、あるいは供獻土器であった可能性を残す。3号墓は、第1主体部墓壙上部で埋葬後の葬送儀礼に伴うとみられる土器が人頭大の角碟とともに出土している⁴⁾。壺、壺、鼓形器台、高杯、蓋とほぼすべての器種がみられ、棺内には鉄鎌のみの副葬である。1号墓、3号墓の新旧は、出土した鼓形器台の特徴から若干1号墓のものが3号墓のものに比べて開き具合が少なく厚さのあるしっかりした箇部を有することから、1号墓の方がやや古式的印象である。立地条件等も加味し、まず1号墓が、続いておそらく主稟線上のものが、次いで小尾根に立地する3号墓と順と思われる。時期的には弥生時代後期後半期⁵⁾に相次いで造営されたと考えられる。

おわりに

今回の調査で、弥生時代後期から古墳時代前期、後期の墳墓について数々の成果を得ることができた。ただ削平を大きく受けた箇所もあり、必ずしも全容の解明には至らなかった点も多々みられる。特に16号墳の問題については、立地や出土遺物、主体部の形状等から弥生の色が濃いものの、鉄刀や須恵器甕の出土、ひいてはS X-01、S X-02の帰属の問題もあり、古墳として扱った。ただ、可能性として、16号墳の南側を中心として弥生の墳墓と一緒に複数の位置に古墳が築造され、後に削平されたと考えれば、立地や出土遺物等の件も納得できよう。こうした考えは調査に携わった者のほぼ統一した見解でもあるが、土層断面等それをはっきり肯定できるだけの資料に乏しいのが現状である。

前期の古墳については、これまで市域において、方形墳の調査、17~19号墳と同様あるいは前後する時期や規模の古墳の調査例は徐々に増えてきてはいるが、必ずしもその具体的な検討、分析が進んでいるとは言い難い。例えば広岡古墳群、面影山古墳群、美和古墳群、倉見古墳等と比較検討することで、更に興味深い事柄が判明するものと思われる。

弥生時代の墳墓については、因幡地域ではとかく滝山池南東岸部や千代川中流東岸地域が注目されてきた。今回の本墳墓群や昨年度調査の滝山猿懸平墳墓群などそれ以外の地域の調査例が加わり、新たな展開が期待される。本調査からも、従来古墳として認識してきたものの中には弥生の墳墓も含まれ、立地的に平野周縁の眺望の良好な尾根頂部、古墳の分布と重複あるいは混在して群を成す箇所もあることが判明した。今回、供獻土器や鉄鎌の副葬、主体部の形態等、弥生の墓制や慣習を考える上で更なる資料の提示となった。またこれは時期を若干離てるものの前期古墳の在り方と比較検討し、弥生の墓制が変容していく過程を明らかにする意味でも今回の調査は貴重な事例である。また、これらの墳墓を造った人々の集落の存在も気になるところではあるが、これまで不透明であった古代千代川西岸地域を具体的に探っていく上でのひとつの手懸かりとなろう。今後この地域の調査に期待したい。(谷口)

註 (1)服部遺跡では、弥生時代中期、後期の土器とともに田下駄、大足が出土している。

亀井照人「想もっていた木製品」「郷土と科学」第15巻第1号 亀井県立博物館 1969年

久保廣二郎「弥生時代の集落立地について」「鳥取県立博物館研究報告」第27号 1990年

(2)鳥取市遺跡調査団「広岡古墳群発掘調査現地説明会資料」1989年

(3)(2)と同

(4)鹿島町教育委員会「奥才古墳群」 1985年

(5)埴輪では因幡Ⅰ・Ⅱ期と考えられ、松井編年ではⅢ・Ⅳ期に該当すると見られる。

谷口恭子「因幡における弥生時代後期から庄内式鉢形期の土器について」「庄内式土器研究Ⅹ」 2000年

松井 誠「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期中葉～古墳時代初期の非在地系土器の動態—」「古代吉備」第19集 1997年

(6)財)鳥取市教育福祉振興会「六部山古墳群Ⅱ」 1995年

(7)鳥取市遺跡調査団が1985年に調査

(8)田辯昭三「須恵器大成」「角川書店」 1981年

(9)服部3号墓より時期が遡るが、滝山猿懸平1号墓で墓壙上から人頭大の石とともに供獻土器が出土している。

(10)鳥取市教育福祉振興会「滝山猿懸平墳墓」 2000年

(11)因幡Ⅳではない。L-V期と考えられ、松井編年ではⅣ期あるいはⅤ・Ⅵ期に該当するとみられる。

服部墳墓群調査一覧表

名 称	墳 丘	規 模 施 設 等					出 土 考 古 物		備 考	時 期	
		形 状・規 模 (m)	主 体 部	施 設 方法等	幅 広	基 塙 等	方 位	墳 墓 施 設	墳 丘・同 墓 そ の 他		
					長さ×幅×高さ(m)	子母形等	長さ×幅×深さ(m)				
服 部 16号墳	円	直 径 11.2 高さ 2.5	第 1 主 体 部	木棺直葬	1.5×0.4×(0.6)	隅丸 長方形	(2.4)×1.35×0.91	N-45°-E		弥生土器 釜台・注口部 土器脚 漆刷口珠部 環状器 磁 陶器器 小片 石錐・砾石 直刀・刀子	(古墳時代中・後期)
			第 2 主 体 部	木棺直葬	1.5×0.5×(0.5)	隅丸 長方形	2.71×1.46×1.11	N-40°-E	弥生土器 磁		
			第 3 主 体 部	木棺直葬	1.6×—×(0.5)	隅丸 長方形	(2.2)×1.15×1.05	N-56°-W	土器器 体堅片		
			第 4 主 体 部	(木棺直葬)	—	隅丸 長方形	(2.8)×— ×(0.45)	N-45°-E			
			—	—	—	—	—	—	—		
服 部 17号墳	方 形	直 径 14.0 高さ 2.7	第 1 主 体 部	木棺直葬	3.5×(0.4)×(0.5)	隅丸 長方形	4.91×2.30×0.97	N-76°-E	土器器 高杯	上器器片は奥壁上器の 部。蓋上層から出土	古墳時代前期
			第 2 主 体 部	木棺直葬	3.4×0.5×(0.4)	隅丸 長方形	4.37×1.60×0.88	N-70°-E	上器器 器台	第 2 主 体 部 上器枕	
			—	—	—	—	—	—	—		
服 部 18号墳	円	直 径 18.0 高さ 16.5	第 1 主 体 部	木棺直葬	2.5×0.4×0.5	隅丸 長方形	(4.06)×2.18×1.03	N-80°-W	土器器 器台 銅鏡 勾玉、刀子	第 1 主 体 部 土器枕	古墳時代前期
			第 2 主 体 部	木棺直葬	4.5×0.5×(0.5)	隅丸 長方形	6.05×2.78×1.04	N-83°-E	土器器 器台 銅鏡?	第 2 主 体 部 七器枕	
			—	—	—	—	—	—	—		
服 部 19号墳	円	直 径 16.9 高さ 2.9	第 1 主 体 部	木棺直葬	2.4×(0.5)×(0.5)	隅丸 長方形	4.48×1.95×0.56	N-68°-E	土器器 器台 刀子	第 1 主 体 部 土器枕	古墳時代前期
			第 2 主 体 部	土葬棺	(0.58)×0.33×0.33	椭円形	0.92×0.66×(0.30)	N-80°-W	土器器 直	—	
			—	—	—	—	—	—	—		
重 部 34号墳	円	直 径 8.6 高さ (0.9)	第 1 主 体 部	(土壇墓)	—	隅丸 正方形	3.15×2.40×2.08	N-84°-E	復原器 奈何 不明鏡 銅鏡 ガラス質漆	復原器 奈何 漆作・直・埴	中央穴有り。落し穴と 裏窓の可能性。 炭化層有
服 部 35号墳	円	直 径 16.4 高さ 2.5	第 1 主 体 部	(木棺)	—	隅丸 長方形	(3.94)×(2.41) ×(0.93)	N-59°-W	石製鉗鉗車	復原器 直杯 倒鉢	古墳時代後期
			第 2 主 体 部	箱式石棺	0.73×0.29×0.25	隅丸 長方形	1.54×0.99×0.53	N-36°-W	復原器 直杯 鉗鉗車、刀子	—	
			—	—	—	—	—	—	—		
服 部 1号墓	長 方 形	直 径 16.0 短辺(12.8) 高さ (1.2)	第 1 主 体 部	木棺直葬	2.0×0.5×0.38	隅丸 長方形	2.94×1.48×0.68	N-45°-E	弥生土器 磁・器台 陶器 帽台・赤片	弥生土器 磁・器台 陶器 帽台・直・埴 瓦石	弥生時代後期
			第 2 主 体 部	木棺直葬	1.7×0.4×(0.2)	隅丸 長方形	2.52×1.22×0.26	N-46°-E	—	—	
			第 3 主 体 部	(木棺直葬)	—	隅丸 長方形	(2.30)×1.07×0.20	N-49°-E	—	—	
			第 4 主 体 部	(木棺直葬)	—	隅丸 長方形	2.38×0.97×0.16	N-42°-W	—	—	
			—	—	—	—	—	—	—	—	
服 部 2号墓	方 形	直 径 (9.0) 高さ (1.9)	第 1 主 体 部	木棺直葬	1.3×0.3×(0.3)	隅丸 長方形	2.23×0.92×0.21	N-13°-E	土器小片 埴輪器小片	一段墓構	(弥生時代後期)
服 部 3号墓	(方 形)	直 径 11.0 高さ (1.0)	第 1 主 体 部	木棺直葬	1.4×0.5×(0.4)	隅丸 長方形	2.96×1.31×0.99	N-36°-W	弥生土器 奈・直・ 高杯・器台・直 鉗鉗車	弥生土器	弥生時代後期 铁器土器
			第 2 主 体 部	(土壇墓)	—	隅丸 長方形	2.34×1.15×0.32	N-45°-E	弥生土器 器台	—	
			第 2 主 体 部	(土壇墓)	—	隅丸 長方形	2.30×1.13×0.36	N-60°-W	—	—	

その他の遺構調査一覧表

名 称	平 面 形 等	規 模 長軸×短軸×深さ(m)	主 軸 方 向	遺構内 排出施設	遺構内施設度標 長軸×短軸×深さ(m)	遺 物	備 考
S X - 0 1	隅丸長方形	1.49×0.92×0.34	N-19°-W	稚式石棺	(内底)0.80×0.23×0.11	土器器 口縁部(底入)	(古墳時代中・後期)
S X - 0 2	隅丸長方形	2.18×1.00×0.52	N-76°-E	(木棺直葬)	2.18×1.02×0.51	須恵器 盖杯・白付豆	古墳時代後期
S K - 0 1	隅丸長方形	(0.84)×0.65×0.41	N-16°-E	—	—	—	—
S K - 0 2	不正円形	1.21×1.01×0.73	—	中央穴	0.27×0.26×0.23	—	—
S K - 0 3	椭円形	1.11×0.94×1.12	N-17°-E	中央穴	0.37×0.35×0.36	—	—
S K - 0 4	不正円形	1.47×1.04×1.10	N-4°-W	—	—	—	34号墳墳頂北側

() 未発見、推定

図 版

図版 1



服部墳墓群調査地遠景(東上空から)



服部墳墓群調査地遠景(北西上空から)

図版 2



服部16号墳、服部1・2号墓全景(北西上空から)



服部17・18・19号墳全景(東上空から)

図版 3



服部16号墳、服部1・2号墓全景(北東上空から)



服部17・18・19号墳全景(北上空から)

図版 4



服部18号墳第Ⅰ主体部上層出土遺物（原寸大）



服部19号墳第Ⅰ主体部出土遺物



服部3号墳第Ⅰ主体部出土遺物

図版 5



腹部16号墳調査前
(南東から)



腹部16号墳調査後
(北西から)



腹部16号墳墳丘断面F-F'
(南西から)

図版 6



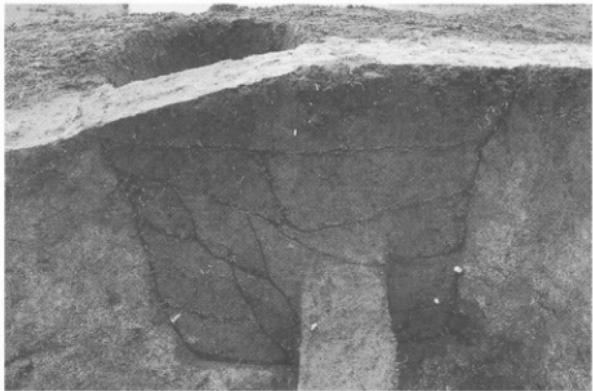
図版 7



服部16号墳第2主体部
埋土状況
(南西から)



服部16号墳第2主体部
横出状況
(南東から)



服部16号墳第3主体部
埋土状況
(南東から)

図版 8



服部16号墳第3主体部
検出状況
(北西から)



服部16号墳第4主体部
検出状況
(南西から)

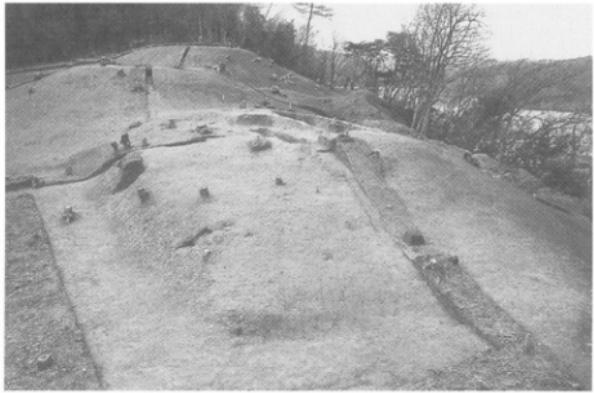


服部16号墳南東据
遺物出土状況
(南西から)

図版 9



服部17号墳調査前
(西から)



服部17号墳調査後
(南東から)



服部17号墳全景
(南西から)

図版10



服部17号墳東掘断面J'-J
(南から)

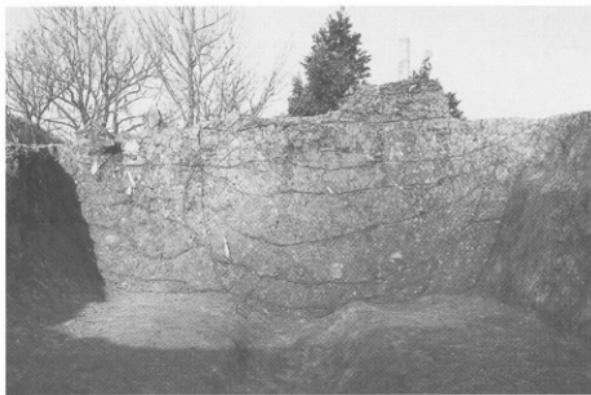


服部17号墳第1・2主体部
検出状況
(南西から)



服部17号墳第1主体部
埋土状況
(北東から)

図版11



図版12



服部17号墳第2主体部
検出状況
(南東から)



服部17号墳第2主体部
遺物出土状況
(北東から)



服部17号墳第2主体部
遺物出土状況
(南東から)

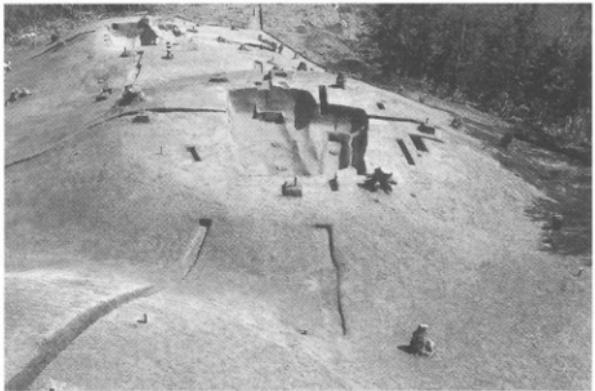
図版13



腹部18号墳調査前
(西から)

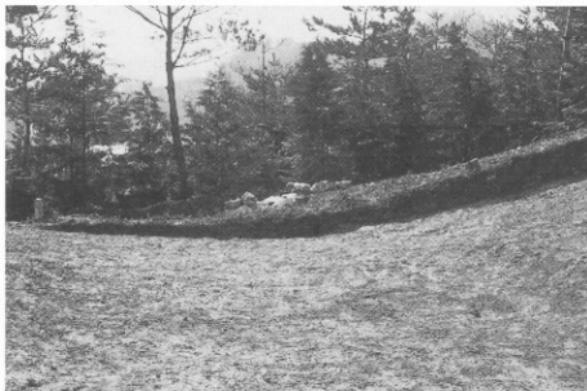


腹部18号墳調査後
(北東から)



腹部18号墳全景
(西から)

図版14



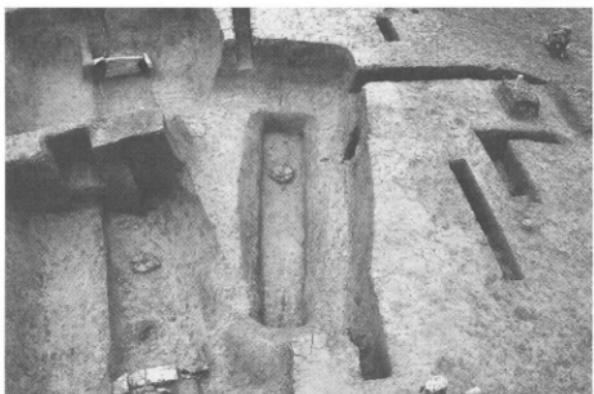
服部18号墳東裾断面L—L'
(北から)



服部18号墳第1・2主体部
検出状況
(西から)



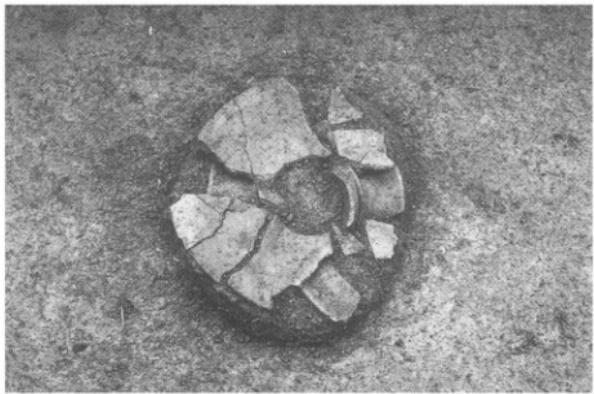
服部18号墳第1主体部
埋土状況
(西から)



服部18号墳第1主体部
検出状況
(西から)



服部18号墳第1主体部
遺物出土状況
(西から)



服部18号墳第1主体部
遺物出土状況
(北西から)

図版16



服部18号墳第2主体部
埋土状況
(南東から)



服部18号墳第2主体部
埋土状況
(東から)

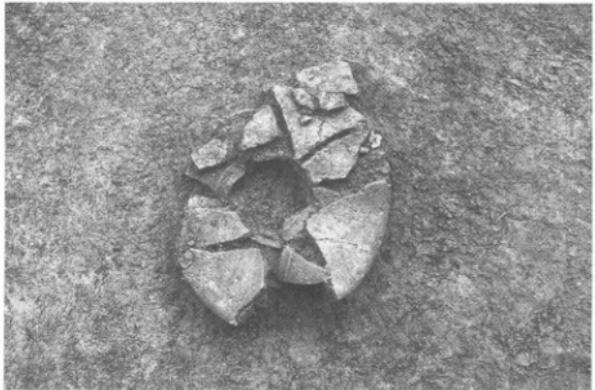


服部18号墳第2主体部
検出状況
(北西から)

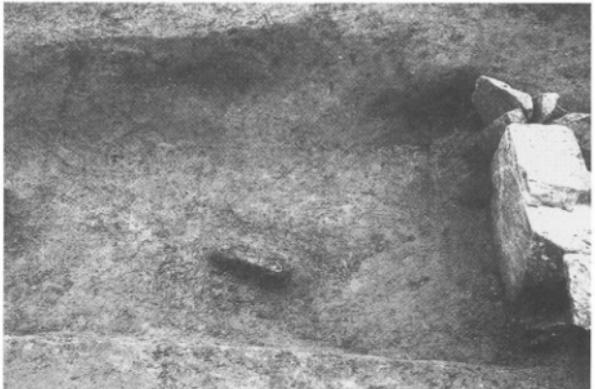
図版17



服部18号墳第2主体部
西侧小口・遺物出土状況
(東から)



服部18号墳第2主体部
西側遺物出土状況
(北西から)



服部18号墳第2主体部
西側遺物出土状況
(北から)

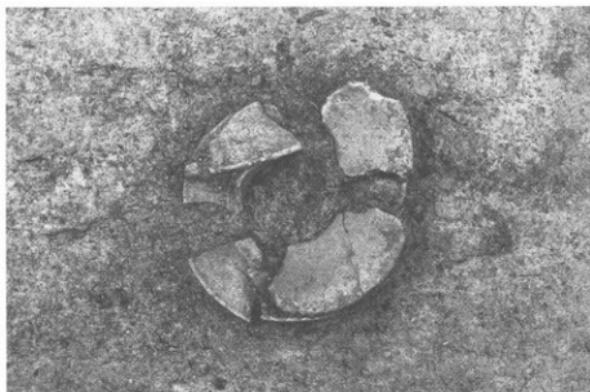
図版18



服部18号墳第2主体部
西側遺物出土状況
(北西から)



服部18号墳第2主体部
東側遺物出土状況
(西から)



服部18号墳第2主体部
東側遺物出土状況
(南東から)

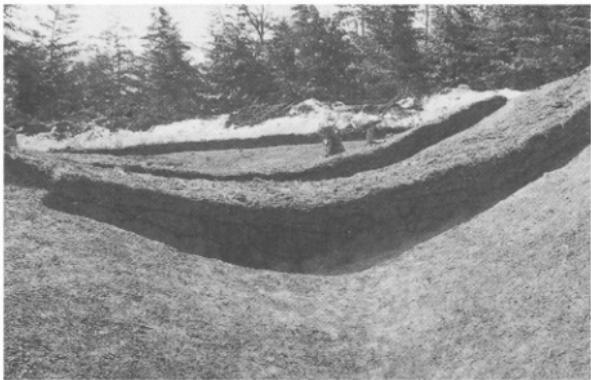
図版19



服部19号墳調査前
(南東から)

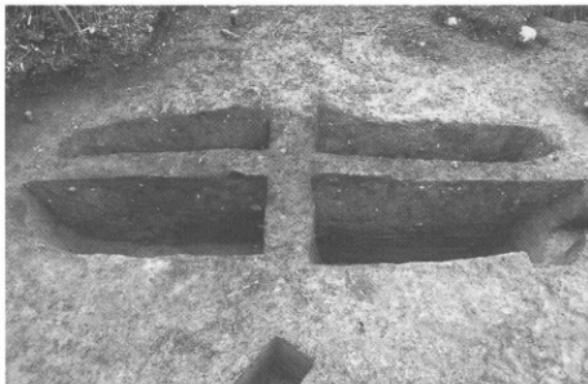


服部19号墳調査後
(北東から)



服部19号墳東側周溝
埋土状況
(北から)

図版20



服部19号墳第1主体部
埋土状況
(南東から)



服部19号墳第1主体部
埋土状況
(北東から)



服部19号墳第1主体部
検出状況
(南東から)



服部19号墳第1主体部
南西側裏込石検出状況
(北東から)



服部19号墳第1主体部
遺物出土状況
(北東から)



服部19号墳第1主体部
遺物出土状況
(北東から)

図版22



服部19号墳第2主体部
埋土状況
(西から)



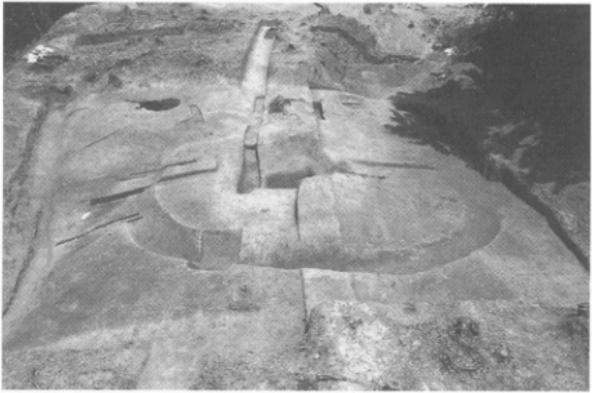
服部19号墳第2主体部
土器棺検出状況
(北から)



服部19号墳第2主体部
棺内状況
(北から)



服部34号墳調査前
(西から)



服部34号墳調査後
(西から)



服部34号墳盛土状況 O'-O
(南西から)

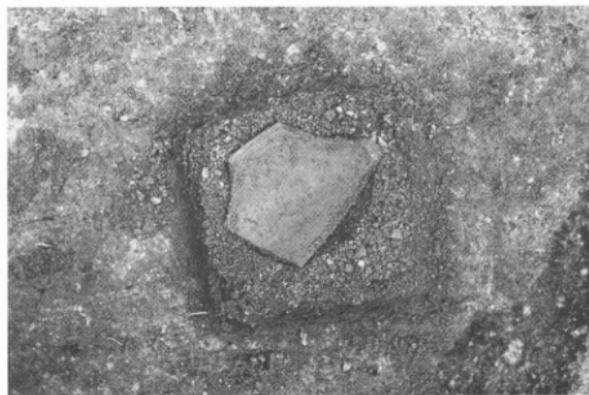
図版24



服部34号墳第1主体部
埋土状況
(東から)



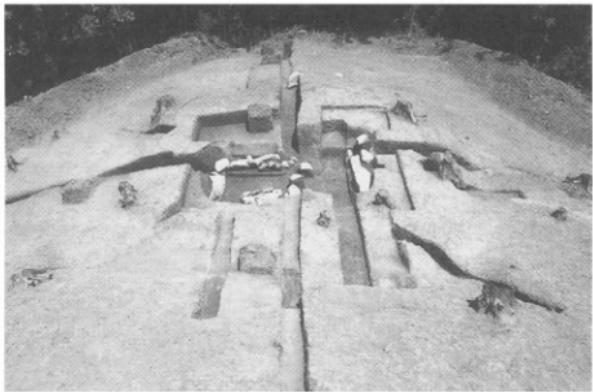
服部34号墳第1主体部
検出状況
(北から)



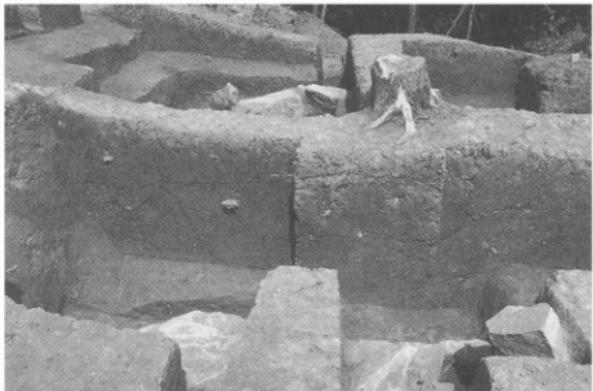
服部34号墳第1主体部
遺物出土状況
(北から)



服部36号墳調査前
(西から)



服部36号墳全景
(南西から)



服部36号墳第1主体部
埋土状況
(南東から)

図版26



服部36号墳第1主体部
検出状況
(南西から)



服部36号墳第1主体部
墓磚検出状況
(北東から)



服部36号墳第2主体部
石棺蓋石検出状況
(北東から)



服部36号墳第2主体部
遺物出土状況
(北東から)



服部36号墳第2主体部
石棺検出状況
(南西から)



服部36号墳第2主体部
石棺検出状況
(北西から)

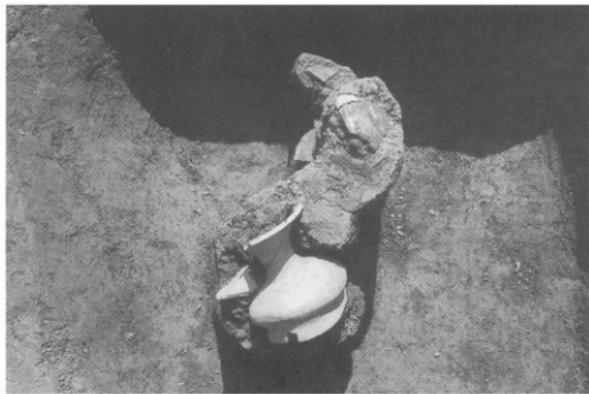
図版28



SX-01 検出状況
(南西から)



SX-02 検出状況
(南西から)



SX-02 残物出土状況
(北西から)



服部1号墳調査前
(北西から)

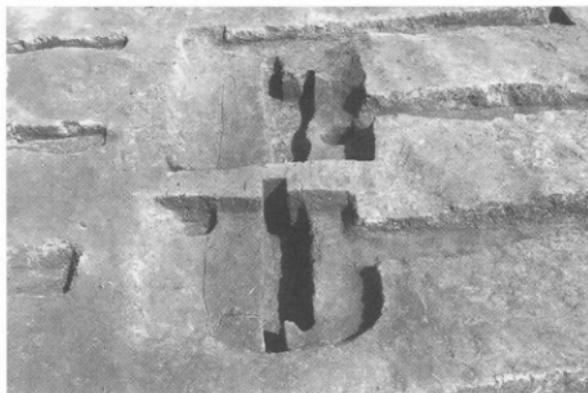


服部1号墳調査後
(北西から)



服部1号墳第1主体部
埋土状況
(北東から)

図版30



服部1号墓第1主体部
木棺痕跡検出状況
(南西から)



服部1号墓第1主体部
検出状況
(南東から)



服部1号墓第2主体部
埋土状況
(南東から)



服部1号墓第2主体部
検出状況
(南西から)



服部1号墓第3主体部
検出状況
(南西から)



服部1号墓第4主体部
検出状況
(北西から)

図版32



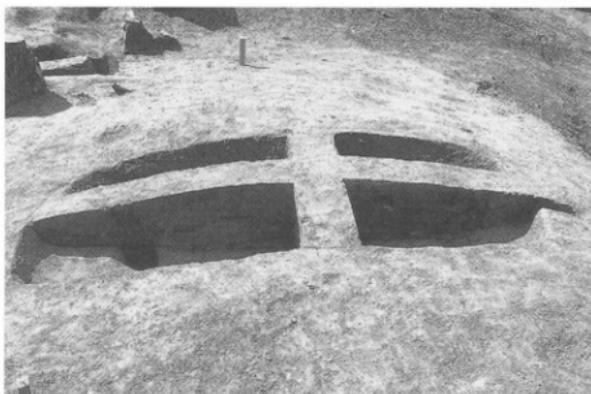
服部2号墓調査前
(南西から)



服部2号墓調査後
(南から)



服部2号墓北裾断面A'-A
(西から)



服部 2号墓第1主体部
埋土状況
(東から)



服部 2号墓第1主体部
埋土状況
(南から)



服部 2号墓第1主体部
検出状況
(南東から)

図版34



服部3号墓調査前
(南西から)



服部3号墓調査後
(南西から)



服部3号墓第1主体部
供獻土器出土状況
(北東から)



服部 3号墓第1主体部
検出状況
(北西から)



服部 3号墓第2主体部
検出状況
(北西から)

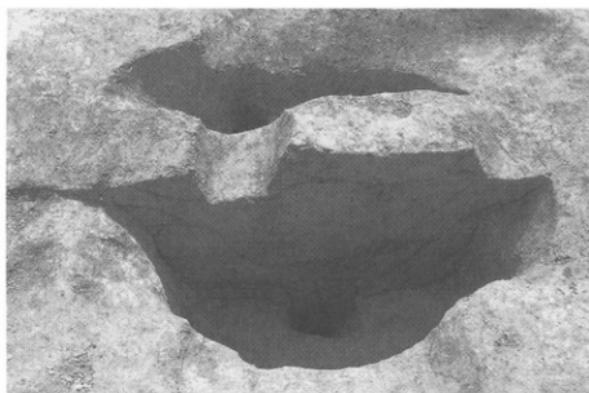


服部 3号墓第3主体部
検出状況
(北東から)

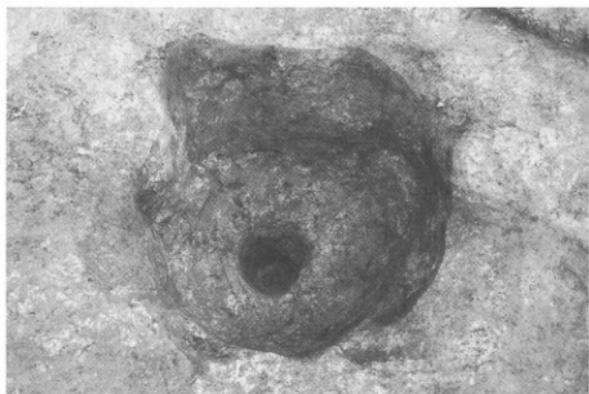
図版36



SK-01 検出状況
(南西から)



SK-02 埋土状況
(西から)



SK-02 検出状況
(西から)



SK-03 検出状況
(北東から)



SK-04 検出状況
(北から)



C9 調査区全景
(南から)

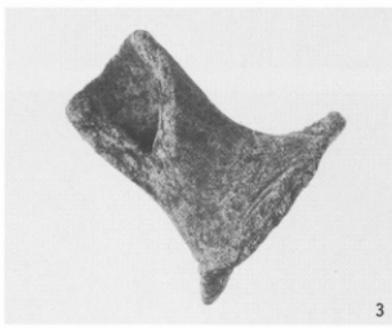
図版38



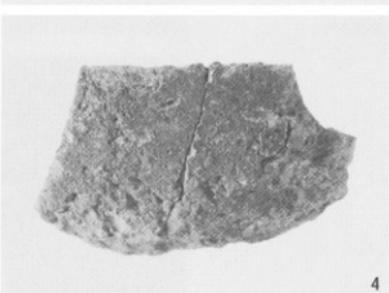
1



2



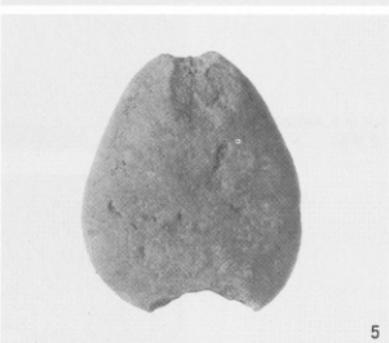
3



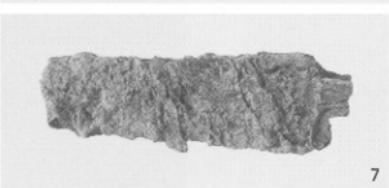
4



6



5



7

服部16号墳出土遺物



8



9



1

服部17号墳第1主体部出土遺物



2

服部16号墳出土遺物

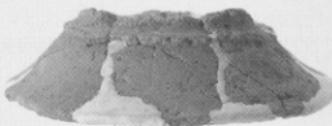


3



4

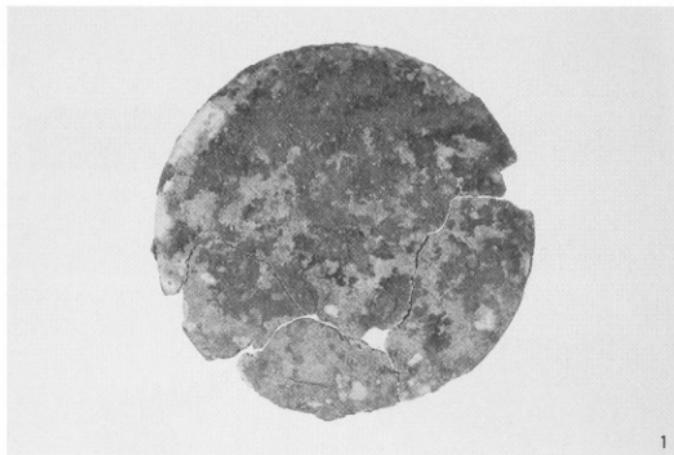
服部17号墳墳頂出土遺物



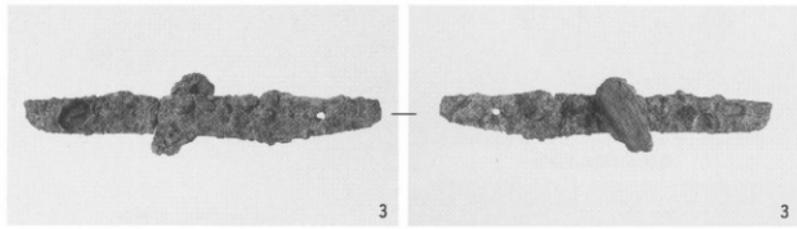
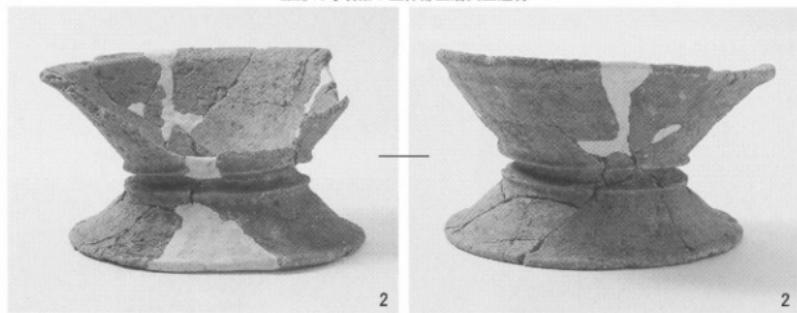
5

服部17号墳第2主体部出土遺物

図版40



服部18号墳第1主体部上層出土遺物

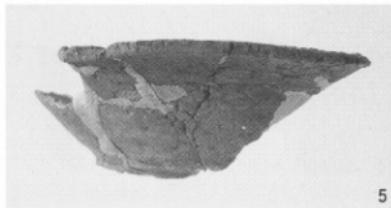


服部18号墳第1主体部出土遺物

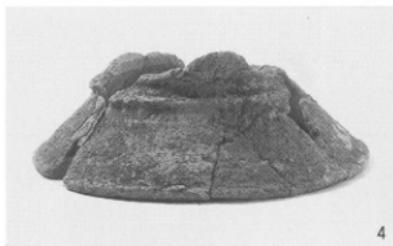
图版41



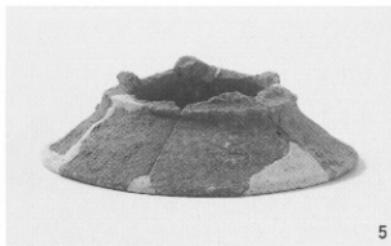
4



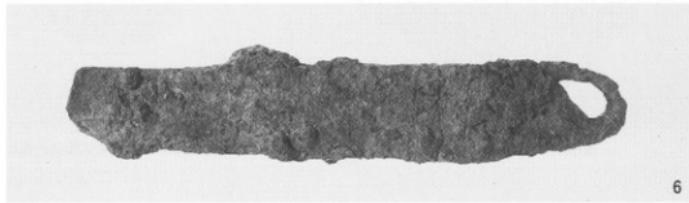
5



4



5



6

服部18号墳第2主体部出土遺物

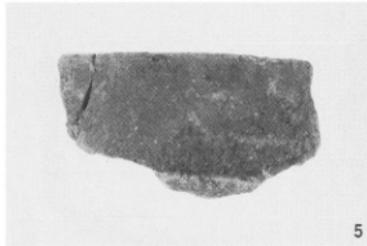


2

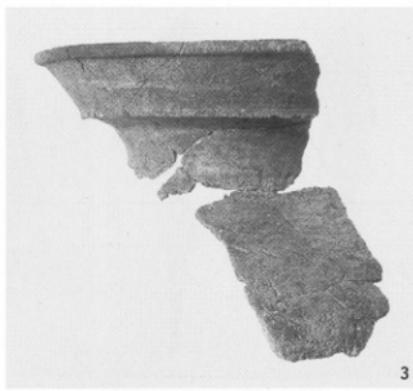


4

服部19号墳第1主体部出土遺物



5

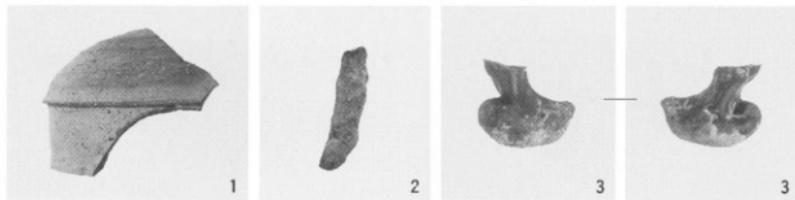


3

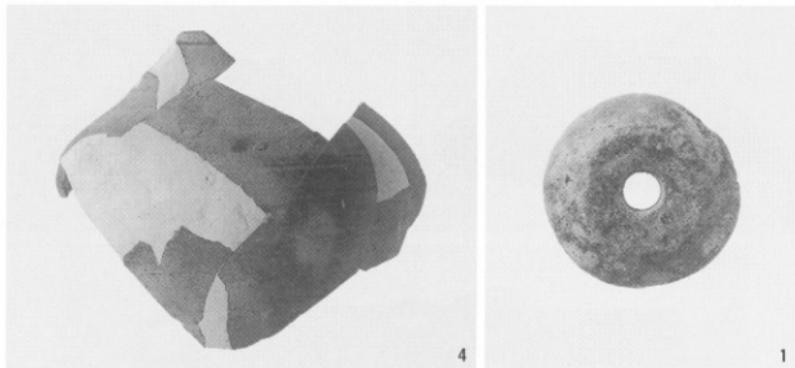
服部19号墳東側周溝出土遺物

服部19号墳第2主体部出土遺物

図版42

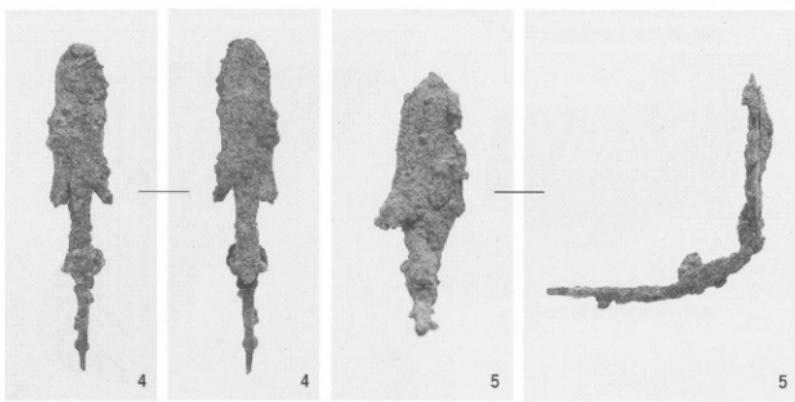
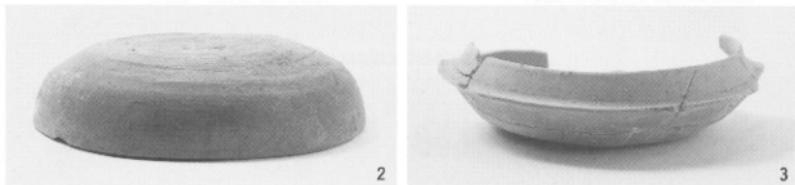


服部34号墳第1主体部出土遺物

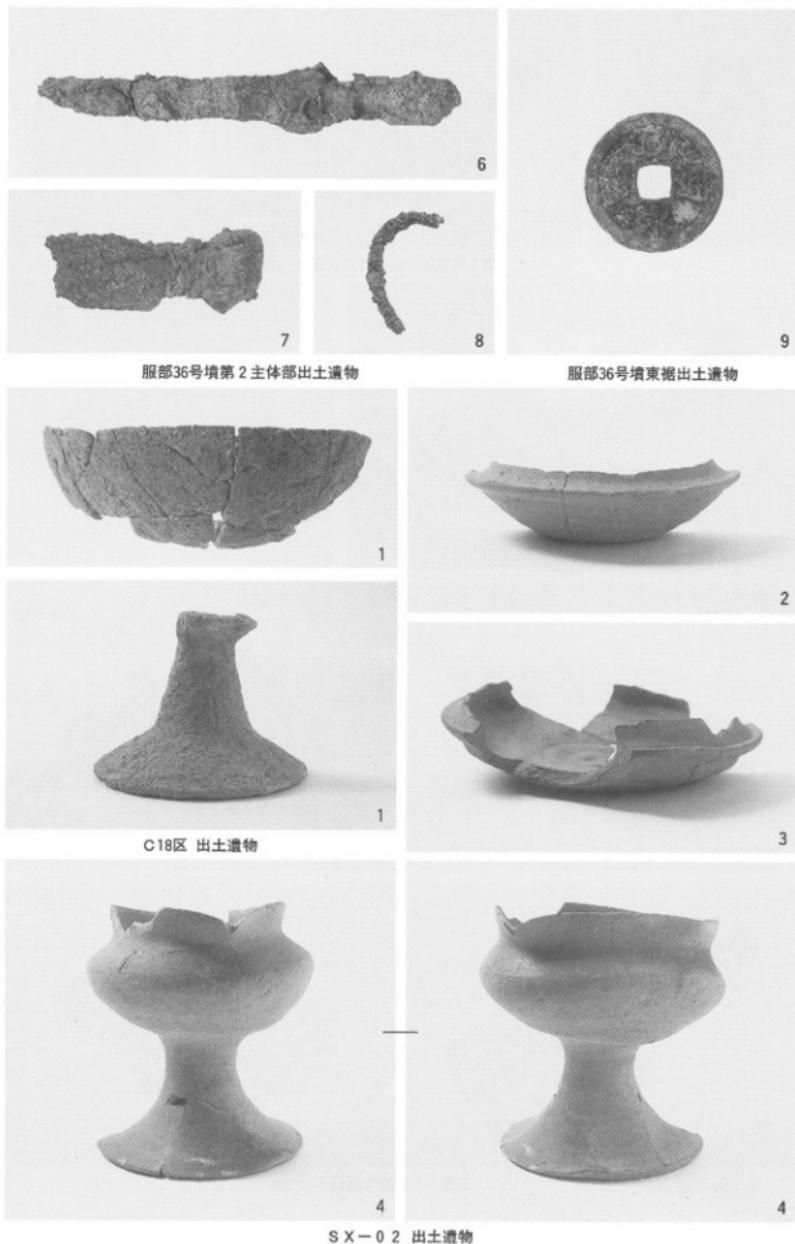


服部34号墳周辺出土遺物

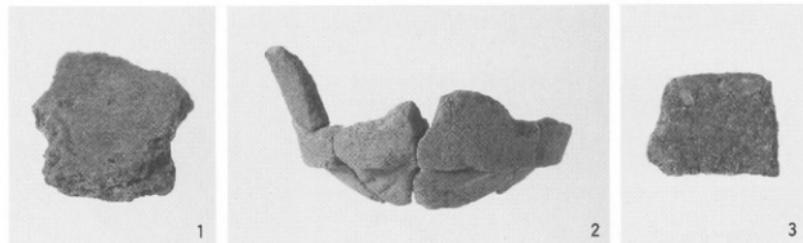
服部36号墳第1主体部出土遺物



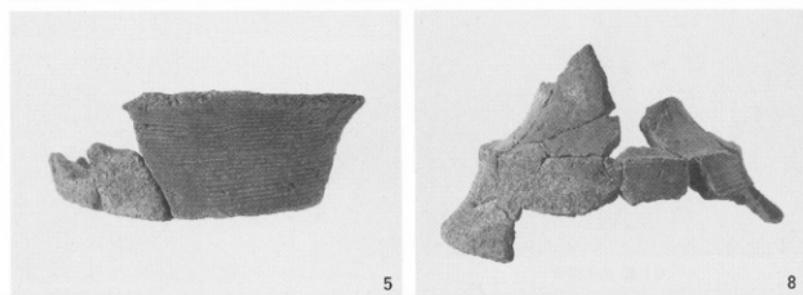
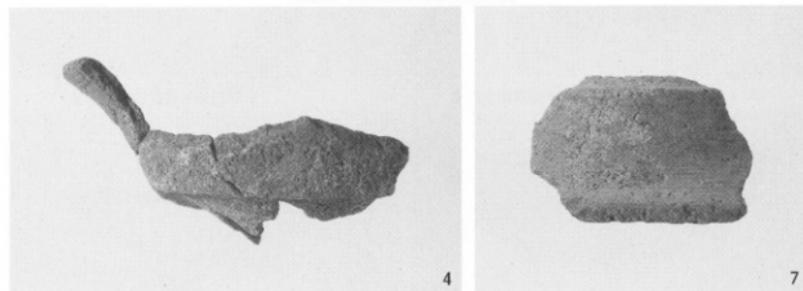
服部36号墳第2主体部出土遺物



図版44

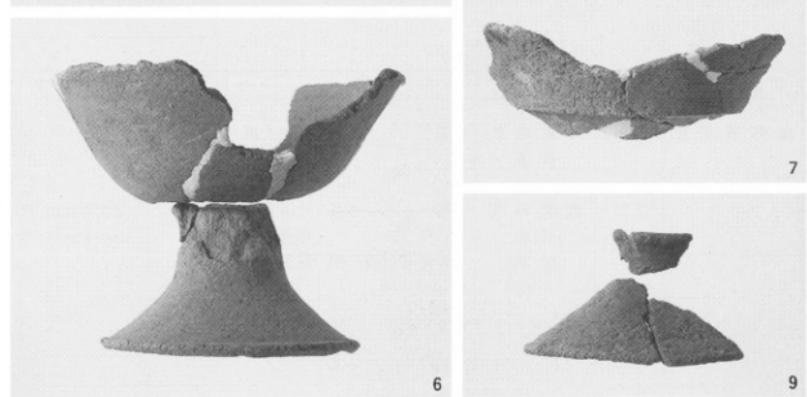
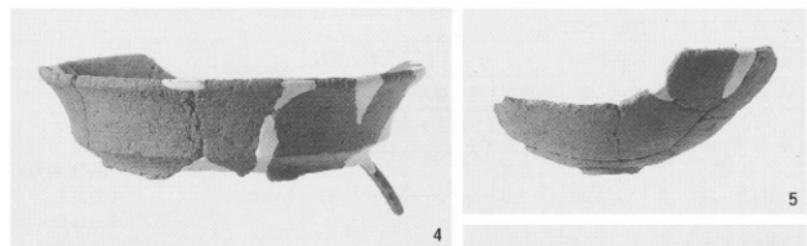
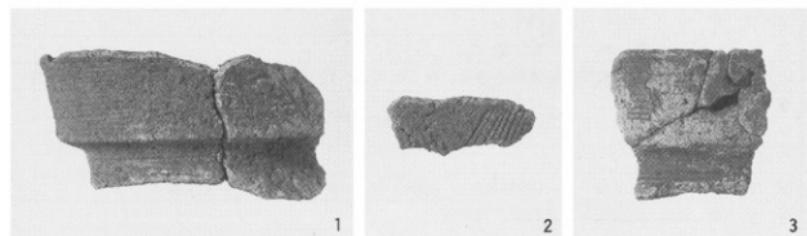


服部1号墓第1主体部出土遺物

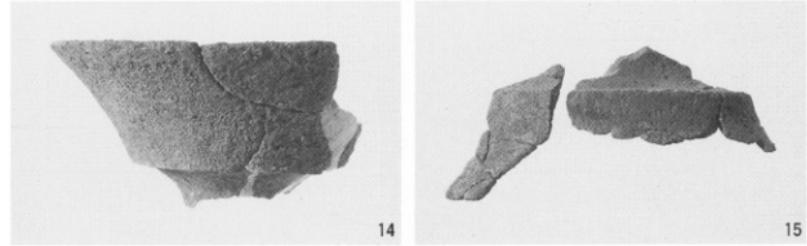


服部1号墓出土遺物

図版45



服部3号墓第1主体部出土遺物



服部3号墓第2主体部出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	はっとりふんばぐん						
書名	服部墳墓群						
副書名	姫鳥線整備促進関連事業に係る服部16~19・34・36、服部1~3号墓の発掘調査						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	谷口恭子	山田真宏	前田均	藤本隆之	杉谷美恵子		
編集機関	財団法人 姫鳥取市文化財団						
所在地	〒680-0015 姫鳥取県鳥取市上町88 TEL (0857) 23-2149						
発行年月日	西暦 2001年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
服部墳墓群 (服部16~19 34、36号墳 服部1~3 号墓)	鳥取市本高 服部	31 201	35° 28' 31"	134° 11' 58"	2000.11.18 ~ 2001.03.31	2,800m ²	姫鳥線 (中国横断道) 整備促進 関連事業 に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
服部墳墓群	墳墓 古墳	弥生時代 後期 古墳時代 前期 後期	墳墓 古墳 (他)埋葬施設	3基 6基 2基	弥生土器 鐵鎌 土師器 須恵器 鐵製品 (鉄刀、鐵鎌、刀子) 振文鏡(径7.8cm) 石製防錐車、石鍤		・鼓形器台軸用枕 ・長さ4.5mの木棺
			土坑	4基			

服部墳墓群

姫鳥線整備促進関連事業に係る
服部16~19・34・35号墳、服部1~3号墓の発掘調査

平成13年3月31日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所
